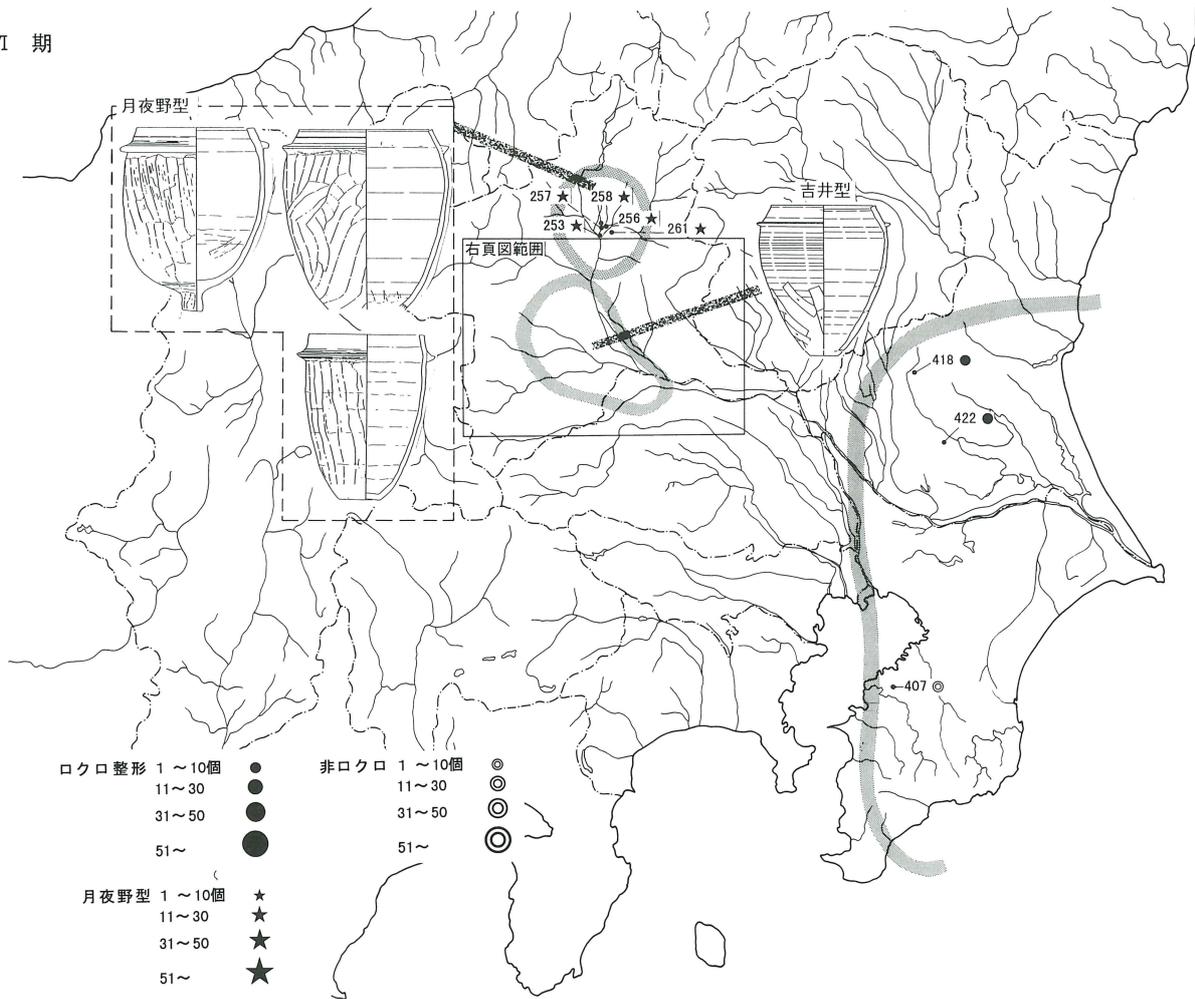


第891図 関東甲信地方羽釜分布図（1）

VI 期



1 中堀遺跡	102 神保富士塚遺跡	121 古立東山遺跡	166 国分境遺跡	221 房谷戸遺跡	261 中棚遺跡
68 下淵名塚越遺跡	103 西原遺跡	134 下佐野遺跡	170 鳥羽遺跡	223 空沢遺跡	407 境遺跡
71 西今井遺跡	104 折茂東遺跡	135 熊野堂遺跡	177 北原遺跡	239 大久保A遺跡	418 小山遺跡
88 上栗須遺跡	110 長根羽田倉遺跡	137 舟橋遺跡	190 上野国分寺尼寺中間地域	253 下川田平井遺跡	422 寄居遺跡
89 上栗須寺前遺跡群	111 榑谷戸遺跡	146 石神・五反田(Ⅱ)遺跡	191 清里・陣場遺跡	256 戸神諏訪遺跡	
100 黒熊栗崎遺跡	112 矢田遺跡	153 田端遺跡	209 芳賀東部団地遺跡	257 沼田北部地区遺跡群	
101 黒熊中西遺跡	118 南蛇井僧光寺遺跡	163 融通寺遺跡	220 分郷八崎遺跡	258 石墨遺跡	

遜るものは非常に少ないと思われる。はっきりとした根拠はないが、初期の月夜野型羽釜に伴出する土器群は、若干吉井型羽釜のそれより古い印象である。

吉井型羽釜のもっとも古い一群には下佐野遺跡Ⅰ地区78号住居（第896図）のように、石墨遺跡や下川田平井遺跡の羽釜の形態と類似する例がみられることから、月夜野型羽釜の一部が、吉井型羽釜の生産開始時に、何らかの影響を与えたものとする。

もっとも、この吉井型羽釜に類似する月夜野型羽釜の出土量は非常に少ない。月夜野型羽釜の主体は、底

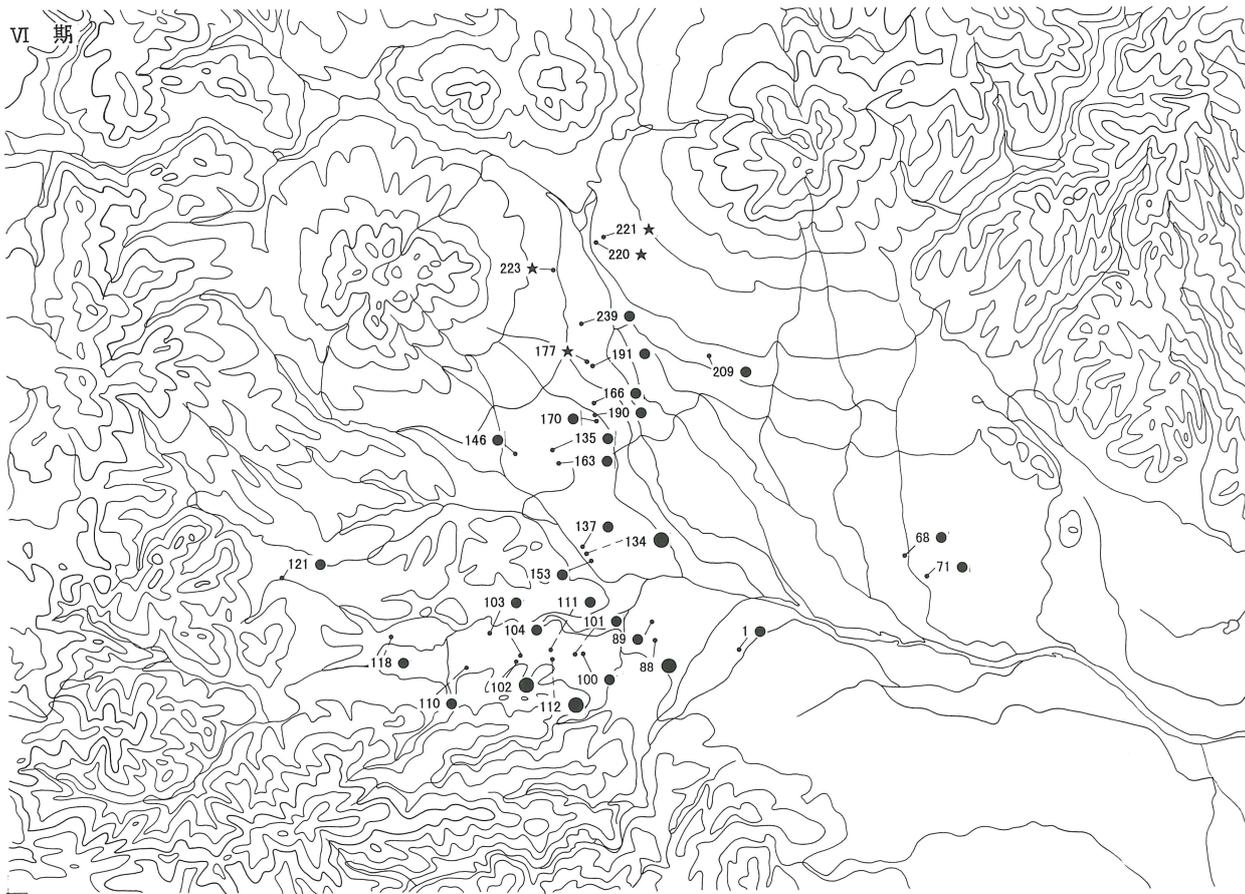
部が大きく、鋸部を境に屈曲し、口縁部は直立する形態のものである。

また、吉井型羽釜のプロポジションは、出現段階（Ⅵ期）から多様であり、胴部のヘラケズリをほとんど施さないなど、月夜野型羽釜との相違点もかなりある。

吉井型羽釜が上野以外で分布しているのは、中堀遺跡（1）だけであり、土師器甕が卓越する北武蔵のなかで、いち早く上野で生産された煮炊具を使用していることは注目される。

中堀遺跡では、Ⅲ期に造営された寺院関連建物（第

第892図 羽釜分布拡大図(1)



1～3号建物地形跡)に葺かれていた軒丸瓦の瓦当文様が、群馬県吉井町黒熊中西遺跡(101)のものと類似するなど、集落成立当初から上野との交流が極めて深かったことをうかがわせる。

このような上野との繋がりの深さが、日常什器である煮炊具の採用にも影響し、Ⅵ期での羽釜の使用となって現れたと考えられる。

中堀Ⅶ期(第893・894図)

Ⅶ期としたが、前述の通りもう少し時間幅を考慮して、10世紀前半と考えてもよいであろう。

この段階では、関東甲信地方の広い範囲で、様々なタイプの羽釜がみられるようになる。

月夜野型・吉井型以外にも、甲斐では甲斐型土器の器種構成の中に、羽釜が確実に組み込まれて存在する。

この羽釜の分布は、国府周辺を中心とするが、信濃との国境に近い、北巨摩郡にまで広範囲にみられる。

甲斐型土器の羽釜は、甲斐型の甕と同じように、ハケにより整形され、胎土も同じである。一定量の出土がみられるが、甕の出土量には遠く及ばず、煮炊具の主体とはなっていない。

相模でも在地産土器の器種構成の一つとしてみられる。分布は南部の平塚市周辺以外では少量しかみられず、平塚市周辺の集落から、そのほとんどが出土している。

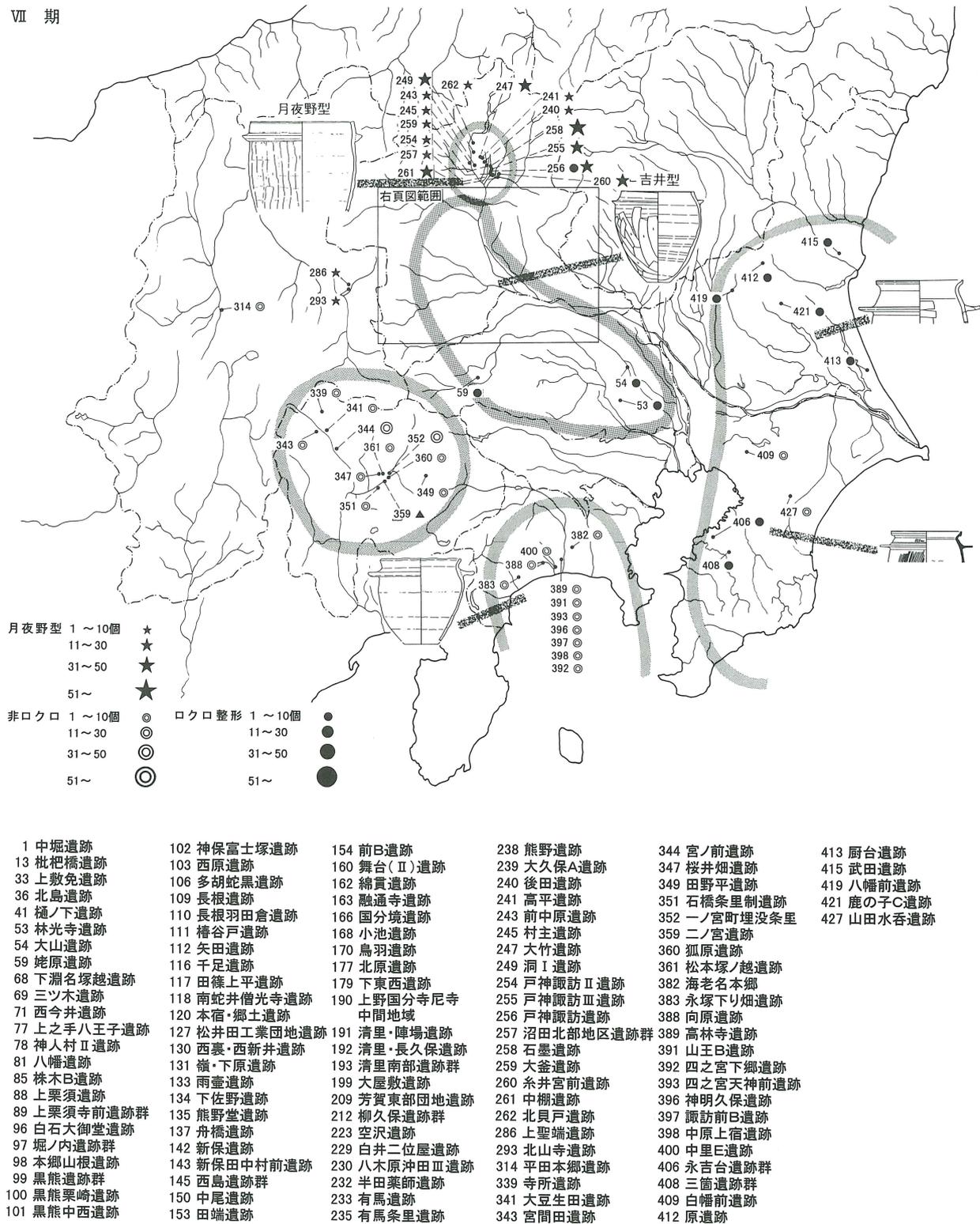
甲斐の羽釜同様に出土量は少なく、煮炊具の主体とはならない。

相模の羽釜には、口縁部がくの字に屈曲するものと、内湾気味のもの、弱く開くものの三者がある。

房総半島、常陸ではⅥ期にみられた、口縁部がくの字に屈曲する羽釜が引き続きみられる。Ⅵ期よりもやや広い範囲に分布するようになるが、出土量はとても少なく、甲斐や相模のように、少ないながらも、器種構

第893図 関東甲信地方羽釜分布図(2)

VII 期



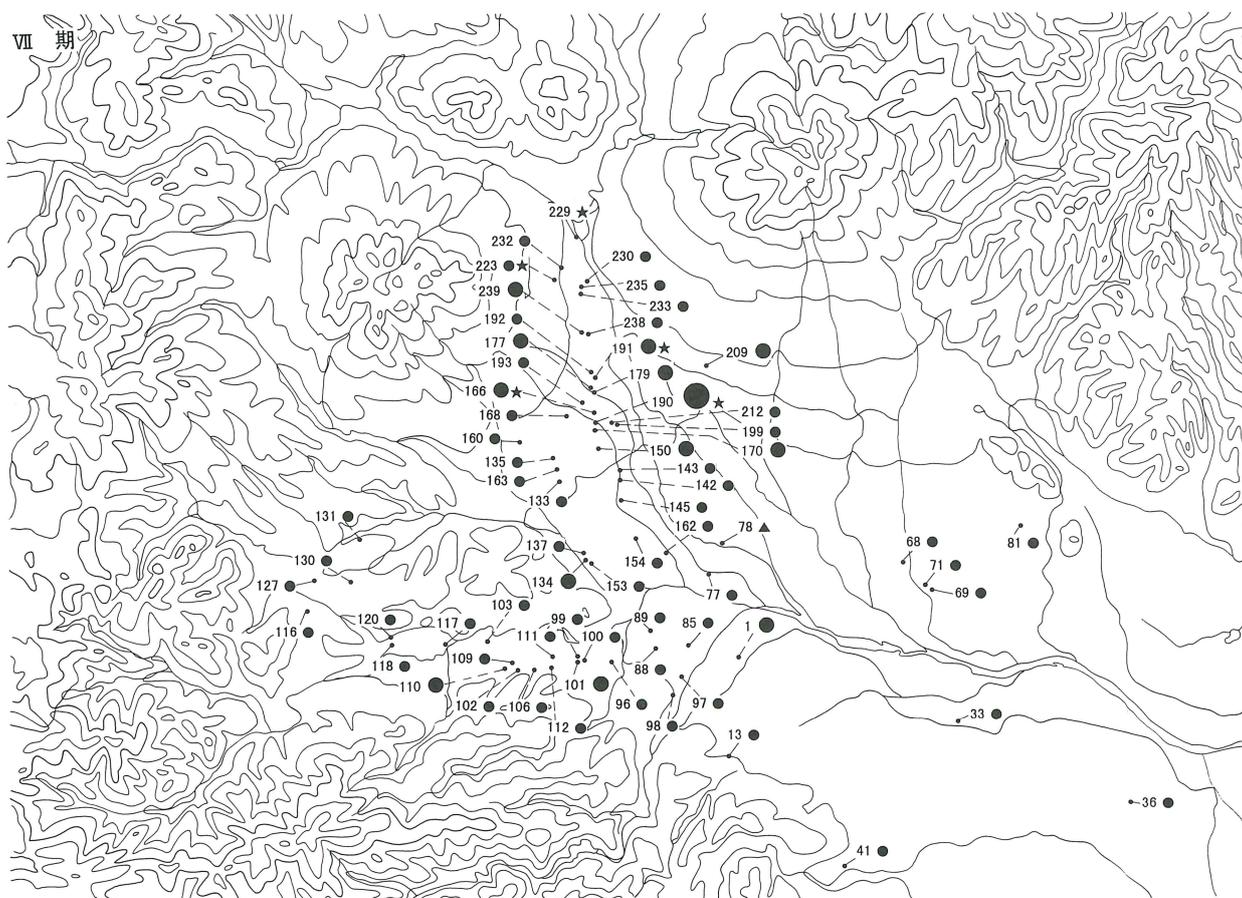
成の一翼を担うというようなことはない。

分布図にはドットを入れていないが、相模と房総半島から常陸にかけての地域には、羽釜の鏝に当たる部

分だけの、「釜輪」と呼ばれる土器が極少量みられる。

甕をこの「釜輪」にはめ込んで、羽釜のようにして使用したものと思われるが、極めて特殊なものである

第894図 羽釜分布拡大図(2)



といえる。

上野の羽釜には、Ⅵ期同様に、月夜野型と吉井型の二者がある。

月夜野型の羽釜は、出土する遺跡の数は増加するが、分布範囲はⅥ期とほとんど変わらない。

しかし、信濃の佐久平の上聖端遺跡(286)と北山寺遺跡(293)で、非常によく似たものが出土している(第895図)。実見したわけではないので断定はできないが、図でみる限り形態、整形技法ともに、月夜野型の特徴を示している。

また、上野国分寺・尼寺中間地域(190)でも出土している。このように、月夜野型本来の分布範囲を大きく逸脱するものは、二次的な流通と考えられ、単発的かつ小規模なものである。

月夜野型羽釜の分布の中心である、利根・水上・吾妻地域では、Ⅵ期まで煮炊具の中心であった武蔵型甕

はほとんど姿を消し、羽釜が煮炊具の主体となる(第880・881図参照)。

吉井型羽釜を出土する遺跡は急増する。主な分布範囲は、Ⅵ期とそれほど変化せず、中心は利根川西岸と鎗川流域であるが、古利根川を下った、埼玉県の林光寺遺跡(53)、大山遺跡(54)など大宮台地にも少数みられるようになる。

両者の羽釜は、実見した限りでは吉井型と断定はできないが、ロクロ整形の感じや、鏝の様相、口縁端部の面取り、焼成がやや甘い点など、吉井型羽釜の影響下にあることは間違いない。

両遺跡のものともに、口縁部が弱く外傾することから、甕とも考えられるが、甕だとしても吉井型の羽釜に伴う甕と類似する。

Ⅶ期には、それまで上野、武蔵ををを中心に広く分布していた武蔵型甕は、北武蔵から上野南部にその分布

範囲が狭まり、土師器甕の地域色が強くなる。

大宮台地周辺でも、ロクロ整形酸化焰焼成の甕が、土師器焼成坑といわれる簡易な焼成施設で生産されるようになる。林光寺遺跡や大山遺跡から出土した羽釜もこうした煮炊具の大きな変化に対応するものであろう。

吉井型羽釜の分布の中心である群馬県南西部では、遺跡数の増加もさることながら出土量が急増する。

特に生産地と思われる鎗川流域の遺跡よりも、国府を中心とした、遺跡からの出土の多さが目立つ。このように、国府周辺の集落から多く出土する傾向は、甲斐や相模でもみられたもので、この段階の土器の流通システムを考える上で注目される事象である。

羽釜の出土量は増加するが、前述の通りそれまで煮炊具の主体であった武蔵型甕が依然として、北武蔵から上野南部の範囲には多く分布する。

特に、北武蔵北部から上野南東部にかけては、この傾向が顕著であり、吉井型羽釜の進出を拒んでいるかのようにみえる。

また、利根川西岸の国府周辺の集落でも、羽釜が武蔵型甕を完全に凌駕したわけではなく、両者は共存しているのである。

このことは、この地域が古墳時代以降、煮炊具だけでなく、供膳具にも土師器が一定量使用され続けるという、非常に特殊な地域であることと無関係ではあるまい。

奈良平安時代を通じて、武蔵型甕や北武蔵型坏、さらに土師器坏A・Bを多量に且つ、広範囲に流通させ

た背景には、在地の強力な勢力の存在がうかがえる。

これら在地に根差した勢力を一度に払拭し、須恵器技術を使用する羽釜に一気に転換することは不可能であったのであろう。

先に国府を中心とする地域により羽釜が多く出土するという傾向を指摘したが、10世紀前半という時期は、在地勢力の拠点であった郡家はすでになくなり、国府を中心とした社会への再編成の時期であったと思われる。

社会背景のこのような変化が、土器生産体制にも少なからず影響を与え、次第に再編成されていったのである。その結果として、武蔵型甕から吉井型羽釜への転換が図られたのであろう。

中堀Ⅷ・Ⅸ期（第897・898図）

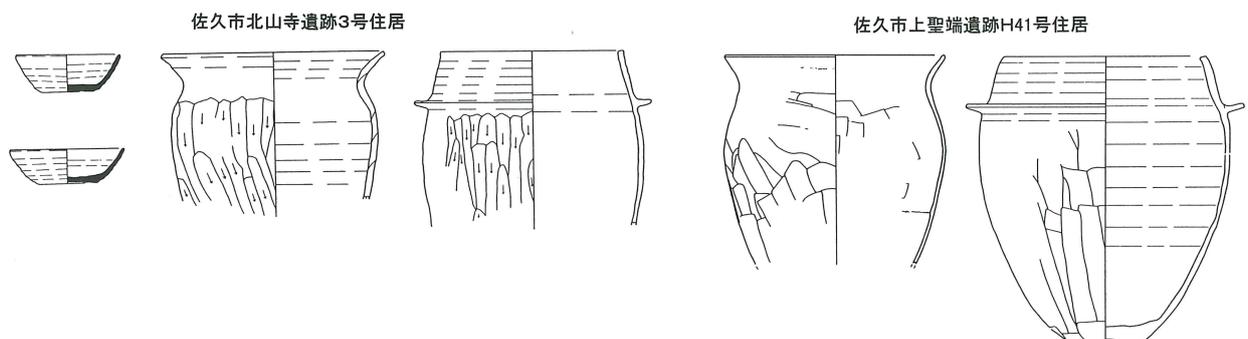
Ⅷ期とⅨ期は、羽釜と供膳具の特徴だけでは、区別が困難で、まとめて扱う。年代的には10世紀後半である。

関東甲信地方での羽釜の最盛期である。

分布は信濃、南武蔵などにもみられるようになり、甲斐・相模では、出土する遺跡が増加する。逆に、房総半島や常陸では減少するが、もともと出土量が非常に少ないことから、あまり大きく変化していないと考えた方が妥当であろう。

最盛期といっても、煮炊具の主体となり、多量に出土するのは、上野から北武蔵の一部（賀美・児玉郡など）だけの話で、ほかの地域ではⅧ期同様に、煮炊具の主体となることはなく、在地色の強い煮炊具が使用される（第882・883・884・885図参照）。

第895図 佐久平の10世紀前半の羽釜



月夜野型羽釜は、相変わらず利根・水上・吾妻の山間地域を中心として分布しているが、上野南部の平野部での出土例も増加している。

吉井型羽釜は、まさに爆発的といえる増加を示す。北武蔵北部・上野南部では、武蔵型甕の流れを引く土師器甕は、ほとんど払拭され煮炊具の主体は羽釜に取って代わる。

分布範囲も、西は佐久平、東は東毛地域にまで広がる。また、中武蔵といわれる、比企・入間地方にも分布がみられ、その延長線上の武蔵国府周辺でも少量みられる。

この段階になると、ロクロ整形か判断の難しい羽釜が一定量みられるようになる。分布図上に▲のドットで表したものがそれで、東毛地域に分布がやや偏る傾

向がある（南武蔵に分布するものは、吉井型羽釜ではなく在地の羽釜である）。

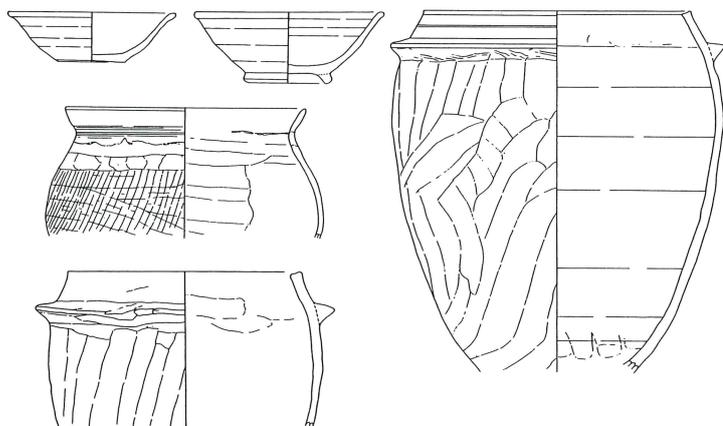
東毛地域には、確実にロクロ整形ではない羽釜が登場する。焼成もロクロ整形の羽釜のように甘い感じではなく、酸化焰焼成であるが、武蔵型甕のように堅く焼き締められるもので、吉井型羽釜とは一線を画すものである。近年「東毛型」と呼ばれているものであろう。（桜岡1997）

この東毛型の分布範囲は、非常に狭く、まさに「東毛」だけである。ただし、中堀遺跡から出土している、土師器の羽釜Aとしたものが、該当する可能性があり、今後、利根川対岸の妻沼低地付近で、出土する可能性が高い。

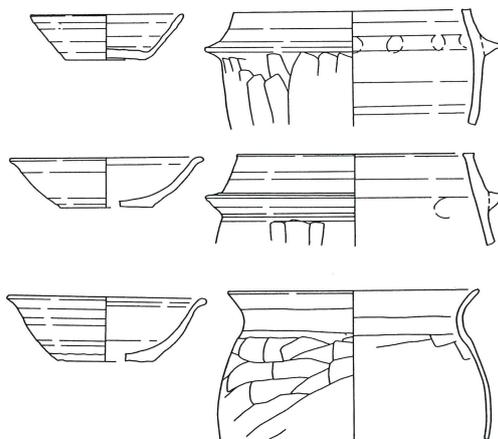
東毛型の羽釜は、分布範囲が狭いだけでなく、出土

第896図 10世紀初頭の羽釜

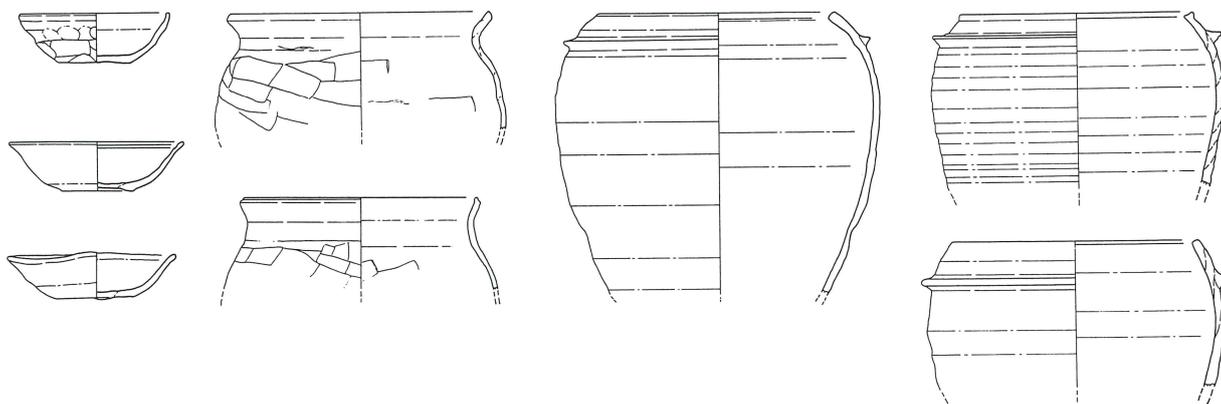
沼田市石墨遺跡B区12号住居



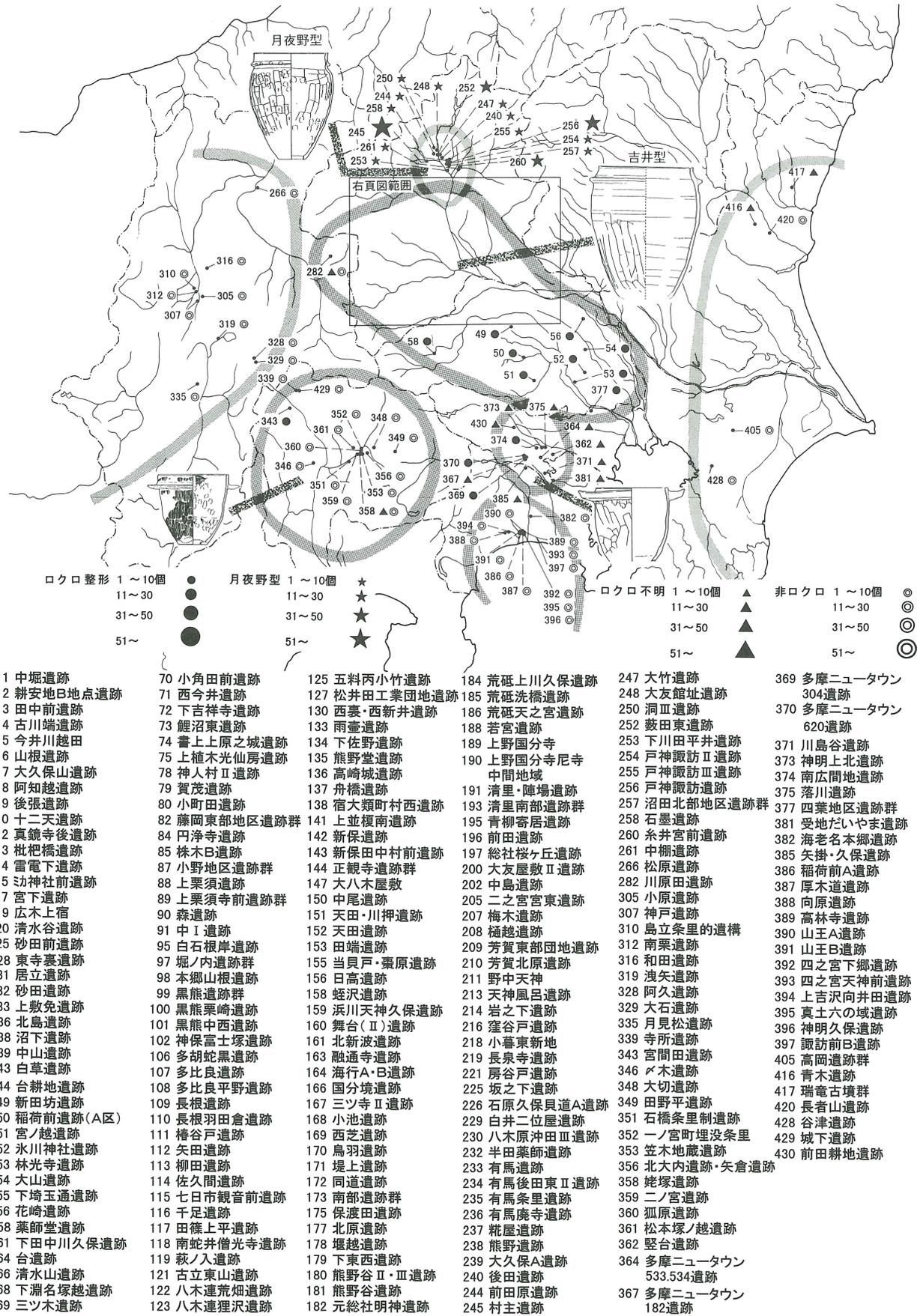
沼田市下川田平井遺跡19号住居



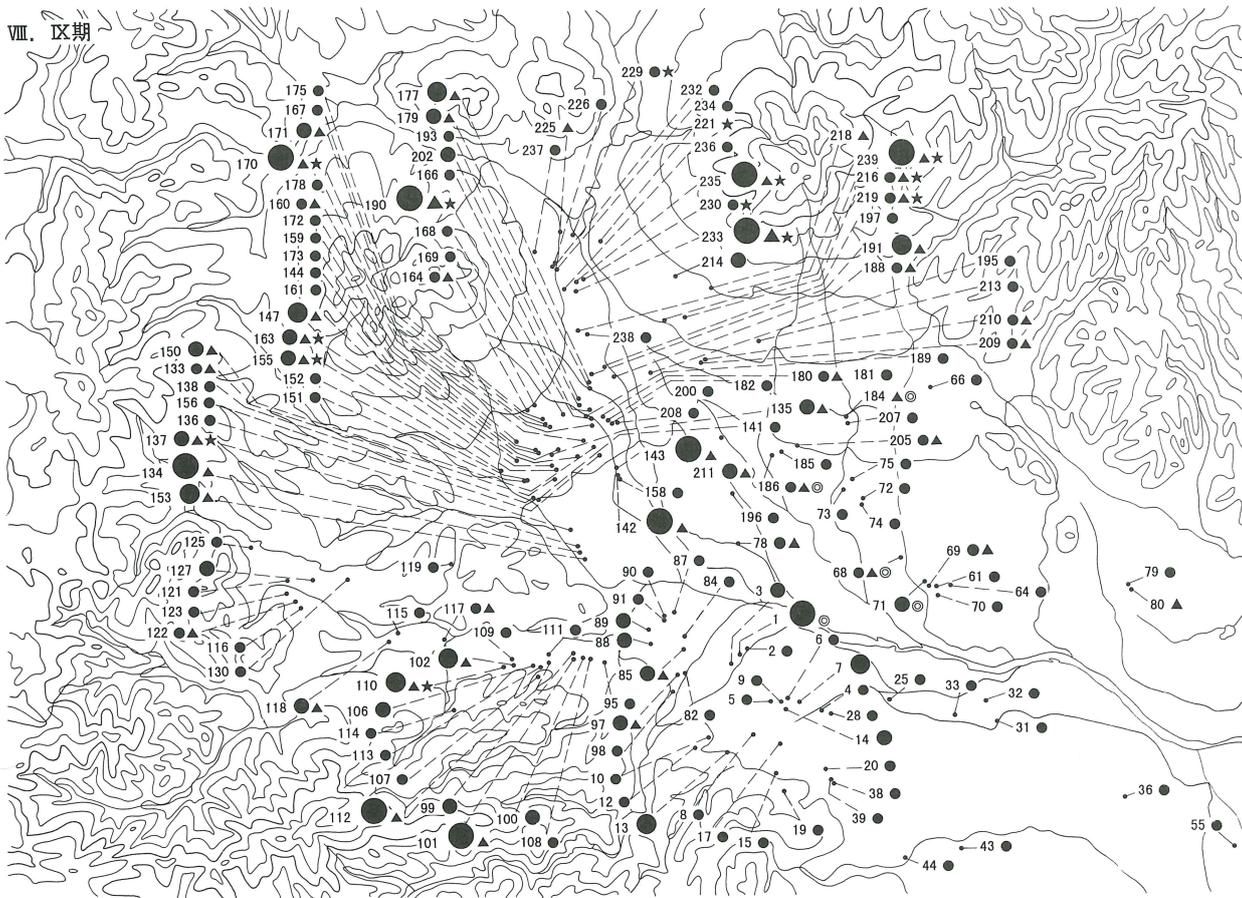
高崎市下佐野遺跡I地区78号住居



第897図 関東甲信地方羽釜分布図(3)



第898図 羽釜分布拡大図(3)



量も少なく、吉井型羽釜と混在しているところの特徴がある。

11世紀前半(第899・900図)

中堀遺跡が終焉した後の状況についても若干ふれておこう。

関東甲信地方では、信濃で急激に羽釜の出土が増加する。煮炊具の主体とまではならないが、出土量が多い。

そのほかの地域では、減少化傾向にある。これはこの時期の遺跡の調査例が少ないことも原因であるが、関東甲信地方の羽釜は、このまま減少していくと思われる。中世の羽釜に直接結びついていくものではないと思われる。

月夜野型・吉井型羽釜とも、この減少化傾向は同じである。特に、月夜野型羽釜は減少化が顕著で、この段階以降は、生産されなくなると思われる。

吉井型羽釜の分布範囲もやや狭くなり、ほぼ上野南部の平野部に限定される。東毛地域では、東毛型と吉井型が混在する傾向は、前段階と同じである。

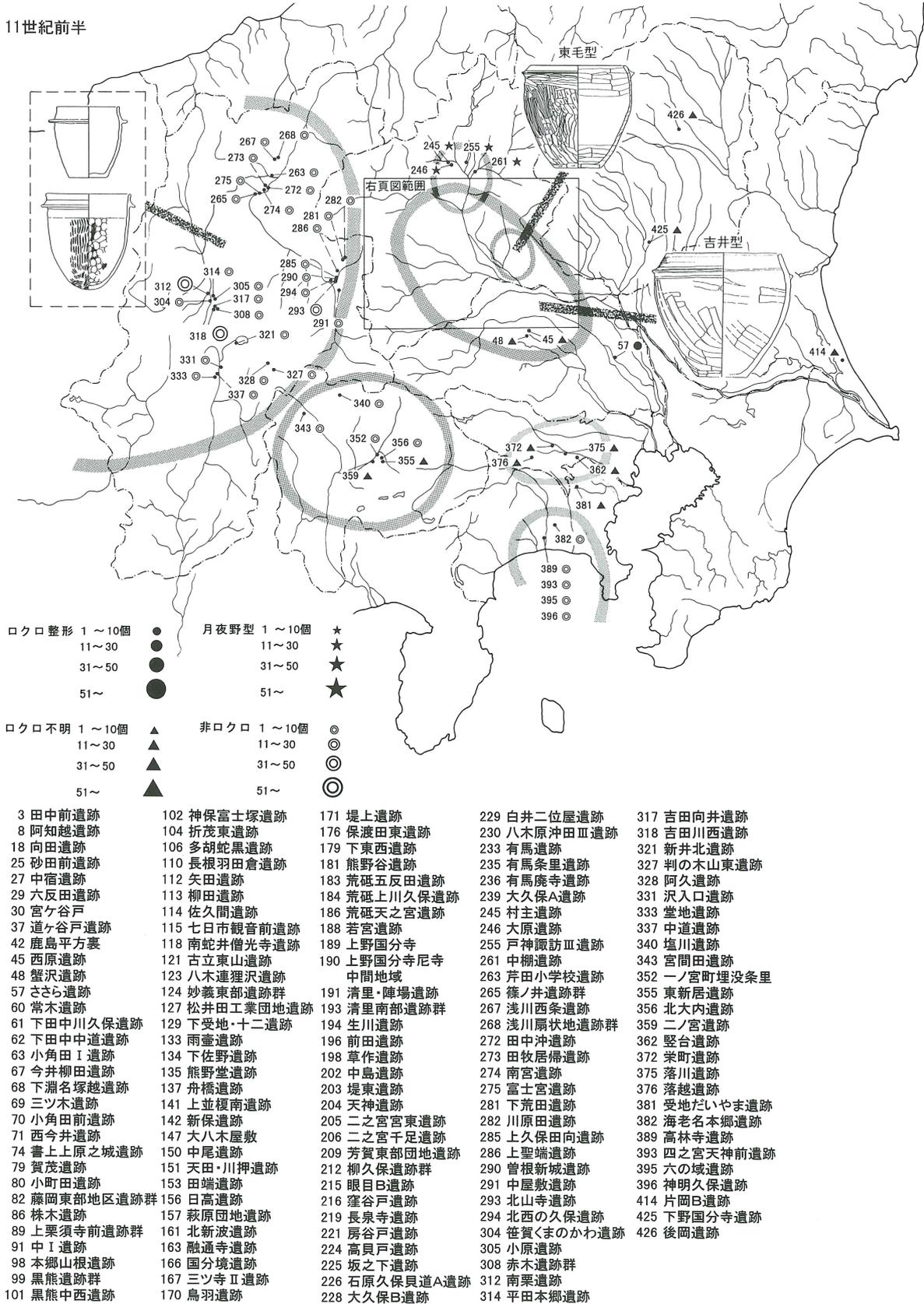
北武蔵では、それまで吉井型羽釜が分布していた地域でも、在地色の強い酸化焰焼成の羽釜に変わる。しかし、これらの羽釜は出土量が非常に少なく、単発的な生産であったと思われる。

また、この時期から、吉井型羽釜の分布とほぼ重なるように、土釜といわれる煮炊具が登場する(第887・888図参照)。

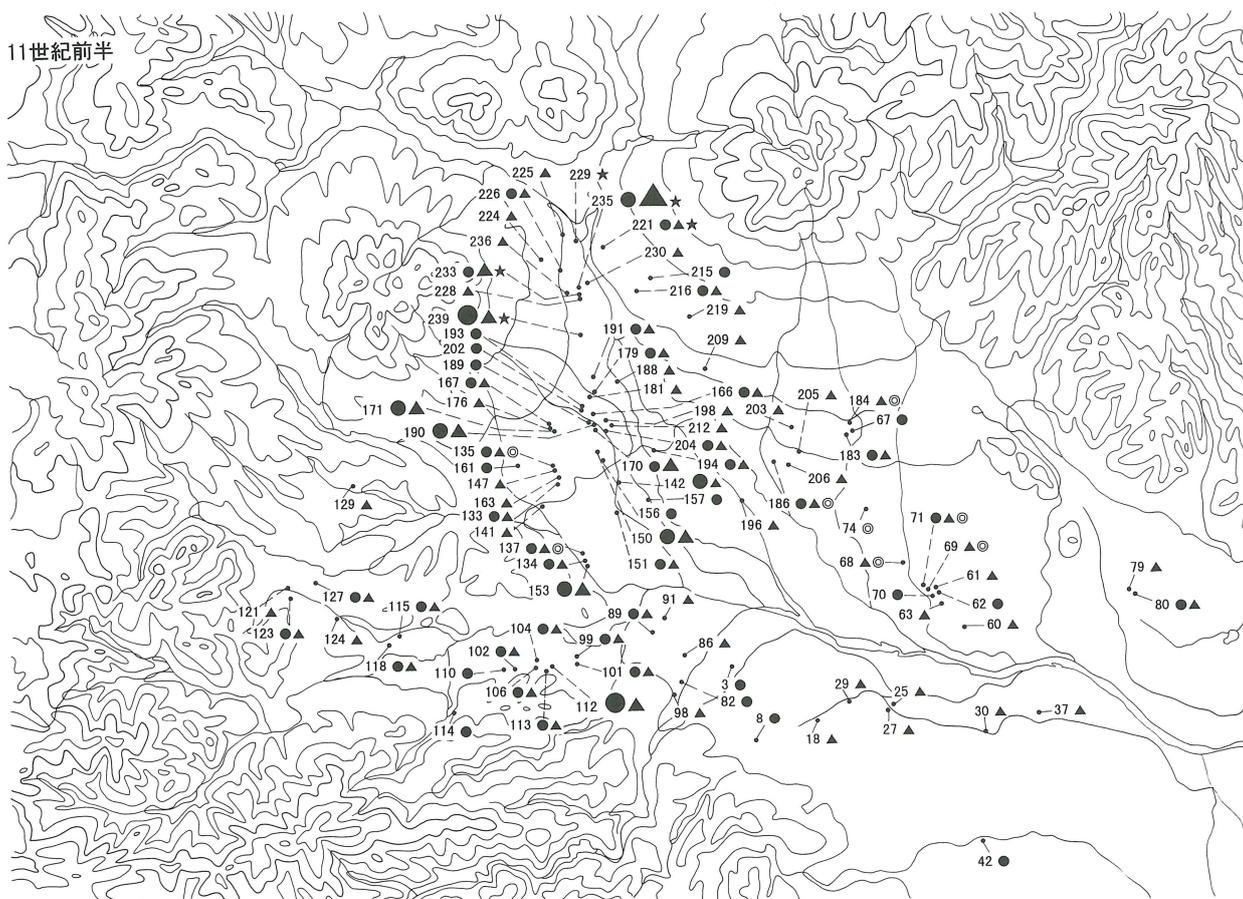
土釜は、11世紀以降急速に普及するが、羽釜も使用され続け、羽釜を煮炊具の主体から追い落とすまでには至らない(第890図)。

以上述べてきたように、10世紀初頭に出現する吉井型羽釜は、在地の社会が大きく変化する過程で急速に普及していく。

第899図 関東甲信地方羽釜分布図(4)



第900図 羽釜分布拡大図（4）



吉井型羽釜は、出現当初から、微妙に異なる様々な形態を示すが、同時期の供膳具のように在地色が強く、地域ごとに大きく異なるというものではなく、地域差というものが抽出できない。

その出土量は莫大で、今回集計した群馬県内の羽釜の総数は3,758個体にのぼる。

ちなみに武蔵甕生産の中心であった、埼玉県内での土師器甕A・Bの総数は4,117個体であり、群馬県の羽釜出土量は、これに比敵するものである。

個体数は報告書に掲載されたものだけであり、両者を単純に比較するわけにはいかない。しかし吉井型・月夜野型羽釜の存続期間が、10世紀初頭～11世紀前半の約150年間であるのに対して、土師器甕A・Bの存続期間が、7世紀末～10世紀前半までの300年であることを考えると、吉井型羽釜を中心とする上野の羽釜生産が、いかに短期間に大量に生産されていたかが分

かる。

ちなみに群馬県では、7世紀末～10世紀前半の土師器甕A・Bの総数は5,632個体である。これと比較しても羽釜の生産量が多いといえるであろう。

吉井型羽釜は、その名前の通り、群馬県南西部の鏡川流域を中心に生産されていたと思われ、また土師器甕A・Bはその分布密度から、武蔵北部から上野南部にかけてが生産拠点であったと推定される。

このように両者は非常に近接した地域で生産されていたにもかかわらず、吉井型羽釜が上野南部から武蔵北部の児玉・賀美郡という比較的狭い範囲に分布するのに対して、土師器甕A・Bは関東地方西半分から信濃にまでおよぶ広大な分布域を示している。

現象面だけをみれば、土師器甕A・Bが消滅していき、羽釜がそれにとって代わるように思えるが、分布範囲の違いと、先に述べた出土量の比較からは、吉井

型羽釜と土師器甕A・Bとでは、生産から流通までが根本的に異なっていた可能性が指摘できよう。

この両者の違いは、当時の社会変化と無関係であるはずはなく、羽釜が広く流通し始める10世紀前葉という時期を考える上で重要な鍵を握るものである。

まとめ

9世紀から10世紀にかけての煮炊具について、分布と出土量から、生産と流通の基礎的事実の確認を試みた。そこで、最後に今後課題として本論により明らかになった問題点を抽出しておきたい。

①土師器甕A・B（武蔵型甕）の系譜問題

中堀遺跡では、該当する時期の遺物が検出されなかったことから触れることができなかった。

従来この問題は『武蔵型』という名称により一括されて看過されてきた傾向があるが、北武蔵・上野と南武蔵では認識に差があるようである。8世紀の須恵器や土師器供膳具の生産・流通とも密接に関連するだけに、きちんとした議論がなされるべきであろう。

②土師器甕B出現の問題

中堀遺跡でB型としたいいわゆる「コの字口縁」の甕については、技術的には土師器甕の消費拡大にともなう土師器甕Aの手抜きにより発生したと考えた（第V章-1-(1)土器の変遷参照）。

土師器甕Bが、すでに広範囲の流通圏を確立していた土師器甕Aの分布域に同時期に発生したことは、9世紀代の武蔵型甕の生産体制を考える手がかりとなると思われる。

本論ではの在有力者（郡司クラス）のネットワークの存在を安易に想定したが、このネットワークの実

態について検討を重ねていく必要がある。

③9世紀末～10世紀前半の煮炊具生産と流通

中堀VI期以降土師器甕A・Bは生産量が減少し、分布範囲も北武蔵・上野に狭まる。これに対応するように、いままで武蔵型甕が煮炊具の主体であった地域で新たな煮炊具の出現がみられるようになる。その最たるものが上野の羽釜である。

武蔵では大宮台地を中心に、下総の影響下に成立した、ロクロ整形の酸化焰焼成の煮炊具が出現するが、この時期の煮炊具の様相は今ひとつ明らかになっていない。

この時期の土器生産は『小地域化』という言葉でよく言い表されるが、広大な分布範囲をみせる上野の羽釜はこの言葉には当てはまらない。煮炊具にみられる地域差について具体的に明らかにする必要がある。

④羽釜の生産体制について

吉井型羽釜の生産量は多量である。しかも土師器甕に比べてその存続期間は短く、短期大量生産である。

製作技法も土師器甕とはまったく異なり、須恵器技術であるロクロを使用する。

この地域で煮炊具に須恵器の技術が使用されたのは羽釜が始めてであり、土師器甕の系譜とはまったく異なり、新たな生産体制が出現したといえる。

この新たな生産体制がどのようなものであったのか不明な点が多く今後の課題であろう。

以上4点を問題点として上げた。古代における煮炊具の検証は、ともすれば供膳具の付け足しのところが多い。今後はここであげた4つの問題だけでなく幅広く議論が重ねられていくことが必要であろう。

(5) 舶載陶磁器

中堀遺跡からは、8点の舶載陶磁器が出土した。第901図にその集成図をあげておく。

1は、白磁の碗である。口縁部は、玉縁であり、緩やかに内湾しつつ立ち上がる。乳白色の釉が全面を覆っている。

2は、同じく白磁の碗である。口縁部は玉縁であり、緩やかに内湾しつつ立ち上がっている。濁りのない白色の釉が全体を覆っている。器壁は、大変薄く2mmほどである。

3は、白磁の碗である。口縁部は玉縁であり、直線的に立ち上がり、口唇部で外反する。濁りのない透明感のある白色の釉が、全体を覆っている。2と同様に器壁は大変薄い。

4は、おそらく白磁碗の体部の破片であろう。一部に釉薬の剥がれた跡がみられる。やはり透明感のある白色である。

5は、白磁碗の底部破片である。高台は蛇の目高台で、ヘラ状工具による凹凸が残っている。乳白色の釉が全面にかけられる。土橋分類(土橋1993)の碗I A 1類、山本分類(山本1988・89)のI類にあたる。

6は、同じく白磁碗の底部である。高台は蛇の目高台で、ヘラ状工具による凹凸はみられず、平滑に仕上げられている。全面に透明感のある白色の釉がかけられている。土橋分類の碗I A 1類、山本分類のI類にあたる。

7は、細青磁盒である。合子の蓋で口縁部の隅部が、各部で突出し、六角形となる。内面(見込み)には釉が掛からず、六ヶ所の目を確認することができる。目

は紅色に変色している。外観は、淡い青緑色で表面の釉が、やや粗てざらついている。国内出土の合子の例は少なく、福岡県海の中道遺跡・大宰府跡・鴻臚館跡・柏原M遺跡・観世音寺・大阪府瓜破遺跡・平安京跡などで出土しているに過ぎない。

8は、青磁碗の体部の破片である。青白色の小さな破片である(第1分冊口絵参照)。

なお、舶載陶磁器については、山本信夫氏に実見していただき、ご教示を賜った。荊州または定窯系白磁で、大宰府編年のI類であろうとのことである。

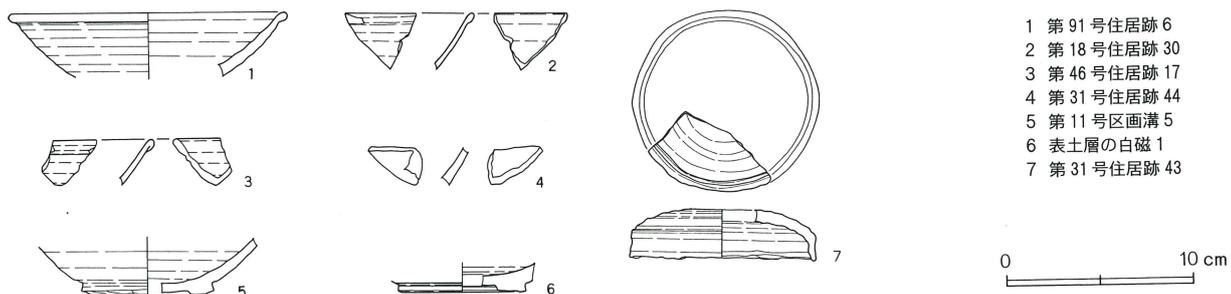
出土遺構は、竪穴住居跡が主だが、ほとんど覆土上層からの出土である。竪穴式住居跡の住人が、直接この舶載陶磁器を使用していたとは、出土状況からはいえない。

むしろ出土の中心が、後述する第2区画に集中していたことから、この区画に関係した、すなわち中堀遺跡の経営主体者に最も近い人物が、貿易陶磁器の使用者とすることができよう。またこの区画には、緑釉陶器も集中して出土しており、緑釉陶器の担い手が、舶載陶磁器の担い手であったともいえよう。

ところで中堀遺跡を取り巻く、周辺諸国のどのような遺跡から舶載陶磁器は、出土しているのだろうか。第902図は、周辺諸国から舶載陶磁器の出土した遺跡の分布図である。遠江国の城山遺跡や下総国の向台遺跡は、8世紀の資料のため除くとして、9世紀以降、相模国から武蔵・上野・信濃国にかけて、舶載陶磁器の分布が集中する。

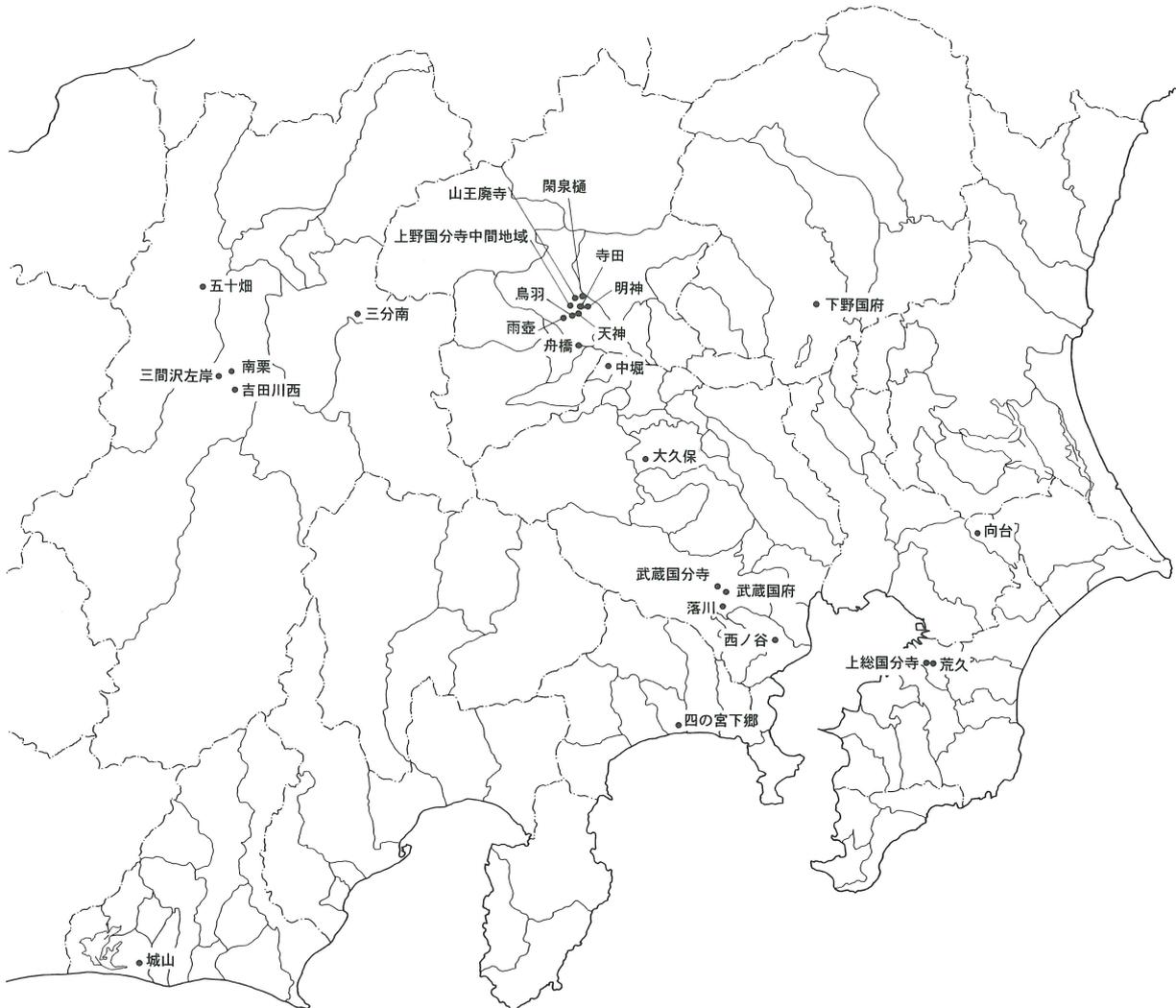
ことに武蔵国府・上野国府・下野国府などの国府や

第901図 舶載陶磁器集成



- 1 第91号住居跡 6
- 2 第18号住居跡 30
- 3 第46号住居跡 17
- 4 第31号住居跡 44
- 5 第11号区画溝 5
- 6 表土層の白磁 1
- 7 第31号住居跡 43

第902図 武蔵国周辺の舶載陶磁器出土遺跡



国分寺、近くに国府を抱える平塚市四ノ宮下郷・日野市落川・塩尻市吉田川西遺跡などでは、破片資料だけではなく、完形に復元可能な資料までも出土している。

群馬県では、上野国分寺中間地域・鳥羽・天神・元総社明神・寺田・関泉樋・山王廃寺などの上野国府内や国分寺の近隣、官衙や寺院が集中する、上野国の政治的文化的中枢地域から豊富に出土している（大西1989）。

上野国分寺中間地域遺跡は、まさしく国分寺の僧寺と尼寺に挟まれた地帯で、国分寺の造営や維持にかかる人々の集落といわれる。同様に千葉県の上総国分寺や荒久遺跡などの例も、国分寺の経営にかかる遺跡から貿易陶磁器が出土する遺跡と位置付けられよう。

一方、金属生産が盛んに行われた鳥羽遺跡は、上野国府（国府在庁）の管掌した器杖の生産や修復、建物の築造などにかかる遺跡とすれば、修理所や木工所のおかれた可能性がある。

また寺田遺跡や元総社明神遺跡は、人形の出土などから国府内を流れる牛池川を、被所とした遺跡であろう。さらに山王廃寺は、白鳳期から続く寺院で、平安時代には、定額寺となっている。

この他、群馬県では、東山道の道筋に位置し、『上野国交替実録帳』の「八木院」に比定される大八木屋敷遺跡に近い雨壺遺跡や、烏川に隣接した『万葉集』の「佐野の舟橋」に近い舟橋遺跡（川津）は、ともに交通路に隣接した遺跡で、物資の集中する場に占拠し

た遺跡である。

東京都の落川遺跡も同様である。対岸に武蔵国府を臨む落川遺跡は、多摩川の舟運や背後に中山間部を控え、7世紀代以来、東国の流通センターとして経済的な基盤を確固とし、10世紀以降、在庁官人を含め、武士化していく姿が見られる遺跡である。

その一方、推定信濃国府の南方の沖積地に展開した長野県南栗遺跡や吉田川西遺跡、あるいは三間沢川左岸遺跡などは、東山道という交通路よりも、9世紀以降、初期庄園として展開した遺跡である。ことに三間沢川左岸遺跡では、銅印「良相私印」、下神遺跡では、墨書土器「草茂」の出土から藤原良相の庄園、「草茂庄」の比定地にされており、このような初期庄園を媒体として、貿易陶磁器が拡散したことも考えられる。おそらく大田市五十畑遺跡も同様であろう。

このような国府や国分寺、あるいは初期庄園、流通の結節点にかかる遺跡で、初期貿易陶磁器が出土する傾向がみられた。これらの遺跡には、国司や国師、あるいは王親佃使など、都城との往還を頻繁に行っていた者の存在が推定でき、貿易陶磁器の運搬者のイメージをつかむことができる。ところが、埼玉県東秩父村の大久保遺跡だけは、このような者達だけでは理解できない。

大久保遺跡は、山間部に営まれた砂鉄採集の鍛冶生産を行っていた遺跡とされ、その第1号竪穴式住居跡から白磁皿の小片が出土している。白磁皿は、外面の上半と内面のみに釉がみられ、下半は露胎である。釉

調は、白色で、口縁部は、外反し、見込みに沈線をもつ。山本分類のⅨ類、土橋分類のⅡ類である。大宰府編年からⅡ類は、10世紀末から11世紀初頭に輸入されたとされている。

1号竪穴式住居跡は、10世紀前半と報告されるが、11世紀に下がる可能性のある土釜も、他の住居跡から出土している。発掘成果によって、大久保遺跡は、山間の鉄資源開拓のために、9世紀末から入植したようである。

このような鉄にかかわらず、金銀資源の発見は、いわゆる「山師」といわれる特殊技能を持った集団によって、維持されていたらしいことは、これまでの研究で明らかだが、どのような経緯で彼らが、貿易陶磁器を入手したのであろうか。その背景に頻繁な都鄙往反と、都市貴族の支援を予測することができよう。

近年、長野県では、10世紀後半から11世紀にかけて、山間の大久保遺跡のような遺跡で、白磁Ⅸ類の椀・皿（破片）が出土した遺跡の竪穴式住居跡から、フイゴの羽口や鍛冶滓などが、供伴する例が増加しつつある。またこれらの遺跡は、1～2軒程度で構成される小規模集落の場合が高い。

このような中で中堀遺跡は、前に挙げた長野県の初期庄園の例に最も近く、前司国司や王親佃使など、都城との往還を頻繁に行っていた者の存在が推定でき、貿易陶磁器の出土は、中堀遺跡の富裕さを表現するに、十分な資料であるといえよう。

(6) 金付着灰釉陶器

金の付着した灰釉陶器について、概要・出土事例・意義などについて記すこととする。

中堀遺跡の当該資料は、第35号住居跡と第84号住居跡の覆土中から出土した破片である。第35号住居跡の破片は、遺物水洗作業中に発見し、第84号住居跡の破片は、接合作業中に金が付着していたことを確認し、両者を接合したところ、同一個体と分かった。

第35号住居跡は、中堀Ⅶ期に第84号住居跡は、中堀Ⅷ期にそれぞれ位置づけた住居跡である。前者は9世紀第Ⅳ四半期、後者は10世紀第Ⅲ四半期とした。

この灰釉陶器は、大形の椀でロクロ成形の後に、体部下半を底部付近まで削り込んでいる。高台は、外に踏ん張る角高台に近い形態で、磨いたように平滑化している。この平滑な高台部下端は、あるいは使用中の摩耗によるのであろうか。底部は、厚く作られる。施釉は内面のみ刷毛塗りによって施こされている。中心部に一筆と、体部に2段に分けて塗られていたようである。胎土は、白色の均質な土を使用しており、猿投古窯跡群の黒笹90窯式、古段階の灰釉陶器であろう。

金の付着状況は、底部内面から3分の1に、金粉を散りばめたように付着している。底部が密で、上部に向かって薄くなる。表面は、たいへん滑らかで、つるつるしている。金の付着した部分は、釉薬が、かかっている。おそらく金の付着時に摩耗したためと考えられ

る。

ところでここで金とした物質は、当初は、金泥と考えたが、蛍光X線分析法によって分析を行った結果、「金箔」という結論を得た(附編「金付着灰釉陶器分析」参照)。結論からいうと、銀を微量含んだ純金に近い物質で、金箔(金粉)である。なお金泥は、蛍光X線分析法によると、混ざりもの(膠等)が抽出され、それによって光沢も鈍くなるという。

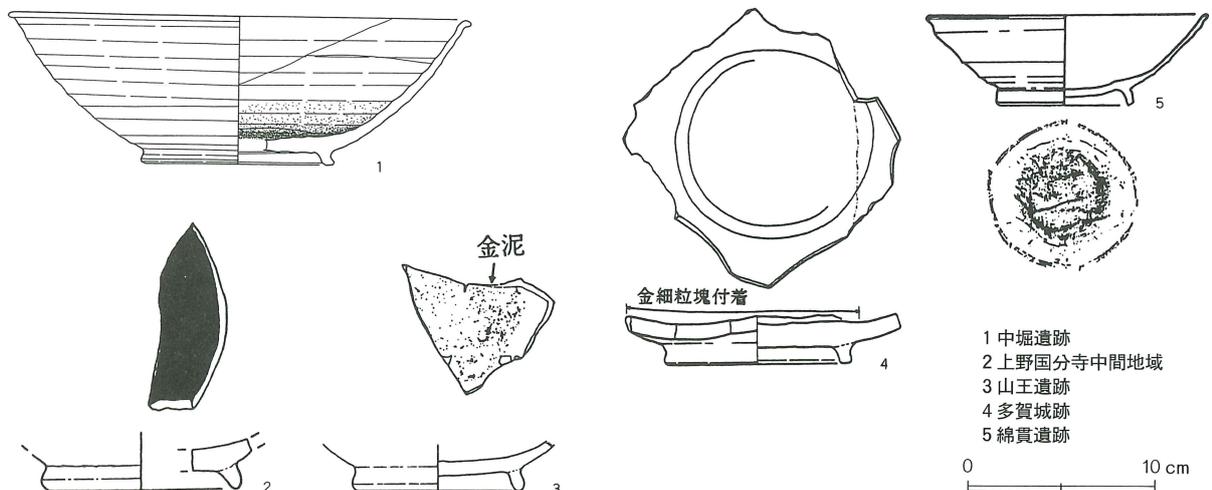
さて、この金箔の付着した灰釉陶器は、どのように位置付けられるであろうか。

その前に金箔の製造工程について、若干記しておきたい。

金箔は、現在その生産量の90パーセントが、北陸の金沢で生産され、漆工芸品を彩る素材として利用されているという。ただし金沢の生産は、伝統的ないわゆる箔打ちによって行われているのではなく、機械打ちによるらしい。

伝統的な製法を今に伝える滋賀県甲賀郡甲西町の下田金箔について、木村至宏氏の報告によると、金箔製作で最も重要なのは、箔を挟み込む紙を作ることという(木村1985)。この箔打ち用紙は、灰汁を浸み込ませた紙で、ズミ(金箔にする原材料の上澄み)を挟み込み、槌で10ミクロン以下まで敲打して金箔とする。その後所定の大きさに切り、「ぬきごと」という作業

第903図 主な遺跡の金付着灰釉陶器



第904図 金付着灰釉陶器出土遺跡分布図



を行い、「広物帳」という帳面に移し替え仕上げる。

このようにしてできた金箔は、所定の大きさに切り揃えられ、真四角の箔となる。切り屑は、金粉として利用される。金粉の製造工程は、この金箔から行う方法と、金地金からヤスリなどで削りだして行う方法とがある。後者は、田口勇氏によると、現在では、会津

若松市で見られる程度という（田口1995）。

さて中堀遺跡の金付着灰釉陶器の事例であるが、この付着物が金箔か、金粉かについて私見を述べておきたい。まず付着状況であるが、底部内面から体部内面の下部に集中してみられること。粒子に僅かながら走方向性があること。そして金粒子が、灰釉陶器の器表の凹凸に挟み込まれた状態であること。等から金箔が、器内面の器表の全体を覆う、いわゆる金彩土器ではなく、金粉をさらに細かく精製するための器と考えた。

さてこのような金付着土器の類似例であるが、第903図に主な類似例、第904図に出土遺跡の分布図をあげておいた。北から各事例について説明を加えておくこととする。

後田遺跡 山形県酒田市の後田遺跡は、出羽国府である城輪柵跡に近い平安時代の遺跡であり、緑釉陶器や灰釉陶器をはじめとして、越州窯系青磁の香炉蓋・陶硯などが出土した。後田遺跡は、国司の館か、国府内の主要官衙と考えられる。

後田遺跡から出土した金付着土器は、「金粉のつく須恵器」と報告されるが、実見の結果、甘い焼き上がりの灰釉陶器であった。高台付碗の底部小破片である。底部内面に付着する。

多賀城跡 宮城県多賀城市の多賀城跡 六月坂雑司群から出土している。著名な多賀城跡は、陸奥国府・鎮守府を抱えた遺跡である。この多賀城の雑司の営まれた六月坂地区で出土した。

1点のみ報告されている。「金細粒塊」付着灰釉陶器とされる。高台付皿の底部破片で、内面に偏って金の付着が確認できる。黒笹90号窯式の古段階の製品と考えられる。中堀遺跡同様、「内面の大部分は、施釉部分もすり減って」と観察されている。

また政庁北西の丸山地区の大形建物群の表土層からも出土している。

山王遺跡 多賀城跡の西に広がる山王遺跡は、国守の館や国府雑任の住宅が並ぶ陸奥国府である。このなかで報告されているのは、「右大臣殿 餞馬取文」の題箋を出土した国守館から1点と、未報告例（東町浦地区）1点がある。

全て破片であるが、両者とも底部付近に付着した状況が伺える。1点は、べつりと厚く付着していた。黒笹90号窯式の新段階の高台付椀と考えられる。

上野国分寺中間地域 上野国の国分僧寺・尼寺の中間地域は、文字通り、国分寺の造営や維持のために営まれた遺跡で、灰釉陶器や緑釉陶器が大量に出土した。H区157号住居跡から出土した。

高台付椀である。底部付近の破片で、全体に付着している。高台付皿の可能性もある。高台が低く、折戸53号窯式の製品であろう。

綿貫遺跡 群馬県高崎市の綿貫遺跡は、中堀遺跡とはやや異なるが、遺跡内に区画溝が巡り、瓦葺き基壇建物の構築された遺跡である。やはり9世紀から10世紀にかけて集落が営まれている。S I 0001（竪穴式住居跡）出土。

3分の2程度が、残存する高台付椀である。金は、底部内面に付着。報告では、「アマルガムの状態で土器内にあったものが器面に残った」とされるが疑わしい。折戸53号窯式の製品であろう。

信濃国府推定地 この事例は、長野県松本市の信濃国府推定地の一角で採集された土器片である。その後発掘調査等が行われておらず、遺跡の性格は不明のままである。

底部内面に金が付着した小破片で、黒笹90号窯式かと思われる。現在は、松本城内の日本文化博物館に「金彩土器」として保管されている。関沢聡氏御教示。

武蔵国府 東京都の府中市で調査された武蔵国府関連遺跡で、金の付着した灰釉陶器の高台付椀が出土した。底部内面に付着するが、未報告である。

以上は、灰釉陶器の高台付椀か高台付皿の例であるが、次に挙げる例は、金の付着した小瓶と石杵である。

上総国分寺周辺遺跡 千葉県市原市の上総国分寺にかかる荒久遺跡で、内面に金の付着した緑釉陶器の小瓶が出土した。外面は、火を受け変色している。金を融解した坩堝と言われる。

御所遺跡 山梨県大月市の御所遺跡は、山間部に展開した小規模な平安時代の集落跡である。石杵の頭部に金粉が、包み込むように付着していた。金粒を細粒化する際に使用された石杵とされる。

以上の例から中堀遺跡の金付着灰釉陶器は、金を細粒化し、金粉を作成した道具として使用されたと解釈したい。そして出来上がった金粉が、別の容器で膠水とともに溶かれ、金泥として絵画や紺地金泥経などに使われたと推測しておきたい。

なお多賀城跡の政庁跡から出土した風字硯（破片）の硯面には、金泥のついた筆の穂先を直した痕跡が、0.5mmほど見られる。金泥は、このような硯で合成され、使われていたのであろう。

また金の付着した灰釉陶器は、国府や国分寺、あるいは有力な寺院などの事例から、僧侶と限らず、絵画や紺地金泥経などと、直接かかる人物によって使われていた。漆紙文書とともにこの遺物は、中堀遺跡の主人公の社会的地位や教養の高さを反映していよう。

(7) 灰釉陶器

中堀遺跡出土の灰釉陶器について

中堀遺跡から出土した灰釉陶器は、図化した遺物だけでも830点に上る。この数値は、埼玉県下最大だけでなく、これまでの県内の総出土量670点（1996年調べ）を超えるほどであった。発掘調査時は、東濃の製品が目立つという印象があったが、復元・図化などの整理を行うにつれ大半は、猿投窯跡群の製品であろうと思われた。

その後、整理途上で尾野善裕・小森俊博・平尾政幸・三好美穂・立和名明美氏等から猿投の製品と考えていた製品のほとんどが、実は、三河から静岡県西部にかけての製品であるご教示を受けた。

そこで生産地である三河から静岡県西部にかけての諸窯跡群の遺物を実見し、生産地の資料と中堀遺跡の遺物を比較し、さらに調査を担当されている方々にご教示を受けた。また浜北市宮口窯跡群を調査された久野正博氏には、中堀遺跡の灰釉陶器の大半を実見していただいた。

実見の結果やご教示の内容を踏まえ、中堀遺跡の整理担当者である田中と末木が、灰釉陶器について大まかな生産地・底部調整方法・施釉方法の分類を行った。また終始、当事業団の宮瀧由紀子に助言を得た。

ところで産地ごとに、手法の変化の様相が異なると予測されるため、まず大まかな生産地の推定から行った。その基準は、以下の通りであり、一覧表の生産地の項目と同一である。

〔二川〕 愛知県豊橋市二川窯跡群で生産された製品に類似する一群をまとめた。二川窯跡群は、調査を担当された贅元洋氏によると、現在までに約60基を確認し、そのうち数基を調査したが、全て未報告であるという。三河・遠江国の窯業が、湖西窯跡群（古墳時代）→二川窯跡群（古代）→渥美窯跡群（中世）へと、須恵器→灰釉陶器→中世陶器を立地を変えながら移動し生産を続けたという。灰釉陶器は、黒笹14窯式から操業されるが、黒笹90窯式に急激に増加し、以後継続したという。

猿投窯跡群との技術的な連携がみられ、椀・皿はもとより、多彩な瓶類・仏具も生産するなど、あらゆる器種を生産していたようである。黒笹14・90窯式に近いほど胎土はきめ細かく、猿投の製品に近いが、やや粗い。しかし窯体内の温度が上がらないと、胎土が、少し粉っぽくなり黒色の粒子を含む。この粒子は、古天竜川が形成した粘土層中に存在し、浜北市の宮口窯跡群の製品にも含まれるという。また釉薬の発色は、黄みの強い淡い緑色が多いが、色調に相当ばらつきがある。とくに猿投の製品と比較すると、釉薬の発色がやや悪く、相対的に猿投の製品と見分けが付きにくい。

分類の結果、積極的に二川窯跡の製品といえる灰釉陶器は少なかったが、白色に近い胎土で、猿投や宮口窯跡の特色を含まない一群を一括し、広義で捉えておくこととした。

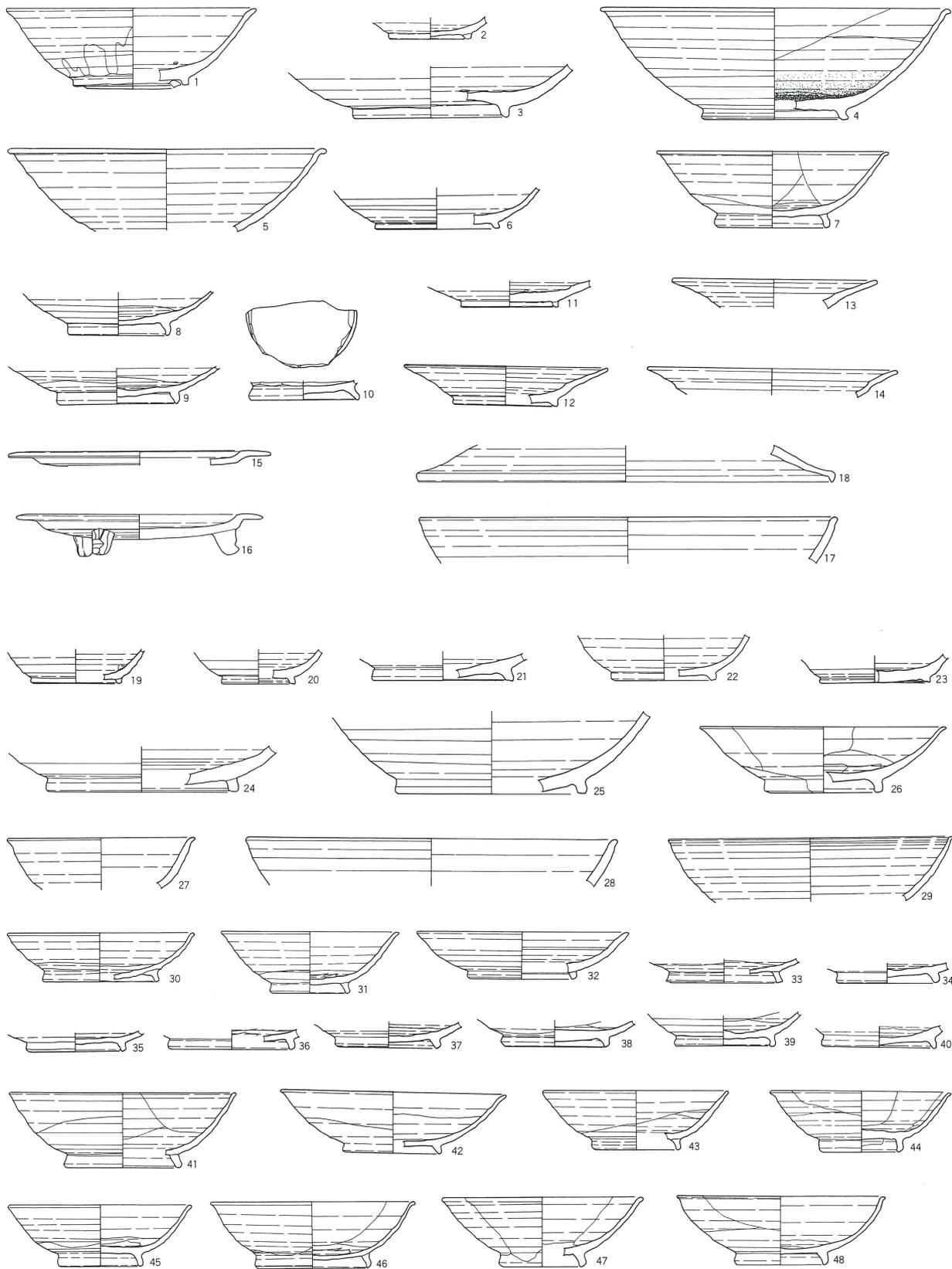
〔宮口〕 静岡県浜北市宮口窯跡群で生産された製品に類似する一群をまとめた。二川窯跡群は、調査を担当された久野正博氏によると、現在までに約30基が確認され、そのうち5基が発掘調査されている。さらに未知窯が、多数存在する可能性が高いという。

宮口窯跡の製品の特徴は、高台の作りと底部の器壁に生じた発泡であるという。この発泡は、透明から黒色のセルロース系接着剤（セメダイン）状の吹き出しである。久野氏の話では、粘土の成分によって発泡するという。高台の特色としては、いわゆる三日月高台の下半部が強くナデられて仕上げている。二川窯跡の製品と比較すると、やや胎土が粗く、粉っぽい一群である。釉薬は、緑が比較的濃く発色していた。

なお窯跡内から出土した灰釉陶器を実見したが、焼成温度が適温となっておらず、釉薬が発色しないなど発色も悪く、器本体も黄味がかった。

〔清ヶ谷〕 静岡県小笠郡大須賀町清ヶ谷窯跡群で生産された製品に類似する一群をまとめた。清ヶ谷窯跡群は、30から50基あまりの窯が存在すると推定され、

第905图 灰釉陶器集成(1)



0 10 cm

一部が、静岡大学によって調査されている。黒笹90窯式から東山72窯式、そして山茶碗まで生産されていた。器種構成は、碗皿を中心として、瓶類もわずかに焼成された。

実見を行った結果、色調は、黒ずんだ黄灰色であり、漬けがけ・刷毛塗りが混用され、釉薬の発色は、旗指窯跡群よりも黄緑色に近かった。器肉の厚さが個体によって一定せず、また高台の形態や体部の形態も一定していなかった。

磐田市の遠江国の国府や国分寺などでは、清ヶ谷窯跡の窯の製品と推定される、比較的良質な製品が出土し、その周辺の集落遺跡では、比較的粗雑な灰釉陶器も出土しているという（松井1989）。

また島田市旗指窯跡群では、約60基が確認され、一部が調査されている。調査を担当された渋谷昌彦氏によると、猿投窯跡群の折戸53窯式から百代寺窯式、そして山茶碗にかけて生産されていたという。器種構成は、碗皿類を中心として、瓶類や仏器などさまざまな製品が焼成されていた。

胎土の特徴としては、二川や宮口窯跡群に比べて粗く、砂質でくすんでいた。また施釉は、漬けがけだけではなく、かなり新しい段階まで刷毛塗りが残る。

分類の結果、中堀遺跡では、積極的に旗指窯跡の製品といえる製品はなく、旗指窯跡群の未知窯も含め東遠江地域の製品を「清ヶ谷」と、広義で捉えておくこととした。

〔猿投〕 愛知県名古屋市・三好町に広がる猿投窯跡群の製品に類似する一群をまとめた。中堀遺跡の猿投窯跡群産の灰釉陶器については、尾野善裕氏にご教示を得た。

中堀遺跡から出土した猿投窯跡群産の灰釉陶器の特色として、胎土は、白色に近く、夾雑物が少ない。また精選された胎土で、きめが細かく、釉薬の発色も薄い黄緑色に近い。

二川窯跡群の製品と類似するが、良質な胎土やシャープな作りなどの点で、猿投窯跡群の製品が勝る。

なお猿投窯跡群の製品の実見にあたっては、安田幸市氏にご教示を得た。

〔東濃〕 岐阜県多治見市内の灰釉陶器窯跡群の製品に類似する一群をまとめた。

東濃の製品は、胎土が白色から灰色まで存在するが、大変きめが細かい。割れ口は塩化ビニールの割れ口のような鈍い輝きである。施釉は、刷毛塗りが漬けがけまで確認できる。釉薬の発色は、乳白色や淡い緑白色等である。

東濃の製品については、山内伸祐氏にご教示を得た。

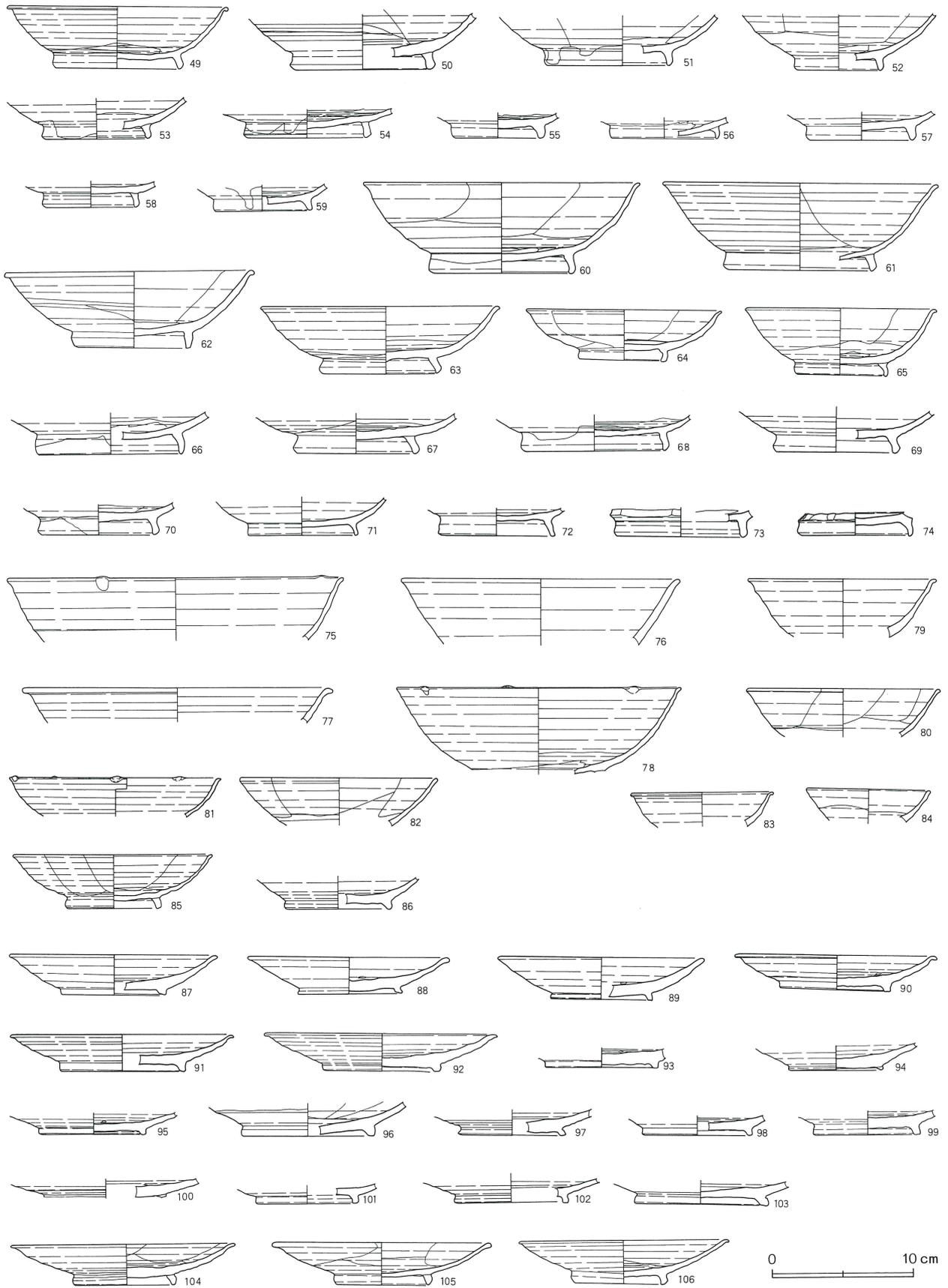
このほか生産地の資料として、愛知県小牧市尾北窯跡群や岐阜県美濃須衛窯跡群・関市内の窯跡群の資料について、当該市町村や各担当の方のご厚意で実見を行ったが、中堀遺跡から出土した灰釉陶器には、確実にこれらの窯跡群からの製品といえる遺物はなかった。

次に中堀遺跡から出土した灰釉陶器について、産地ごとに概括して述べることにしたい。なお中堀遺跡出土の灰釉陶器について、第905図から第922図にかけて集成図を掲載した。1から668までが、供膳具（高台付碗・高台付皿・段皿・耳皿）とし、677から830は、貯蔵具・仏器その他（長頸壺・手付瓶・甕など）の順で掲載した。

猿投 猿投窯跡群で生産された製品といえそうな製品は、わずかに23点しか出土しなかった。1～18・669・670・785・815・819である。

1から10は、高台付碗である。1・3には、三叉トチンがあり、1の底部、高台内側には、シッタの口縁部が融着し残存している。1から3・5・6・10は、内面の全面に刷毛塗りの施釉を確認でき、外面に施釉はみられない。4・8は、内面口縁部と見込み部に刷毛塗りがみられるが、外面には施釉がみられない。7・9は、口縁部の内外面に刷毛塗りがみられ、見込み部にも刷毛塗りを確認できる。

第906图 灰釉陶器集成(2)



1から10までの底部は、全てヘラキリ調整されている。高台の形状は、1から3が角高台であり、直立しつつ立ち上がる。4・6は、高台端部が外方に突出するやや高い角高台である。5は、高台の形状は把握できないが、口縁部の形状が4と類似することから同様と考えた。7から10は、三日月高台で、7は底部との接地幅が狭いが、8から10は広く長い三角形に近い。

4の内面には、金の細粒が付着しており、金泥を製作した際の道具と推定される(第V章1-(5)参照)。

11から14は、段皿である。施釉は刷毛塗り、底部はヘラキリである。11には三叉トチンがみられ、内面のみ全面に施釉されている。13には高台がみられないが、12・13と同様の角高台と推定したい。

15・16は、三足盤である。16は無釉で底部には、丁寧なヘラキリ調整がみられる。内面は、硯面のように大変丁寧に磨かれている。足部は、丁寧に面取りされ、端部で獣足状となっている。15は底部以下を欠損しているが、14と同様な三足盤と考えた。内面に刷毛塗りによる施釉がみられる。

17は、大形の椀と考えられる。内外面に刷毛塗りされている。口縁部のみである。

18は、蓋である。天井部に施釉が確認される。

669は、長頸壺である。頸部から肩部にかけて施釉薬が流れている。器表は、赤黒色で大変硬質に焼き上げられている。670は、頸部以上は欠失しているが、浄瓶であろう。胴部中位に2条の沈線がみられる。

785は、大形の手付瓶である。外面に施釉され、把手は、丁寧に面取りされている。815・819は、把手である。

二川 二川窯跡群で生産された可能性のある製品は、19から165、671から688、780から783、786から801、813・814の174点である。

(高台付椀) 19から86は、高台付椀である。24・25は、大形の高台付椀であり、19から23は、小形の高台付椀である。19には、三叉トチンがあり、内面全面に施釉がみられる。19から84は、刷毛塗りによる施釉

がみられる。また底部の残るものは全てヘラキリである。

30から40の高台は、低く、底部との接地面が狭く、外端が突出する。外端部と内端部にナデやヘラで面を作っていることを特徴としている。とくに32は、口縁部内面に沈線のある器高の低い稜椀である。

41から59は、短い三日月高台である。底部との接地面はやや幅広く、高台端部で内側に小さく屈曲する。

60から73は、高い高台である。三日月高台と直立する高台(62・72から74)で、三日月高台は、内側に力強く屈曲し、後者は、2から3段高台を積み重ねたような高台である。大形の高台付椀(60から62、66から69・73・74)は、大形の高台付椀。他はやや小振りの椀である。

75から84は、口縁部の破片である。78・81には、口唇部に輪花がみられる。75から78は、大形の高台付椀、79から82は、中型の高台付椀、83・84は、小形の高台付椀である。

85・86の施釉は、つけがけである。底部の調整は、85がヘラキリ、86は、高台付椀で唯一の糸切りである。86の高台は低く、三角形である。

(高台付皿) 87から132は、高台付皿である。高台付椀同様の分類を行った。87から124は、施釉は刷毛塗り、底部調整はヘラキリである。88から90・95には、三叉トチンがみられる。

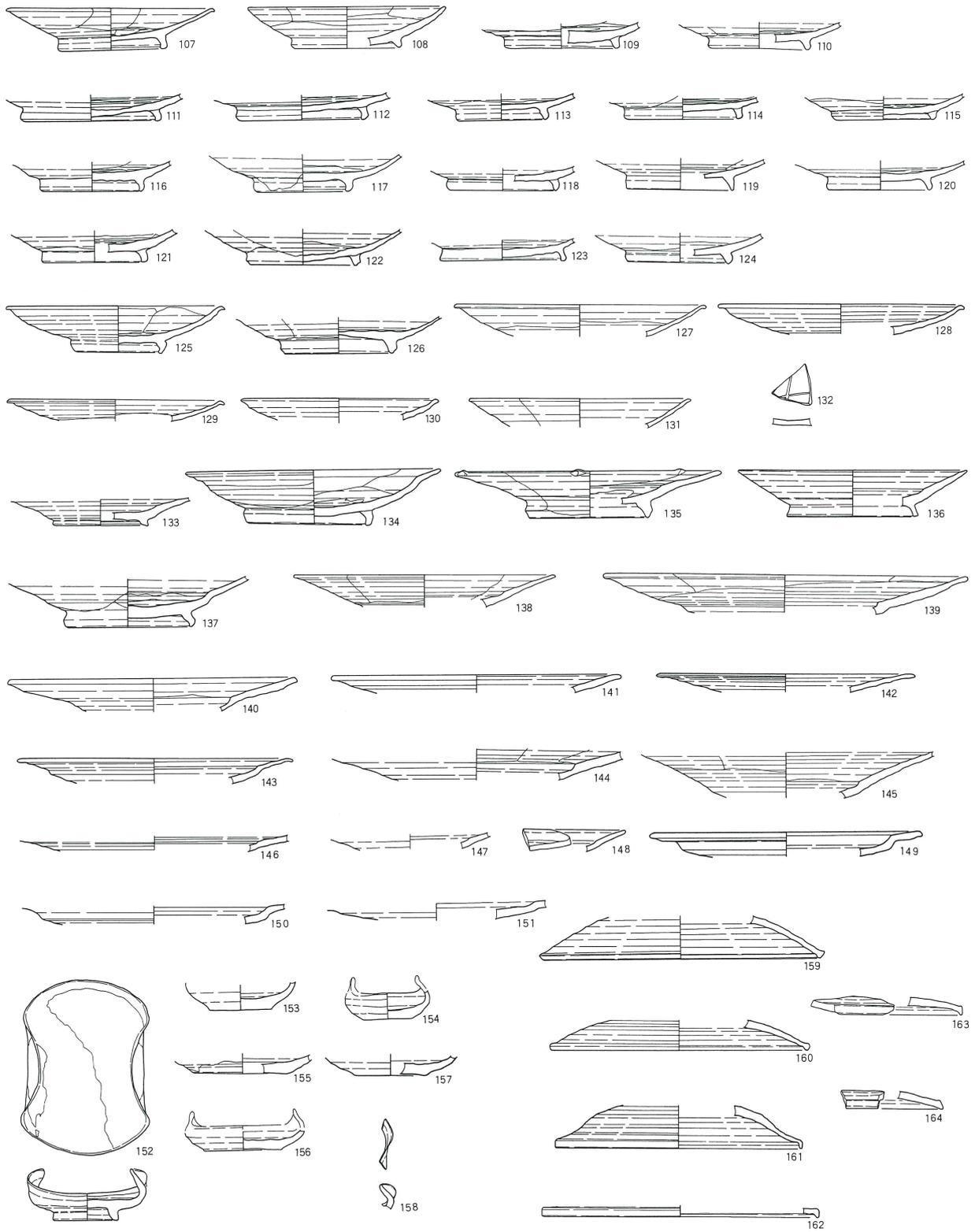
87から103は、角高台である。ことに87から91・93・95から98は、内端部がやや浮き、底部と高台の接地面の幅が広い高台である。他は、外方への突出が目立つ形態の角高台である。

104から105は、三日月または三角高台である。低い高台で、内側に大きく内湾するのを特徴とする。

125・126は、施釉は刷毛塗り、糸切りの底部調整を施した高台付皿である。高台は三日月高台で、底部との接地面は幅広い。

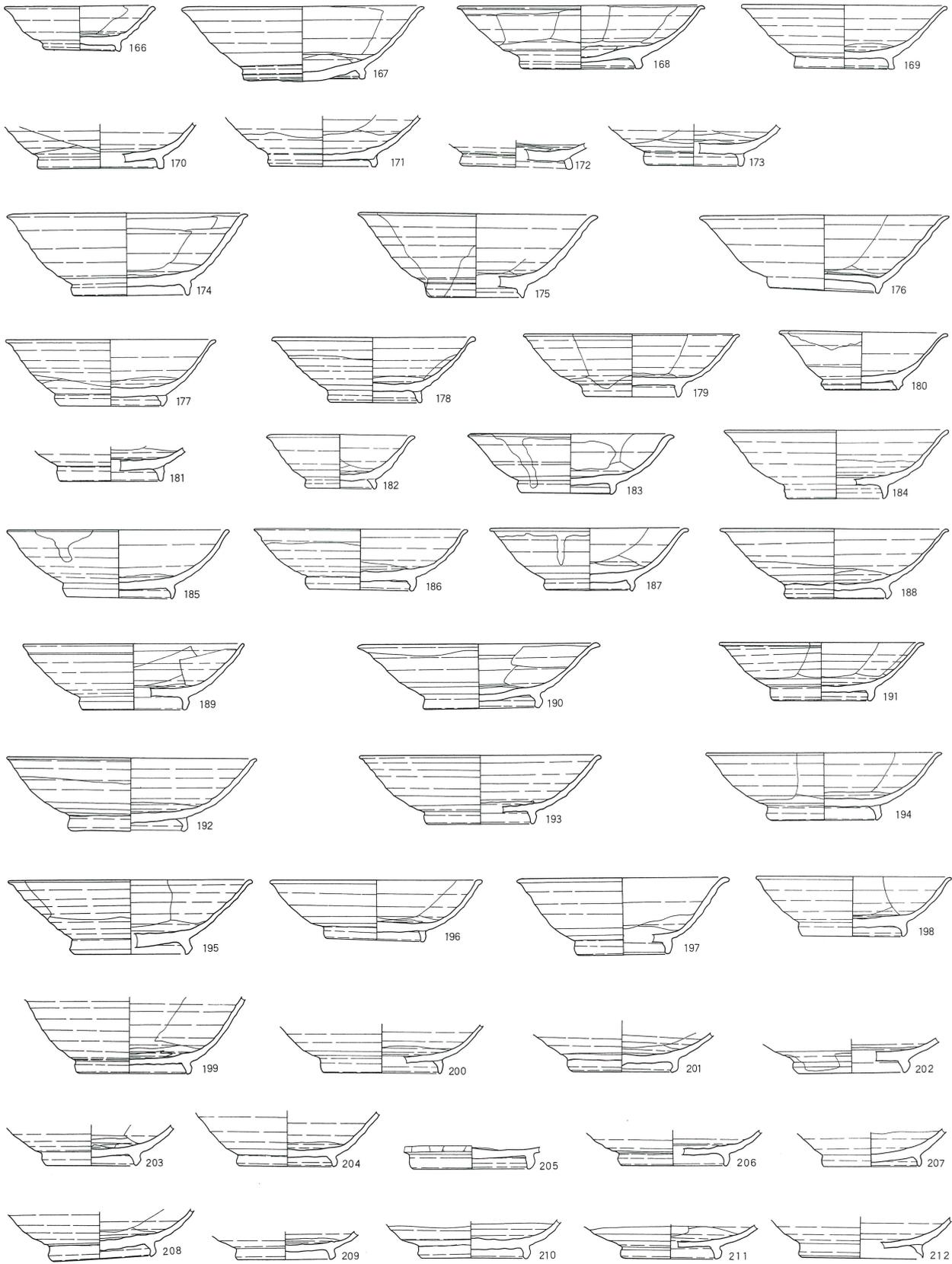
127から132までは、口縁部のみで資料で、全て刷毛塗りである。132の内面には、施釉以前に刻書「十」が書かれている。

第907图 灰釉陶器集成(3)



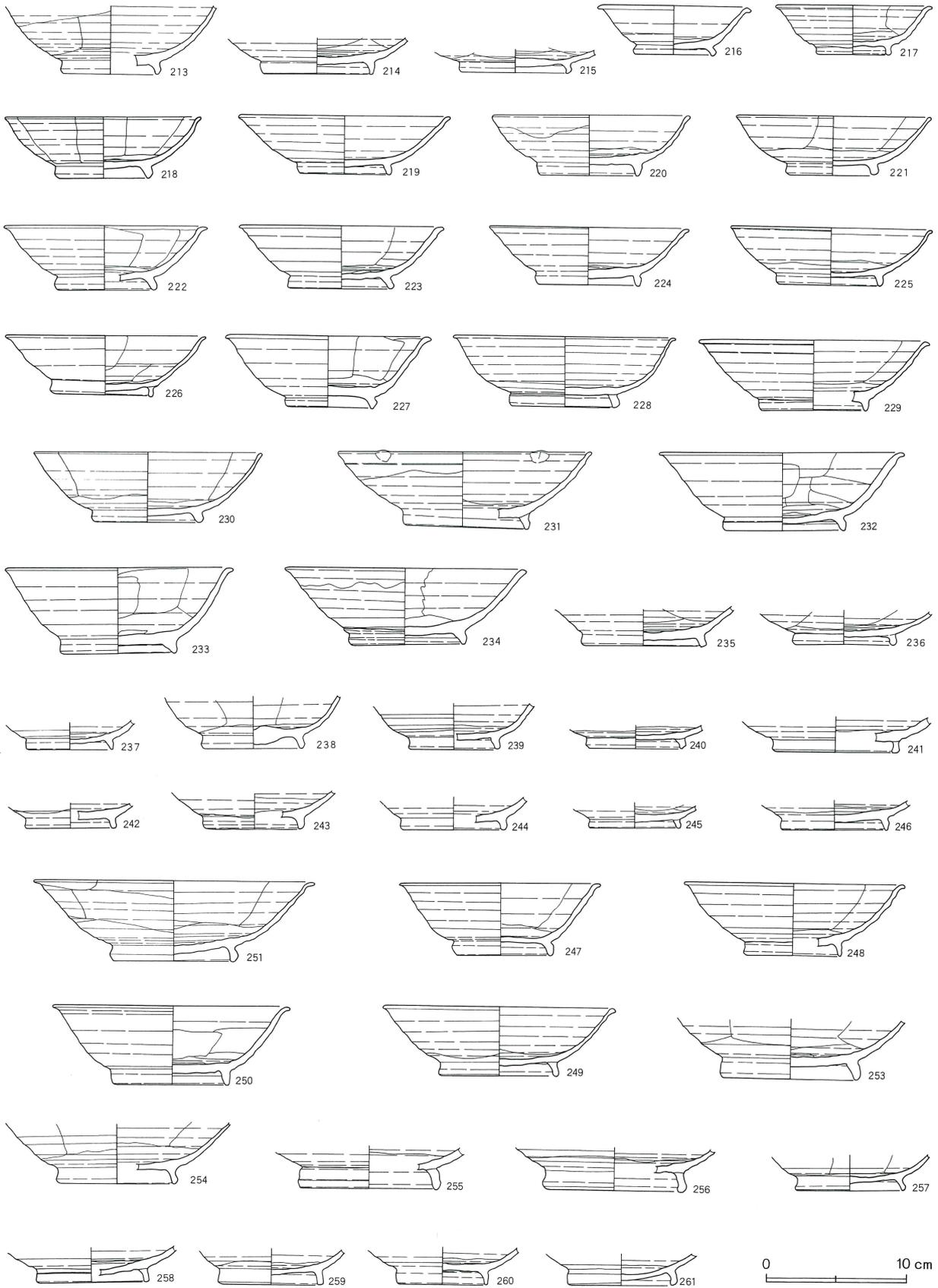
0 10 cm

第908图 灰釉陶器集成(4)



0 10 cm

第909图 灰釉陶器集成(5)



(段皿) 133から148は、段皿である。施釉は刷毛塗り、底部調整はヘラキリである。133は、角高台である。134は、三日月高台である。135や137は、高台と底部の接地面の幅が広い。135は、細長い高台である。輪花がみられる。138から148は、口縁部のみの段皿である。149から151は、三足盤か段皿である。

152から158は、耳皿である。152は、高台が付く。内面と耳部に施釉がみられる。底部調整はヘラキリである。153から157は、高台が付かない。153・154はつけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。155から157は、刷毛塗りによる施釉で、底部調整は、糸切りである。

159から165は、蓋である。161が唯一、肩部に張りのある形態で、他は緩く内湾する。外面に刷毛塗りが施釉される。

671から688は、長頸壺である。頸部に刷毛塗りによる施釉がみられる。最大径が、胴部の上半にある器形である。682は、肩部が鋭角に折れる長頸壺である。679は、胴部上半に付けられた把手である。

780から783は、短頸壺である。外面に釉がみられる。全て口縁部から胴部にかけての資料で、底部資料はみられない。784は、頸部の短い壺か甕である。口唇部が、ヘラで面取りされている。

786から801は、頸部が小さくまとまる瓶である。外面に施釉がみられる。786から796は大形、他は小形である。

813と814は、同一個体の可能性があるが、把手付平瓶である。816から818・820は、瓶類の把手である。823・824の器形は明らかにできなかった。おそらく瓶類の底部であろう。

宮口 宮口窯跡群で生産された可能性のある製品は、166から396、689から712、794・802から805、821・822・828・829の266点である。

(高台付椀) 166から285は、高台付椀である。166から270は、刷毛塗るか無釉の灰釉陶器である。また底部調整はヘラキリである。

166から173は、角高台だが、外へ一端張った後に、踏ん張るような形態である。166が小形の他は、法量にそれほど差はない。二川の角高台よりも125を除きやや高い。

174から181は、角高台よりも高台端部が小さく、接地面が傾斜し、面を持つ形態である。底部は均質であり太くならない。180のみ小振りである。

182から215は、三日月高台である。高台と底部との接地部の幅が厚く、高台端部で急速に屈折する。182だけが小形で、他はとくに法量差が大きくない。

216から246は、上記以外の短い高台で、全体にシャープさが無く、端部が丸く仕上げられている。三日月から三角がかった高台である。216・217は小形で、他は中から大であるが、その境は判然としない。

247から269は、高く細長い高台である。全体に直立し、端部で内湾している。251から256は、大形の高台付椀で、他は中型の高台付椀である。

270は、小形の椀で、高台は三角高台である。

271は、刷毛塗りによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は、接地幅の広い三角形の高台である。272・273は、つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は低い高台である。

274から285は、口縁部のみの資料で、277には輪花がみられる。内外面とも刷毛塗りによる施釉がみられる。

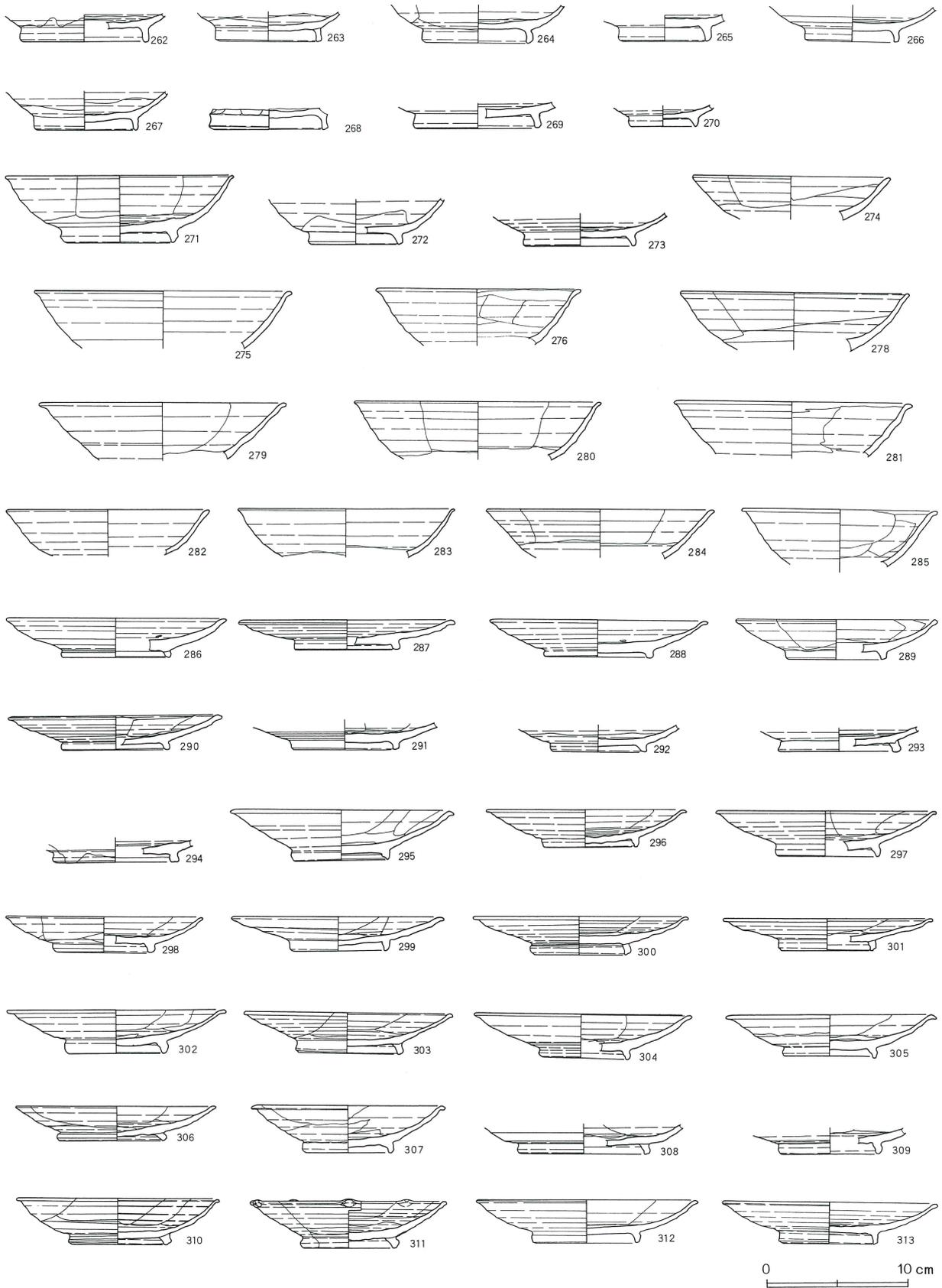
286から366は、高台付皿である。286から355は、刷毛塗りによる施釉か無釉で、底部調整はヘラキリである。286・288には、三叉トチンがあり、内面全面に施釉がみられる。

286から294は、角高台である。ただし293・294は、断面がM字状であり、やや異なる。また286や288・289は、底部に行くに従って器肉が厚くなる傾向にある。

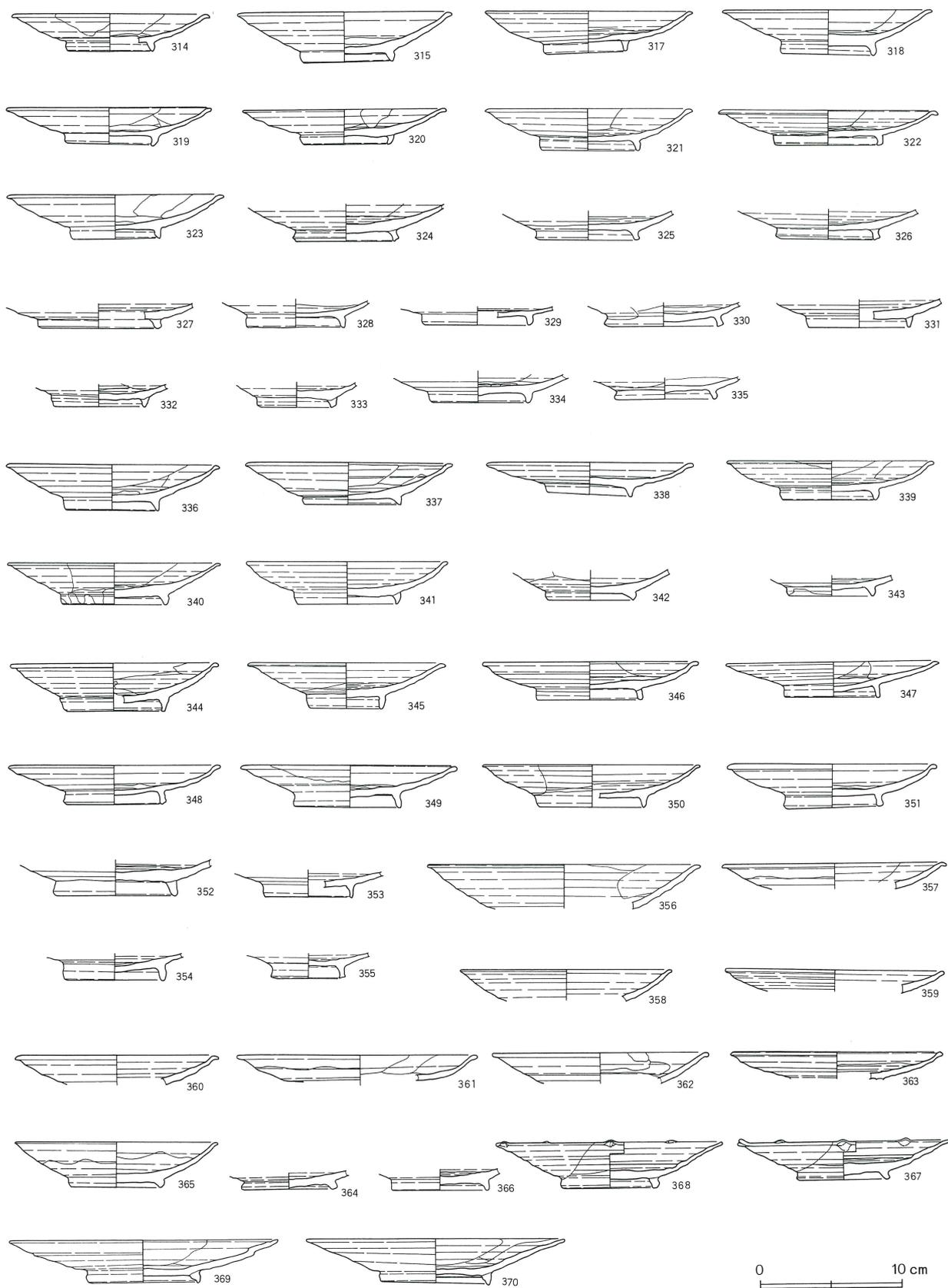
295から309は、角高台よりも高台端部が小さく、接地面が傾斜し面を持つ形態である。概して底部と高台の接地面の幅は狭い。

310から335は、低い三角形の高台で、様々であるが、内湾した三日月形となる。法量差がほとんどない。

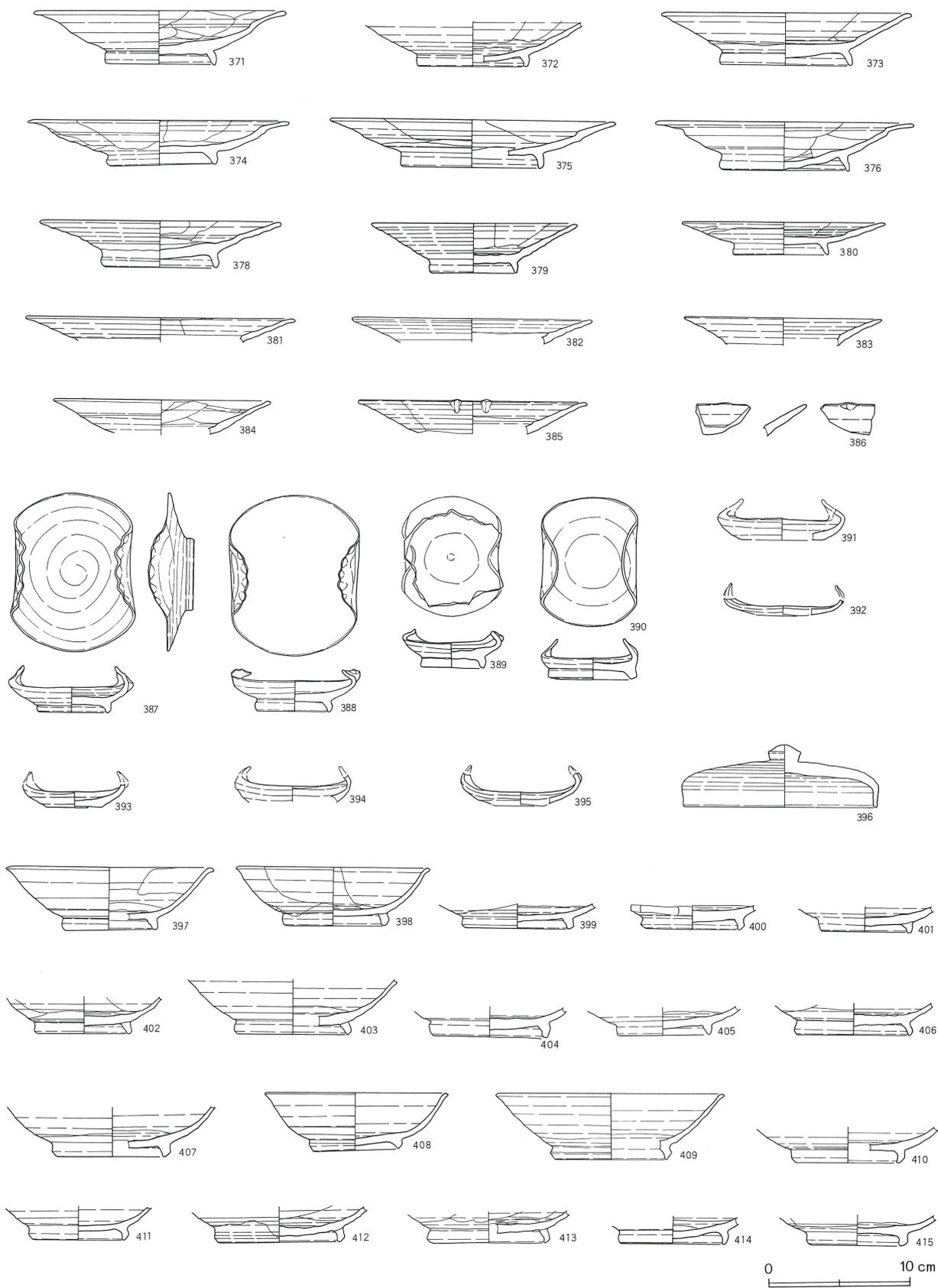
第910图 灰釉陶器集成 (6)



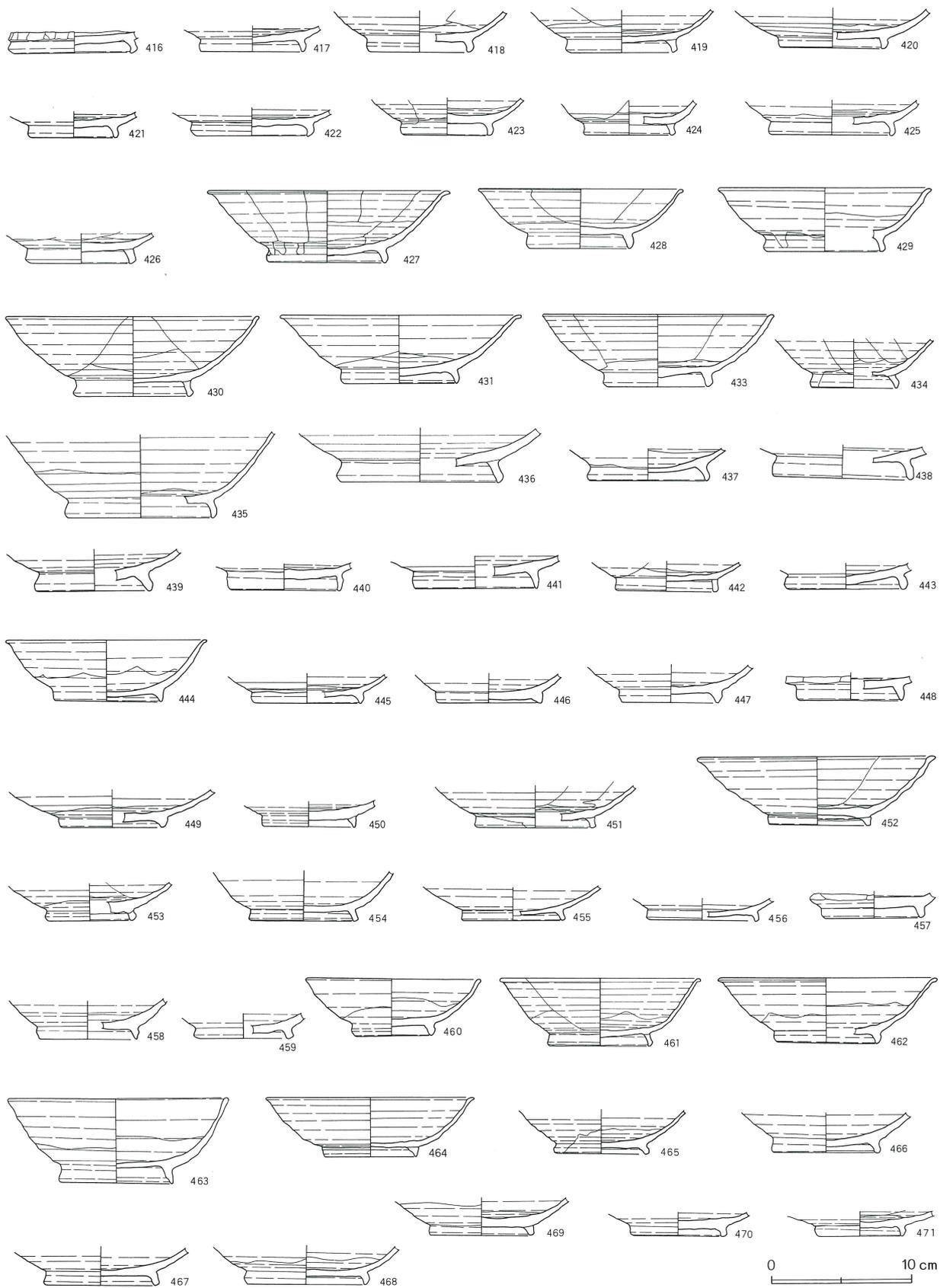
第911图 灰釉陶器集成 (7)



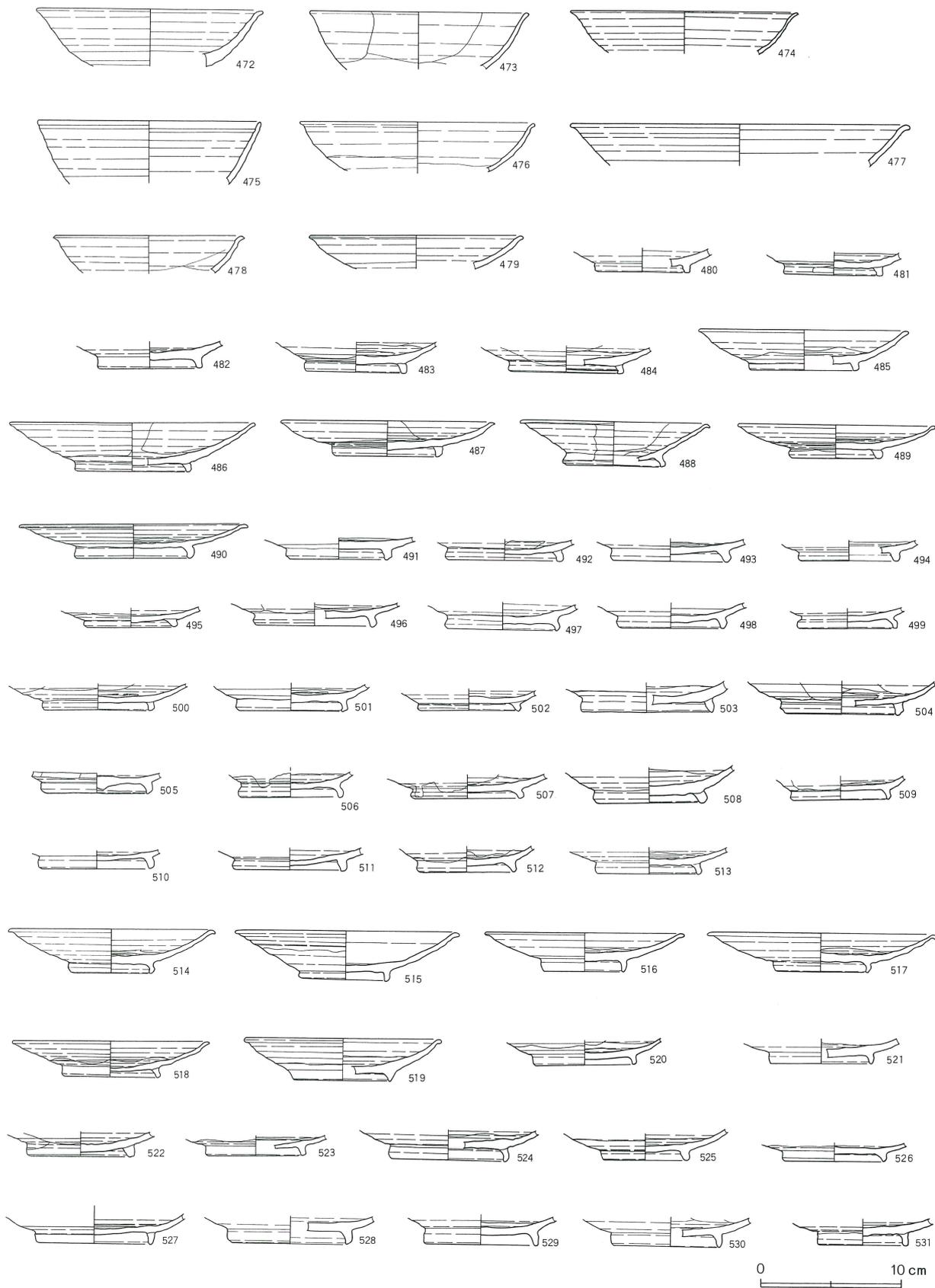
第912图 灰釉陶器集成(8)



第913图 灰釉陶器集成 (9)



第914图 灰釉陶器集成 (10)



336から343は、高台の内面が緩いカーブを描く三角形の高台である。外面は垂直に立ち上がる。

344から355は、高い高台の一群である。高い高台は比較的垂直に立つものが多く、端部は丸く仕上げられている。

356から363は、口縁部のみの資料である。全て刷毛塗りによって施釉されているか、無釉である。

364は、刷毛塗りによって施釉され、底部調整は糸切りである。高台は広がった角高台である。

365・366は、つけがけによって施釉され、底部調整は糸切りである。高台は三角形である。

(段皿) 367から386は、段皿である。367・368・385・386には、口唇部に輪花がある。367から380は刷毛塗りによって施釉され、底部はヘラキリである。381から386も刷毛塗りであり、底部調整もおそらくヘラキリであろう。

367から372の高台は低く、とくに367はやや崩れた角高台である。368から372は、高台内面の接地面が傾斜し面を持つ形態である。

373から380は、高い三日月の高台である。途中でやや屈折するのを特徴とする。

(耳皿) 387から395は耳皿である。387から390は高台付耳皿で、他はつかない。高台の付く耳皿は、刷毛塗りで施釉され、底部調整はヘラキリである。高台は低い三日月高台である。387・388の耳は、ヒダ状に作られている。389・390は、単純に作られた耳である。

391から395は、高台の付かない耳皿である。刷毛塗りによって施釉され、底部は糸切りのままである。耳は単純に内側へ折れただけである。

396は、蓋である。見込み部まで高く直立していることから短頸壺の蓋と考えられる。外面に丁寧に施釉され、淡い緑色に仕上げられた優品である。

689から712は、長頸壺である。頸部の内外面と肩部に施釉される。肩の張りの高い卵形の胴部で、頸部は細い。694・697は、把手が付く。

794は、大形の瓶である。802から804は、小形の瓶である。とくに803は、手付瓶である。805は、小形の

長頸壺の口縁部である。瓶は外面のみ施釉がみられる。

821・822は、手付瓶の把手である。

825は、長大な高台(脚部)の付く大形の器形で、内面にも施釉される。香炉火舎か。

826は、リング状の上部が付くようで、器形は不詳である。

清ヶ谷 清ヶ谷窯跡群で生産された可能性のある製品は、397から551、713から756、795・806・807・827から830の204点である。

(高台付椀) 397から479は、高台付椀である。397から459は、刷毛塗るか無釉の灰釉陶器である。また底部調整はヘラキリである。397から407の高台は、低く、高台内面にえぐり込み状の面を持つことを特徴としている。高台と底部の接地面の幅は狭い。

408から426の高台は、低い三日月状で、内側に強く屈曲し端面は鋭い。法量的なばらつきは少ない。

427から433の高台は、長く外に張り出した三日月状である。法量的に435・441のような大形とそれ以外に分かれる。

444から450は、高台と底部の接地面の幅が、広く高台端部の鋭い三角形の高台である。高台の高さは低い。

451から459は、その他の形態の高台である。451・452は、角高台に近いが退化している。

460から463は、つけがけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。高台は三角形か高い。

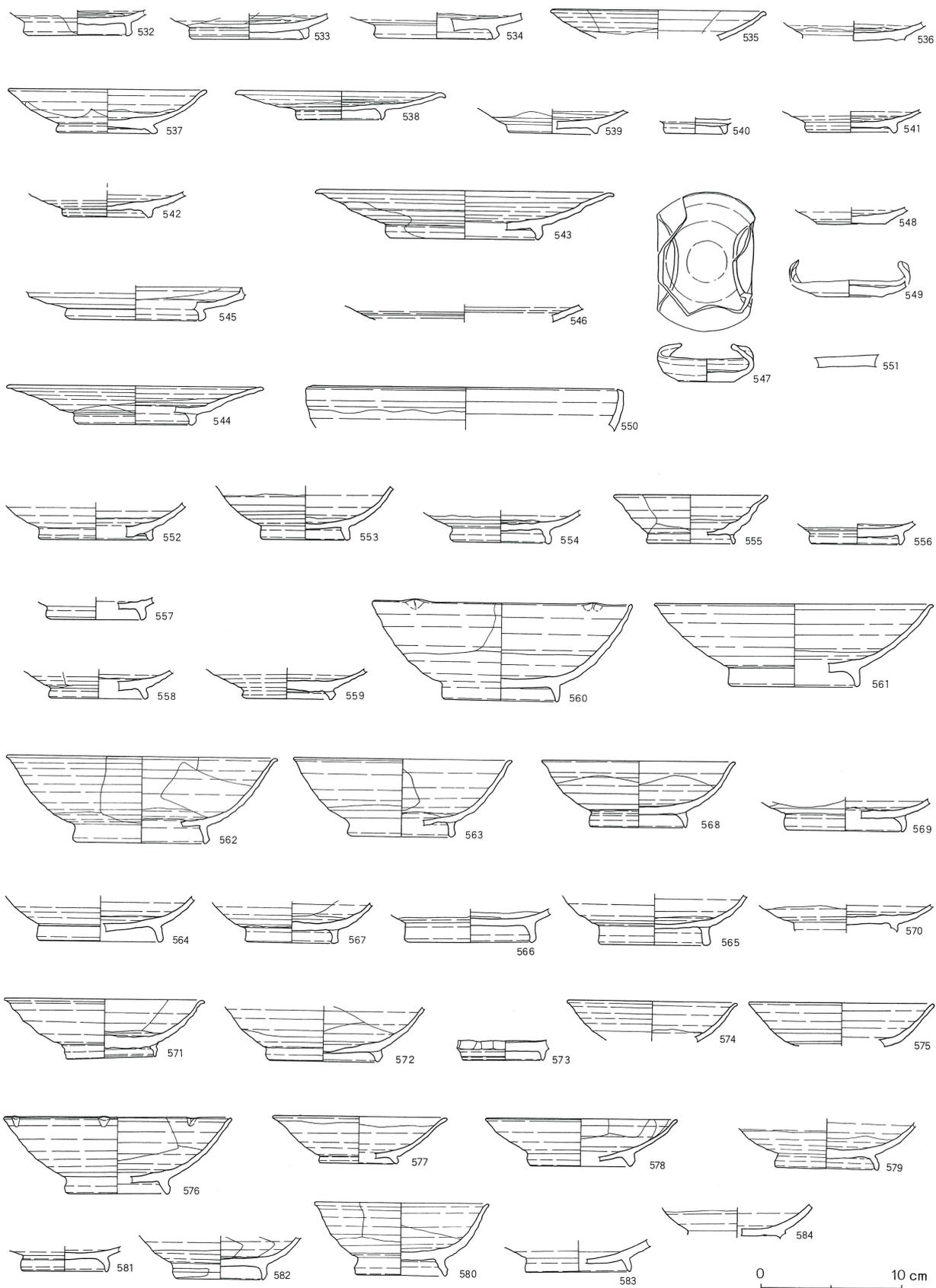
464から471は、つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は概して低く、とくに高台内面は緩くカーブしている。

475から479は、口縁部のみの資料である。

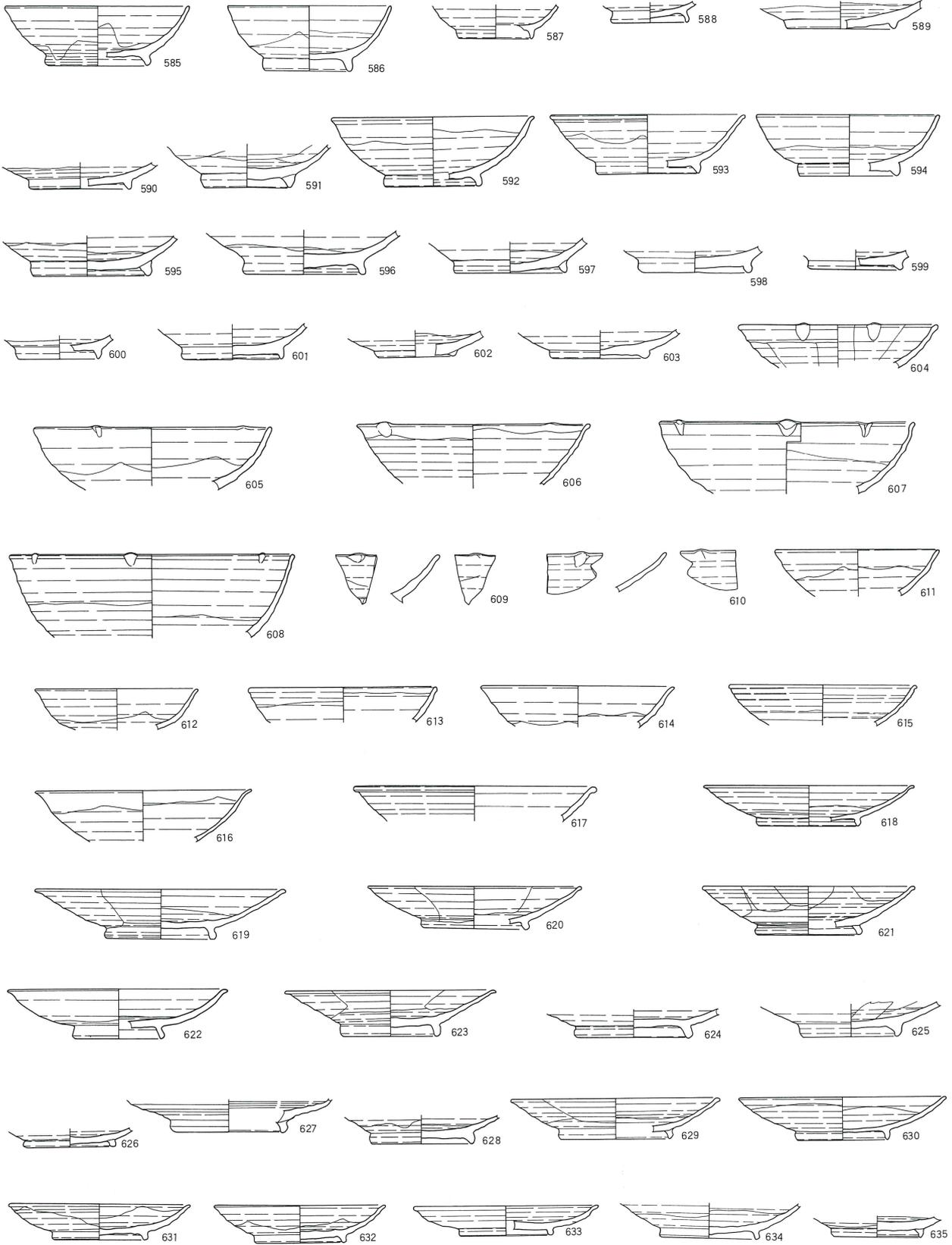
480から542は、高台付皿である。480から536は、刷毛塗るか無釉の灰釉陶器である。また底部調整は、ヘラキリである。480から485の高台は、角高台であるが、だいぶ退化している。

486から513の高台は、低い爪形の高台である。高台がやや厚めである。

第915图 灰釉陶器集成 (11)

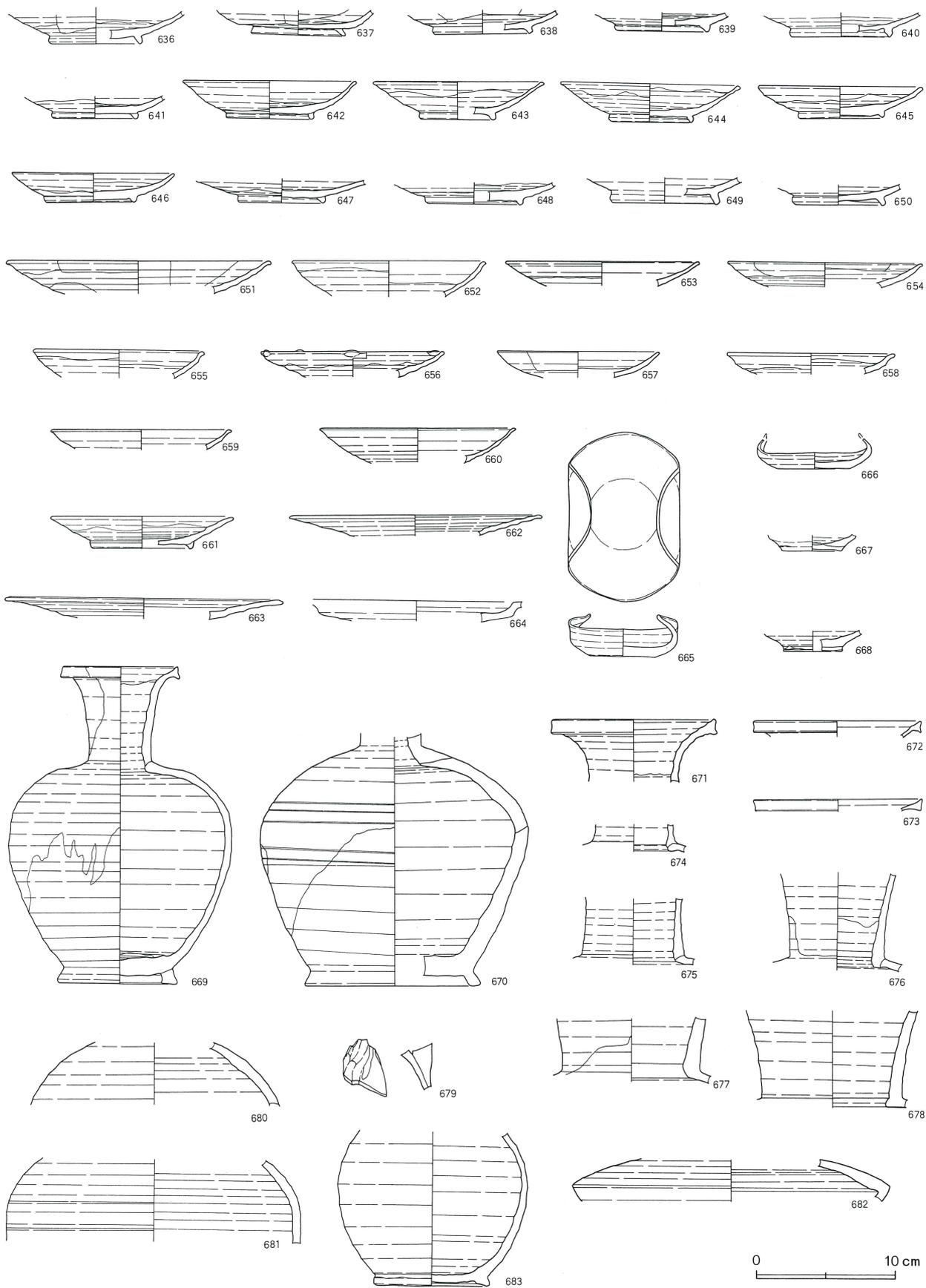


第916图 灰釉陶器集成 (12)

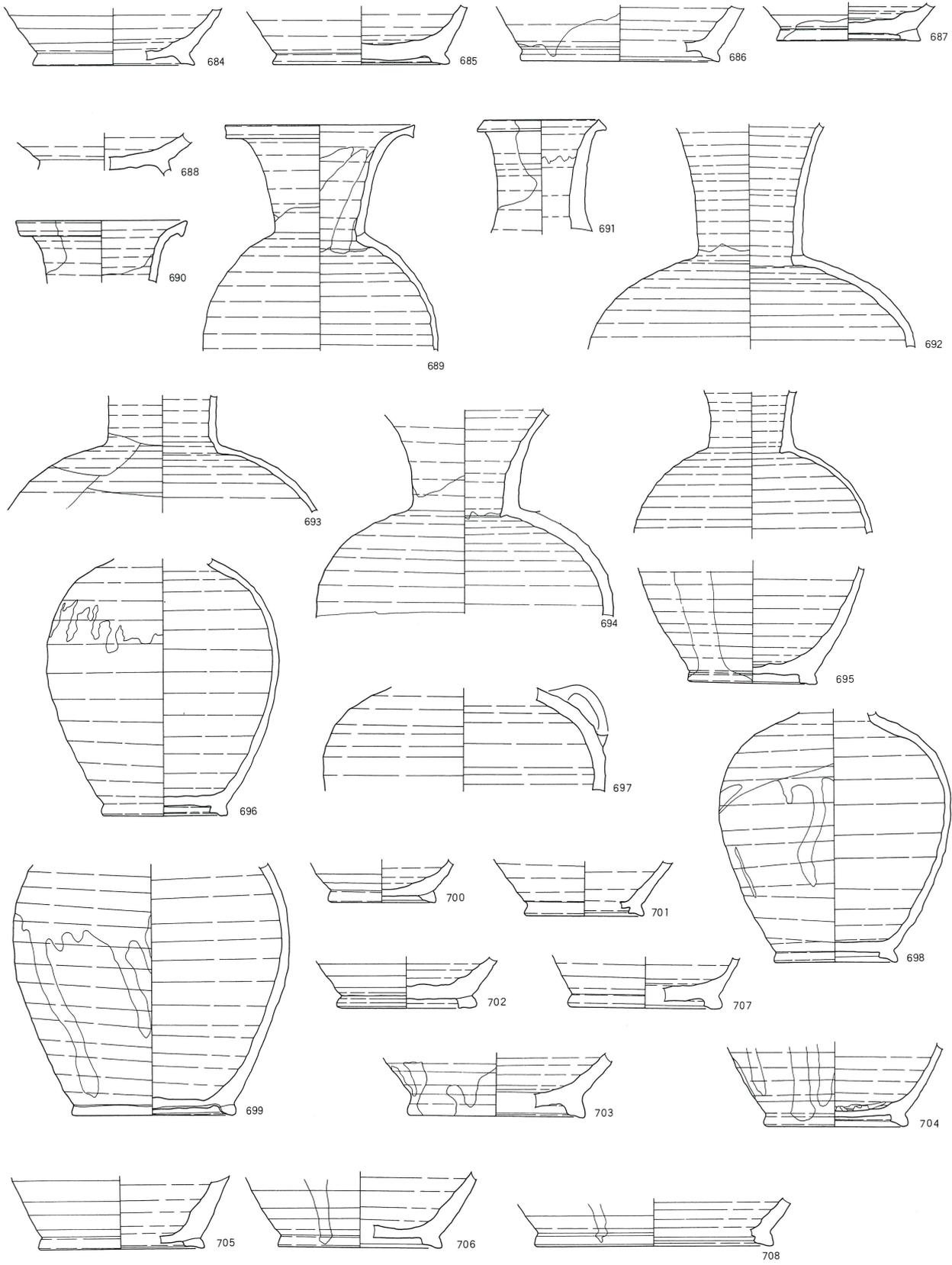


0 10 cm

第917图 灰釉陶器集成 (13)

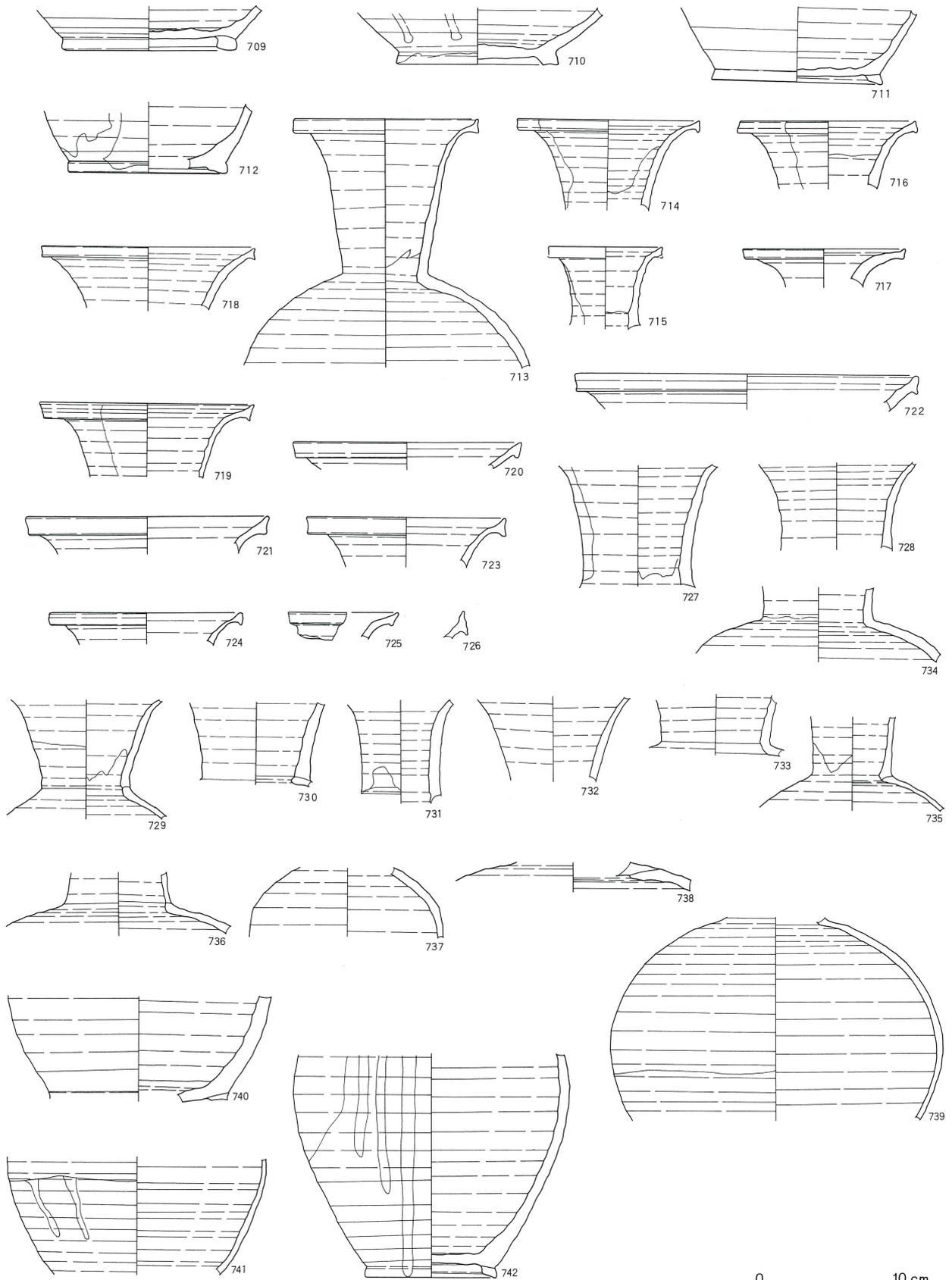


第918图 灰釉陶器集成 (14)

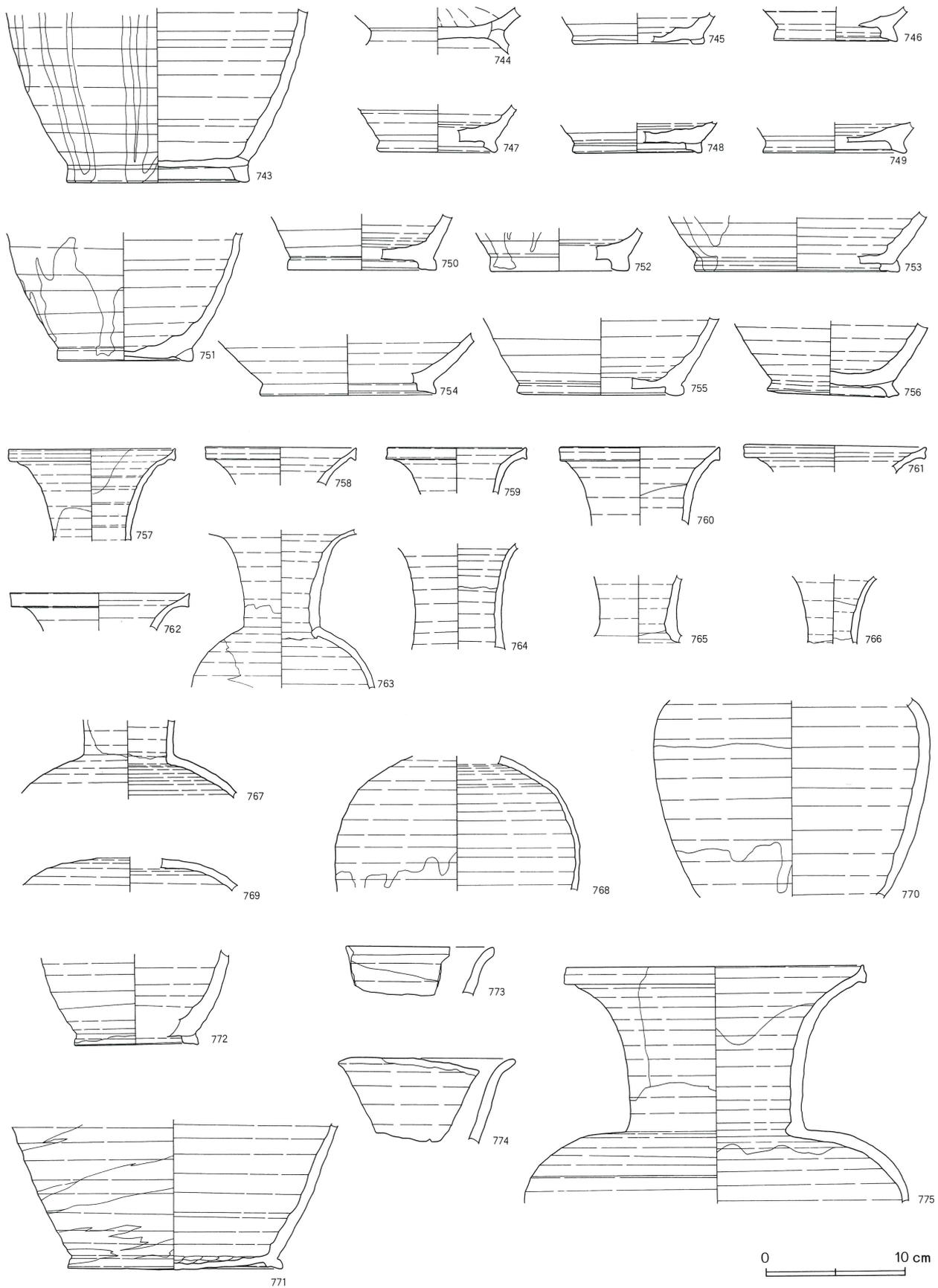


0 10 cm

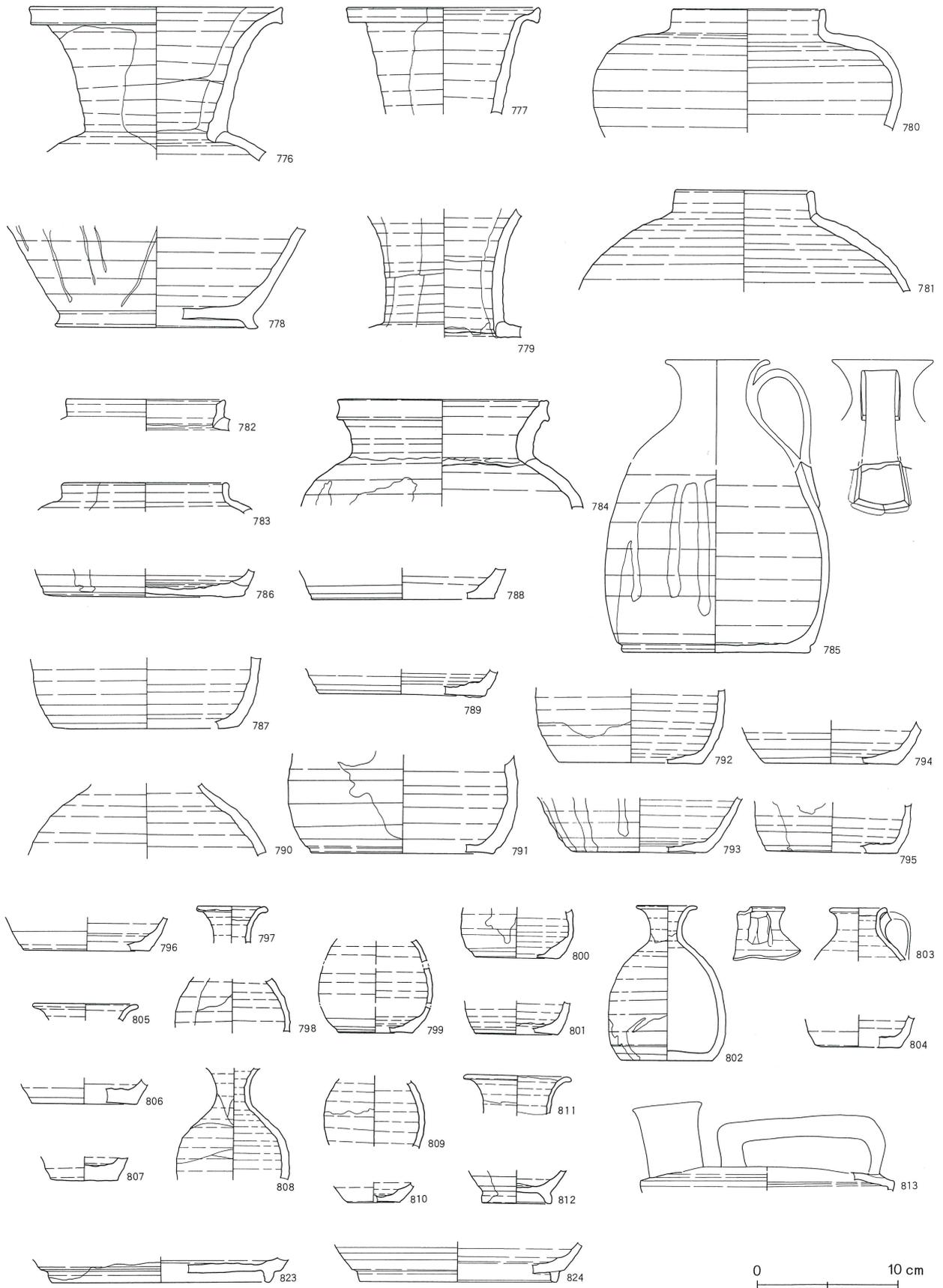
第919图 灰釉陶器集成 (15)



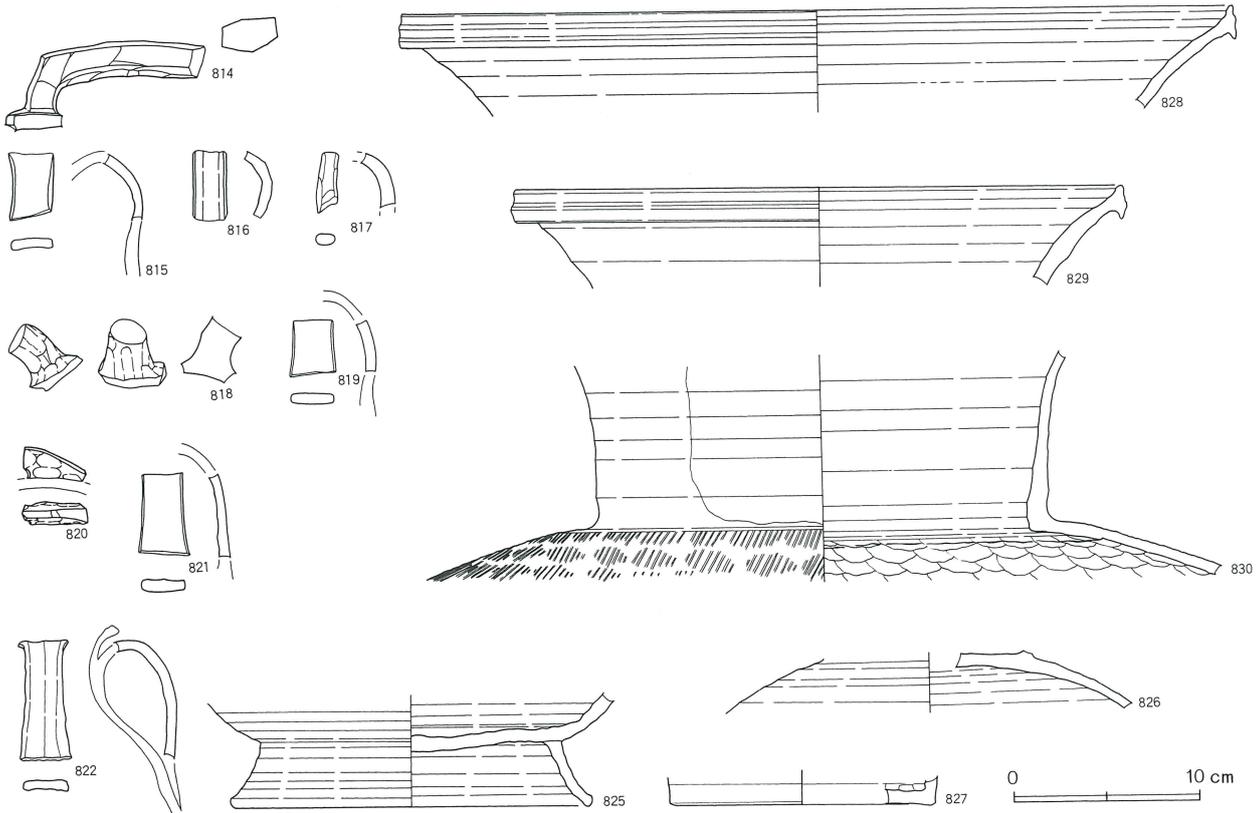
第920图 灰釉陶器集成 (16)



第921图 灰釉陶器集成 (17)



第922図 灰釉陶器集成 (18)



第 664 表 灰釉陶器一覽 (1)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
1	S J	35	48	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
2	S J	158	8	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
3	S J	50	1	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
4	S J	36	37	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
5	区画溝	1	4	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
6	区画溝	10	9	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
7	S J	172	10	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
8	S B	4	291	高台付 椀	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
9	O-53	表土	23	段 皿	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
10	S K	163	3	高台付 椀 転用 硯	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
11	K-14	K-16	9	段 皿	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
12	S B	55	13	段 皿	猿投	ハケヌリ	ヘラ切り
13	S B	55	14	段 皿	猿投	ハケヌリ	底部不詳
14	S K	552	1	段 皿	猿投	ハケヌリ	底部不詳
15	S B	55	16	段 皿	猿投	ハケヌリ	底部不詳
16	S B	54	80	三足 盤	猿投	無 釉	ヘラ切り
17	S B	55	26	高台付 大 椀	猿投	ハケヌリ	底部不詳
18	K-90	P-21	62	蓋	猿投	ハケヌリ	底部不詳
19	区画溝	12	59	高台付 椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
20	S J	22	5	高台付 椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
21	S K	第3土壙群 Q	14	高台付 椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
22	S J	186	6	高台付 椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り

第 665 表 灰釉陶器一覽 (2)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
23	K-14	G-6-4	3	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
24	S J	223	79	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
25	S J	194	11	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
26	S J	229	18	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
27	S J	188	10	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
28	S J	188	14	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
29	S J	186	5	高台付椀	二川	ハケヌリ	底部不詳
30	S J	48	51	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
31	S J	161	34	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
32	S J	55	6	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
33	S J	162	31	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
34	S E	SE-3	3	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
35	S J	243	5	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
36	S J	32	14	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
37	S K	671	1	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
38	S J	53	70	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
39	S B	4	300	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
40	O-53	I-9-3	17	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
41	S J	240	9	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
42	S J	135	15	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
43	S J	161	35	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
44	土器集中区	Q-16,17	14	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
45	S J	249	17	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
46	S J	161	36	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
47	S D	20	2	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
48	S J	45	12	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
49	K-90	J-15-1	5	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
50	区画溝	12	63	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
51	区画溝	7	7	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
52	S J	32	13	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
53	S J	162	28	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
54	S J	150	14	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
55	区画溝	28	1	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
56	S J	161	41	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
57	O-53	J-15-4	11	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
58	O-53	L-15-2	28	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
59	O-53	J-15-1	7	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
60	S J	217	65	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
61	S J	223	80	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
62	S J	197	60	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
63	S J	163	3	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
64	S J	45	13	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
65	S J	23	20	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
66	S J	37	45	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
67	K-90	J-11-1	14	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
68	K-90	J-15-2	13	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
69	S K	688	2	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
70	S J	246	5	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
71	S J	36	40	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
72	大甕	714	4	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
73	S J	26	9	高台付椀	二川	ハケヌリ	ヘラ切り

第 666 表 灰釉陶器一覽 (3)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
74	区画溝	12	74	高台付碗(転用硯)	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
75	K-90	表土	3	輪花付高台付碗	二 川	ハケヌリ	底部不詳
76	S J	198	18	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
77	K-90	G-10-3	4	高台付碗	二 川	ハケヌリ	底部不詳
78	K-90	J-15-2	1	輪花付高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
79	S J	38	20	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
80	S J	65	7	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
81	S J	220	52	輪花付高台付碗	二 川	ハケヌリ	底部不詳
82	区画溝	7	6	高台付碗	二 川	ハケヌリ	底部不詳
83	O-53	J-15-1	2	高台付碗	二 川	ハケヌリ	底部不詳
84	S J	171	2	高台付碗	二 川	ハケヌリ	底部不詳
85	S J	220	51	高台付碗	二 川	ツケガケ	ヘラ切り
86	O-53	表土	15	高台付皿	二 川	ツケガケ	糸切り
87	S B	55	6	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
88	S B	54	48	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
89	S J	127	11	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
90	S B	54	47	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
91	K-14	R-23	5	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
92	K-14	C-4-3	8	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
93	K-14	F-4-2	2	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
94	K-14	R-20-2	6	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
95	K-14	S-18-4	4	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
96	S X	4	5	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
97	区画溝	28	2	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
98	S B	55	12	段	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
99	K-14	表土	7	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
100	S J	223	83	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
101	S J	109	17	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
102	S K	第3土壌群 C	2	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
103	S J	225	5	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
104	S J	214	19	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
105	S J	151	9	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
106	S X	3	5	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
107	S B	48	1	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
108	O-53	J-7	12	高台付皿	二 川	ツケガケ	ヘラ切り
109	S J	48	55	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
110	K-90	E-8-1	45	高台付碗 <small>カ</small> 皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
111	区画溝	12	70	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
112	区画溝	12	67	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
113	S J	36	45	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
114	S J	202	44	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
115	S J	48	54	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
116	S B	4	294	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
117	S J	162	30	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
118	S J	166	1	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
119	S J	197	68	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
120	S K	第2土壌群	46	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
121	S J	75	60	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
122	区画溝	12	62	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
123	O-53	F-7-2	14	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
124	S J	27	8	高台付碗	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り

第 667 表 灰釉陶器一覽 (4)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
125	S B	4	296	高台付皿	二 川	ハケヌリ	糸切り
126	K-90	表土	31	高台付皿	二 川	ハケヌリ	糸切り
127	S J	162	27	高台付皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
128	S D	25	5	高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
129	S J	155	32	高台付皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
130	S J	241	3	皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
131	土器集中区	Q-16,17	15	高台付碗	二 川	ハケヌリ	底部不詳
132	K-90	J-10-2	58	高台付碗か皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
133	K-14	Q-22	10	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
134	S J	172	12	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
135	K-90	表土	35	輪花付高台付皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
136	K-90	表土	38	段皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
137	S J	17・18	6	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
138	S B	50	23	段皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
139	K-90	I-12	34	段皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
140	S J	32	15	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
141	S J	127	12	高台付皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
142	S B	53	3	高台付皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
143	集石列	1	1	段皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
144	S J	49	9	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
145	K-90	H-13-4	37	段皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
146	K-90	G-10-3	39	段皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
147	S J	197	70	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
148	S J	125	3	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
149	S B	4	305	三足盤	二 川	ハケヌリ	底部不詳
150	区画溝	6	10	段皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
151	S J	194	10	段皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
152	S K	47	1	耳皿	二 川	ハケヌリ	ヘラ切り
153	S J	140	39	耳皿	二 川	ツケがけ	糸切り
154	S J	163	1	耳皿	二 川	ツケがけ	糸切り
155	K-90	F-7	56	耳皿	二 川	ハケヌリ	糸切り
156	S J	161	43	耳皿	二 川	ハケヌリ	糸切り
157	区画溝	12	76	耳皿	二 川	ハケヌリ	糸切り
158	S E	2	10	耳皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
159	K-90	N-14-1	60	蓋	二 川	ハケヌリ	-
160	K-90	M-15-3	59	蓋	二 川	ハケヌリ	-
161	S J	222	22	蓋	二 川	ハケヌリ	-
162	K-90	H-5-1	61	蓋	二 川	ハケヌリ	-
163	S X	3	6	蓋	二 川	ハケヌリ	-
164	S J	199	15	蓋	二 川	ハケヌリ	-
166	S B	54	20	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
167	S B	54	40	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
168	S J	74	1	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
169	S J	75	57	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
170	区画溝	11	8	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
171	S J	220	50	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
172	S J	34	11	高台付碗	宮 口	無釉	ヘラ切り
173	S J	75	59	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
174	S B	54	34	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
175	S B	54	41	高台付碗	宮 口	無釉	ヘラ切り
176	S B	54	36	高台付碗	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り

第 668 表 灰釉陶器一覽 (5)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
177	S J	161	39	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
178	S B	4	285	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
179	S K	第 1 土壙群 C	8	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
180	S B	54	17	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
181	S J	49	7	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
182	S B	54	19	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
183	S B	54	21	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
184	S J	199	9	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
185	S J	197	59	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
186	S J	248	45	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
187	S B	54	22	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
188	S J	248	44	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
189	区画溝	7	5	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
190	S B	54	38	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
191	K-90	J-15-1	6	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
192	S J	155	28	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
193	S K	第 1 土壙群 D	14	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
194	S J	161	37	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
195	S K	272	31	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
196	S J	155	29	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
197	S B	54	24	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
198	S K	第 4 土壙群 L	21	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
199	S B	54	45	高台付椀	宮口	ヘラ切り	ハケヌリ
200	S J	251	2	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
201	S B	4	288	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
202	S J	197	63	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
203	S J	229	19	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
204	S J	152	31	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
205	S J	46	14	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
206	S J	248	47	高台付皿	宮口	無釉	ヘラ切り
207	S J	54	23	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
208	S B	4	287	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
209	S B	50	13	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
210	S B	4	289	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
211	S B	55	15	段皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
212	S K	67	2	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
213	K-90	J-15-2	10	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
214	K-90	J-15-2	33	高台付皿	宮口	無釉	ヘラ切り
215	K-90	M-15-2	32	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
216	S B	54	18	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
217	S B	4	293	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
218	区画溝	24	10	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
219	S J	114	7	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
220	S J	199	10	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
221	S J	27	5	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
222	S B	54	28	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
223	S B	54	26	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
224	S B	54	25	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
225	S J	202	40	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
226	S B	54	29	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
227	S B	54	23	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り

第 669 表 灰釉陶器一覽 (6)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
228	S J	217	61	高台付 椀	宮 口	無 釉	ヘラ切り
229	S B	54	42	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
230	S J	227	4	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
231	S J	95	9	高台付 輪花 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
232	S B	54	37	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
233	S B	54	33	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
234	S B	54	39	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
235	S B	54	46	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
236	S B	4	298	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
237	K-90	I-16-3	17	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
238	K-90	J-16-2	11	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
239	S B	50	12	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
240	S J	214	20	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
241	S D	25	3	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
242	S J	256	5	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
243	S J	42	7	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
244	S B	42	4	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
245	S J	161	42	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
246	S J	199	13	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
247	S B	54	27	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
248	S B	4	284	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
249	大甕	714	6	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
250	S B	54	35	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
251	土器集中区	Q-16,17	12	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
253	S B	38	1	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
254	O-53	R-22 (23)	4	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
255	S J	48	52	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
256	S D	25	4	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
257	S J	189	4	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
258	S D	25	2	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
259	K-90	J-16-3	16	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
260	S E	2	7	高台付 椀	宮 口	無 釉	ヘラ切り
261	S J	185	10	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
262	O-53	表土	13	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
263	S J	161	40	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
264	K-90	J-15-2	15	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
265	K-90	J-14-4	53	高台付 椀 <small>か</small> 皿	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
266	S J	197	62	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
267	S J	238	1	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
268	K-90	I-15-4	19	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
269	区画溝	4	7	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
270	区画溝	22	1	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
271	S K	第1土壌群 C	9	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	糸切り
272	S J	14	6	高台付 椀	宮 口	ツケガケ	糸切り
273	S K	528	4	高台付 皿	宮 口	ツケガケ	糸切り
274	S J	219	5	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
275	S J	192	6	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
276	S B	54	31	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
278	K-90		9	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
279	S B	54	43	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
280	S K	第1土壌群 D	15	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	底部不詳

第 670 表 灰釉陶器一覽 (7)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
281	S B	54	44	高台付椀	宮口	ハケヌリ	底部不詳
282	S J	152	32	高台付椀	宮口	無釉	ヘラ切り
283	S J	210	4	高台付椀	宮口	ハケヌリ	底部不詳
284	S J	219	6	高台付椀	宮口	ハケヌリ	底部不詳
285	S B	54	32	高台付椀	宮口	ハケヌリ	底部不詳
286	S J	217	70	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
287	S B	55	11	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
288	S B	54	49	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
289	S J	197	65	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
290	S B	55	7	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
291	区画溝	21	4	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
292	S J	19	28	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
293	S D	41	1	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
294	区画溝	12	69	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
295	S B	54	50	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
296	S B	54	64	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
297	S B	50	19	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
298	K-90	J-15-3	22	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
299	S J	217	73	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
300	S J	217	71	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
301	S J	223	82	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
302	S B	54	51	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
303	S J	240	12	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
304	S B	54	65	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
305	S B	54	52	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
306	S J	171	4	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
307	S J	248	46	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
308	S J	226	23	高台付椀	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
309	S J	40	6	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
310	S J	217	69	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
311	S J	223	78	輪花付高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
312	S J	197	64	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
313	S K	第 4 土壙群G	6	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
314	S B	54	66	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
315	S B	54	59	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
317	S J	173	18	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
318	S J	191	12	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
319	S B	54	61	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
320	S B	54	62	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
321	S K	第 4 土壙群L	22	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
322	K-90	M-12-4	23	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
323	S B	54	53	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
324	S J	152	35	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
325	S J	197	66	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
326	S J	181	1	高台付皿	宮口	無釉	ヘラ切り
327	S J	65	9	高台付皿	宮口	無釉	ヘラ切り
328	S J	46	13	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
329	S J	207	11	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
330	K-90	I-14-4	43	高台付椀か皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
331	S J	222	25	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
332	区画溝	12	72	高台付皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り

第 671 表 灰釉陶器一覽 (8)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
333	表土 K-90	M-14-3	49	高台付 椀 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
334	S J	152	36	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
335	S J	191	14	高台付 椀 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
336	S B	54	56	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
337	S B	54	55	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
338	S B	54	63	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
339	S K	第 4 土壙群	38	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
340	S K	第 2 土壙群	45	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
341	K-90	O-16-2	26	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
342	S J	211	3	高台付 椀 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
343	S J	193	2	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
344	K-90	表土	25	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
345	K-90	O-17	28	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
346	S B	50	17	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
347	S J	217	72	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
348	S B	54	57	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
349	S B	54	58	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
350	K-90	J-15	24	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
351	S B	54	60	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
352	S B	4	303	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
353	区画溝	22	2	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
354	区画溝	31	1	高台付 椀 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
355	K-90	M-15-2	52	高台付 椀 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
356	S B	55	10	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
357	S B	50	18	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
358	S B	44	4	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
359	S B	55	9	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
360	S B	54	68	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
361	S B	54	69	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
362	S B	54	67	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
363	ピット	P-23	1	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
364	S K	3	3	高台付 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	糸切り
365	S J	219	4	高台付 Ⅲ	宮 口	ツケガケ	糸切り
366	S K	416	10	高台付 Ⅲ	宮 口	ツケガケ	糸切り
367	S J	256	4	輪花付 段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
368	S J	252	4	輪花付 段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
369	S B	54	77	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
370	S B	54	71	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
371	S B	54	74	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
372	S J	49	8	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
373	S J	171	5	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
374	S B	54	76	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
375	区画溝	4	8	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
376	S B	54	75	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
378	S B	54	72	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
379	S D	28	3	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
380	S B	54	70	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
381	S B	33	2	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
382	K-90	H-5-1	40	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
383	S J	152	34	段 Ⅲ	宮 口	無釉	底部不詳
384	S B	54	73	段 Ⅲ	宮 口	ハケヌリ	底部不詳

第 672 表 灰釉陶器一覽 (9)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
385	K-90	J-12-4	36	輪花付高台付皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
386	O-53	表土	29	輪花付段皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
387	S B	54	79	耳皿	二川	ハケヌリ	糸切り
388	S B	54	78	耳皿	二宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
389	S J	228	4	耳皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
390	S B	4	167		宮口	ハケヌリ	ヘラ切り
391	S J	162	32	耳皿	宮口	ハケヌリ	糸切り
392	S K	第 2 土城群	47	耳皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
393	S K	502	1	耳皿	宮口	ハケヌリ	糸切り
394	K-90	F-7-2	55	耳皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
395	O-53	J-11-1	33	耳皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
396	S J	10	13	短頸壺蓋	宮口	ハケヌリ	ヘラ削り
397	S B	54	30	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
398	S J	75	56	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
399	区画溝	21	3	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
400	S J	36	43	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
401	S J	199	14	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
402	S J	217	66	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
403	S J	172	11	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
404	S J	18	28	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
405	S J	197	69	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
406	O-53	M-15-2	3	高台付椀	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
407	K-90	J-15-2	7	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
408	S J	217	64	高台付椀	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
409	S J	161	38	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
410	S J	197	67	高台付皿	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
411	S J	115	2	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
412	区画溝	12	64	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
413	S J	155	30	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
414	S J	112	30	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
415	S J	207	9	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
416	S J	36	42	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
417	ピット		1	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
418	S D	24	2	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
419	S J	222	23	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
420	S J	219	7	高台付椀	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
421	区画溝	2	1	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
422	S B	4	297	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
423	区画溝	7	4	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
424	S J	228	3	高台付椀	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
425	S J	199	11	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
426	S J	162	29	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
427	土器集中区	Q-16.17	13	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
428	S J	197	58	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
429	S J	75	58	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
430	S J	217	62	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
431	S J	53	68	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
433	S K	199	1	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
434	S B	50	11	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
435	S J	202	41	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
436	S J	148	5	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り

第 673 表 灰釉陶器一覽 (10)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
437	S J	27	7	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
438	S J	185	9	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
439	S K	第3土壙群F	5	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	ヘラ切り
440	S B	4	302	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
441	S J	75	61	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
442	S J	217	67	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
443	K-90	表土	8	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
444	S J	118	15	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	ヘラ切り
445	S B	4	292	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
446	S J	36	41	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	ヘラ切り
447	S K	553	6	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
448	S J	114	8	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
449	S B	50	16	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
450	K-90	R-11-3	48	高台付 椀か皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
451	S J	217	68	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
452	S J	248	43	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	ヘラ切り
453	S J	240	10	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
454	S J	36	39	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
455	S J	134	9	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	ヘラ切り
456	区画溝	11	7	高台付 椀	清ヶ谷	不 詳	ヘラ切り
457	S X	2	9	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
458	K-90	R-16-2	18	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
459	O-53	R-11-1	20	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
460	S K	297	2	高台付 椀	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
461	S J	217	63	高台付 椀	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
462	S J	14	5	高台付 椀	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
463	S J	78	7	高台付 椀	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
464	S J	247	11	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	糸切り
465	S K	325	1	高台付 椀	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
466	S J	59	13	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	糸切り
467	S J	16	9	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	糸切り
468	S J	227	5	高台付 椀	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
469	S J	68	2	高台付 椀	清ヶ谷	無 釉	糸切り
470	S B	50	20	高台付 皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
471	S B	4	301	高台付 皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
472	K-14	D-5-4	1	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
473	S J	27	6	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
474	区画溝	14	6	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
475	区画溝	6	9	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
476	S J	122	9	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
477	区画溝	14	7	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
478	S J	152	33	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
479	S B	55	8	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
480	ピット	H-12	1	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
481	S J	226	24	高台付 椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
482	区画溝	14	8	高台付 皿	清ヶ谷	無 釉	ヘラ切り
483	S J	172	14	皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
484	S J	223	84	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
485	K-90	J-15	21	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
486	S J	55	4	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
487	S J	252	5	高台付 皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り

第674表 灰釉陶器一覽(11)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
488	S B	4	299	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
489	S J	240	13	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
490	O-53	L-7	9	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
491	K-90	G-10-4	42	高台付椀か皿	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
492	S J	172	13	皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
493	K-90	J-12-1	44	高台付椀か皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
494	K-90	R-14-2	47	高台付椀か皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
495	S J	54	27	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
496	S K	644	1	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
497	S J	191	15	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
498	S D	1	13	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
499	S J	135	16	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
500	S J	145	9	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
501	S B	4	290	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
502	S J	55	5	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
503	S J	48	53	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
504	区画溝	12	66	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
505	S J	46	15	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
506	S K	294	1	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
507	S K	347	3	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
508	区画溝	12	61	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
509	K-90	J-7-2	50	高台付椀か皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
510	K-90	J-11-3	51	高台付椀か皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
511	S J	238	2	高台付椀	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
512	S K	第1土壙群O	44	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
513	S J	248	48	高台付皿	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
514	K-90	P-17-2	30	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
515	S B	54	54	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
516	S J	207	10	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
517	S B	4	295	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
518	S J	222	24	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
519	K-90	J-15-4	27	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
520	S E	2	8	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
520	S J	202	45	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
521	S J	189	6	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
522	S J	218	6	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
523	S J	229	20	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
524	区画溝	12	65	高台付椀	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
525	S J	18	29	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
526	S J	189	7	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
527	K-90	表土	41	高台付椀か皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
528	S J	109	16	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
529	S K	272	32	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
530	S J	53	69	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
531	区画溝	12	73	高台付皿	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
532	S J	199	12	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
533	S J	155	31	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
534	S J	257	2	高台付皿	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
535	S J	192	7	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
536	O-53	S-22-3	8	高台付椀	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
537	S J	118	17	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り

第 675 表 灰釉陶器一覽 (12)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
538	K-90	O-17	29	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
539	S J	225	6	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
540	S J	217	74	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
541	O-53	R-19-1	19	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
542	S K	359	1	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
543	S B	50	22	段皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
544	S J	156	2	段皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
545	S J	53	72	高台付段皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
546	S D	23	2	段皿	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
547	S J	223	86	耳皿	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
548	O-53	J-11-1	30	耳皿	清ヶ谷	無釉	糸切り
549	表土 K-90	G-4-3	54	耳皿	清ヶ谷	無釉	糸切り
550	ピット	G-4	1	鉄鉢模倣	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
551	S J	70	2	円盤	清ヶ谷	不詳	糸切り
552	S J	65	8	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
553	区画溝	24	11	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
554	区画溝	20	5	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
555	区画溝	12	60	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
556	S J	37	46	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
557	区画溝	6	7	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
558	K-90	J-14-3	46	高台付椀か皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
559	土器集中区	Q-16,17	16	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
560	S J	87	33	高台付輪花椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
561	K-90	J-15-1	2	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
562	S K	第 1 土壙群 C	10	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
563	S J	170	8	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
564	S J	207	8	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
565	S J	223	81	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
566	S J	18	27	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
567	S J	202	42	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
568	S J	88	8	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
569	S J	164	6	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
570	土器集中区	Q-16-4	17	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
571	S B	4	286	高台付椀	東濃	ハケヌリ	糸切り
572	S J	235	8	高台付椀	東濃	ハケヌリ	糸切り
573	S J	59	14	高台付椀	東濃	ハケヌリ	糸切り
574	ピット	E-6	1	高台付椀	東濃	ハケヌリ	底部不詳
575	S D	23	1	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
576	S K	210	1	輪花付高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
577	S J	136	9	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
578	S J	188	9	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
579	S J	31	39	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
580	O-53	E-6-2	5	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
581	S J	87	35	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
582	S J	197	61	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
583	S J	104	19	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
584	S J	10	11	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
585	S J	91	5	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
586	S J	54	22	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
587	S B	65	1	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
588	S K	120	2	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り

第676表 灰釉陶器一覽(13)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
589	O-53	風倒木痕	16	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
590	O-53	E-3-2	27	段皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
591	K-90	風倒木痕	12	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
592	SJ	36	38	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
593	SJ	78	6	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
594	SJ	59	12	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
595	SJ	58	4	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
596	SJ	9	5	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
597	SJ	57	5	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
598	SJ	31	41	長頸壺	東濃	ツケガケ	糸切り
599	区画溝	6	8	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
600	SB	65	2	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
601	SJ	19	29	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
602	SJ	88	10	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
603	SJ	35	49	高台付椀	東濃	ツケガケ	糸切り
604	SD	1	14	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
605	SX	1	7	輪花付高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
606	SJ	29	3	高台付輪花椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
607	SB	3	5	輪花付高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
608	ピット	J-11P5	1	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
609	SJ	112	31	高台付輪花椀	東濃	ハケヌリ	糸切り
610	SJ	122	11	高台付輪花椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
611	SJ	118	16	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
612	SJ	88	9	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
613	SJ	122	10	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
614	SJ	87	34	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
615	O-53	I-12	1	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
616	SJ	126	4	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
617	O-53	G-5-3	6	高台付椀	東濃	ツケガケ	底部不詳
618	SJ	163	2	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
619	SK	169	1	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
621	SJ	240	11	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
622	SJ	189	5	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
623	K-90	J-15-3	20	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
624	SJ	12	2	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
625	SJ	53	71	高台付椀	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
626	SJ	54	28	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
627	区画溝	31	2	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
628	O-53	J-7-2	18	高台付皿	東濃	ハケヌリ	糸切り
629	SJ	202	43	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
630	SJ	167	3	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
631	SK	238	5	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
632	SB	3	3	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
633	SJ	54	25	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
634	SJ	191	13	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
635	SJ	154	2	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
636	O-53	E-6-3	31	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
637	SJ	54	24	高台付椀	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
638	SE	1	33	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
639	SB	50	21	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
640	O-53	I-12-3	25	段皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り

第 677 表 灰釉陶器一覽 (14)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
641	S J	121	11	高台付皿	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
642	S J	51	8	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
643	S J	118	18	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
644	O-53	M-10	24	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
645	S J	104	18	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
646	S J	36	44	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
647	S J	94	2	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
648	O-53	E-7-4	32	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
649	S J	8	3	高台付碗	東濃	ツケガケ	糸切り
650	O-53	G-10-1	21	高台付皿	東濃	ツケガケ	糸切り
651	S D	1	15	高台付皿	東濃	ハケヌリ	底部不詳
652	S J	178	8	高台付碗	東濃	ツケガケ	底部不詳
653	区画溝	23	8	高台付皿	東濃	ツケガケ	底部不詳
654	S E	1	32	高台付皿	東濃	ツケガケ	底部不詳
655	S J	57	6	高台付碗	東濃	ツケガケ	底部不詳
656	区画溝	12	68	輪花付高台付皿	東濃	ツケガケ	底部不詳
657	S J	188	11	高台付皿	東濃	ツケガケ	底部不詳
658	S J	54	26	高台付皿	東濃	ツケガケ	底部不詳
659	S J	SB-4	306	高台付碗	東濃	ツケガケ	底部不詳
660	ピット	L-13	1	高台付碗	東濃	ツケガケ	底部不詳
661	O-53	R-10-4	26	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
662	S B	4	304	段皿	東濃	ハケヌリ	底部不詳
663	S J	162	26	段皿	東濃	ツケガケ	底部不詳
664	S J	188	12	三足盤	東濃	ツケガケ	底部不詳
665	S B	47	1	耳皿	東濃	ハケヌリ	糸切り
666	S J	207	12	耳皿	東濃	ハケヌリ	糸切り
667	K-90	O-12-1	57	耳皿	東濃	ハケヌリ	糸切り
668	S J	217	75	耳皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
669	S J	203	18	長頸壺	猿投	瓶類	
670	S J	203	19	長頸壺	猿投	瓶類	
671	区画溝	22	3	長頸壺	二川	瓶類	
672	K-90	表土	63	長頸壺	二川	瓶類	
673	S J	152	45	長頸壺	二川	瓶類	
674	S J	58	8	長頸壺	二川	瓶類	
675	S B	50	35	長頸壺	二川	瓶類	
676	S B	55	19	長頸壺	二川	瓶類	
677	O-53	表土	37	長頸壺	二川	瓶類	
678	S J	35	69	長頸壺	二川	瓶類	
679	S K	第1土壌群	25	長頸壺	二川	瓶類	
680	S J	238	3	長頸壺	二川	瓶類	
681	K-90	J-12-1	67	長頸壺	二川	瓶類	
682	S K	201	4	広口長頸壺	二川	瓶類	
683	S K	347	7	長頸壺	二川	瓶類	
684	S B	53	4	長頸壺	二川	瓶類	
685	S J	26	12	長頸壺	二川	瓶類	
686	S K	347	8	長頸壺	二川	瓶類	
687	区画溝	2	2	長頸壺	二川	瓶類	
688	S J	43	2	長頸壺	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
689	S J	199	24	長頸壺	宮口	無釉	ヘラ切り
690	S B	55	18	長頸壺	宮口	瓶類	
691	S J	203	20	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り

第 678 表 灰釉陶器一覽 (15)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
692	S J	248	66	長頸瓶	宮口	瓶類	
693	S B	55	22	長頸壺	宮口	瓶類	
694	K-90	M-15-4	65	長頸壺	宮口	ハケスリ	
695	S B	54	82	長頸壺	宮口	瓶類	
696	S B	54	83	長頸壺	宮口	瓶類	
697	区画溝	16	6	把手付長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
698	S B	54	84	長頸壺	宮口	瓶類	
699	S J	219	8	長頸壺	宮口	瓶類	
700	S J	152	47	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
701	S J	14	8	壺底部	宮口	ハケスリ	ヘラ切り
702	S J	247	18	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
703	K-14	D-6-3	11	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
704	S J	245	21	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
705	S B	50	46	長頸瓶	宮口	瓶類	
706	S J	189	13	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
707	S B	55	24	長頸壺	宮口	瓶類	
708	S J	188	18	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
709	S E	2	13	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
710	S J	204	24	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
711	S J	202	61	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
712	S J	25	10	長頸壺	宮口	瓶類	ヘラ切り
713	S B	50	40	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
714	S J	197	86	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
715	S B	53	5	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
716	S B	50	37	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
717	S J	188	17	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
718	S J	31	58	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
719	S J	223	110	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
720	S J	48	74	広口長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
721	大甕	714	10	広口壺	清ヶ谷	瓶類	
722	K-90	R-9-1	64	広口壺	清ヶ谷	瓶類	
723	S K	283	4	長頸壺	清ヶ川	瓶類	
724	ピット	P-17	1	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
726						瓶類	
727	S J	170	12	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
728	O-53	G-7-4	36	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
729	S J	247	17	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
730	S J	235	15	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
731	S J	192	10	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
732	S J	45	18	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
733	S J	53	82	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
734	S B	55	21	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
735	S B	55	20	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
736	S B	50	36	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
737	S J	148	8	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
738	S B	46	2	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
739	S J	162	39	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
740	S B	55	23	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
741	S J	223	112	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
742	S B	50	48	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
743	S B	50	47	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	

第 679 表 灰釉陶器一覽 (16)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整	
744	S J	207	15	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
745	S J	220	62	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
746	S J	10	15	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
747	S K	第 1 土壙群N	42	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
748	区画溝		12	78	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
749	S J		194	12	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
750	S K		618	2	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
751	区画溝		20	6	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
752	S J	189	14	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
753	K-90	M-15-4	69	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
754	S J	53	83	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
755	S K	第 1 土壙群C	11	長頸壺	清ヶ谷	瓶類		
756	S J		161	51	長頸壺	清ヶ谷	瓶類	
757	S J	235	14	長頸壺	東濃	瓶類		
758	S B	50	39	長頸瓶	東濃	瓶類		
759	S J	162	37	長頸壺	東濃	瓶類		
760	S J	36	64	長頸壺	東濃	瓶類		
761	区画溝	31	3	長頸壺	東濃	瓶類		
762	S J	197	87	長頸壺	東濃	瓶類		
763	S J	150	20	長頸壺	東濃	瓶類		
764	区画溝	13	32	長頸壺	東濃	瓶類		
765	S J	162	38	長頸壺	東濃	瓶類		
766	S J	245	20	長頸壺	東濃	瓶類		
767	S J	189	10	長頸壺	東濃	瓶類		
768	S J	229	25	長頸壺	東濃	瓶類		
769	S J	161	50	長頸壺	東濃	瓶類		
770	S J	57	12	長頸壺	東濃	瓶類		
771	S B	4	314	広口長頸壺	東濃	瓶類		
772	S B	54	85	長頸壺	東濃	瓶類		
773	S J	27	13	広口壺	二川	瓶類		
774	S J	14	9	広口壺	二川	瓶類		
775	S J	8	7	長頸壺	東濃	瓶類		
776	S E	1	37	長頸壺	東濃	瓶類		
777	S B	50	38	長頸瓶	東濃	瓶類		
778	S J	9	8	長頸壺	二川	瓶類		
779	S D	5	3	長頸壺	東濃	瓶類		
780	S J	203	22	短頸壺	二川	瓶類		
781	S B	50	50	短頸瓶	二川	瓶類		
782	区画溝	6	11	短頸壺	二川	瓶類		
783	区画溝	11	12	短頸壺	二川	ハケヌリ	ヘラ切り	
784	区画溝	22	4	甕	不詳	瓶類		
785	S J	10	14	手付瓶	猿投	瓶類		
786	S B	50	33	手付瓶	猿投	瓶類		
787	S J	192	9	手付瓶	二川	瓶類		
788	区画溝	16	9	手付瓶	二川	瓶類		
789	区画溝	32	2	手付瓶	二川	瓶類		
790	K-90	M-13	66	長頸壺	二川	瓶類		
791	S K	428	1	手付瓶	二川	瓶類		
792	S B	50	32	手付瓶	二川	瓶類		
793	O-53	I-15	41	手付瓶	二川	ハケヌリ	糸切り	
794	S B	50	30	手付瓶	宮口	瓶類		

第 680 表 灰釉陶器一覽 (17)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
795	K-90	G-6-4	68	手付瓶	清ヶ谷	瓶類	
796	O-53	J-15-2	39	小瓶	東濃	瓶類	
797	S B	33	1	小瓶	東濃	瓶類	
798	区画溝	14	9	小瓶	二川	瓶類	
799	S E	1	36	小瓶	二川	瓶類	
800	O-53	G-4	38	小瓶	二川	ハケヌリ	糸切り
801	区画溝	13	30	小瓶	二川	瓶類	
802	S J	217	92	小瓶	宮口	糸切り	ハケヌリ
803	S B	54	81	小瓶	宮口	瓶類	
804	S B	4	313	小瓶	宮口	瓶類	
805	S B	50	24	段皿	宮口	瓶類	
806	S J	223	115	長頸瓶	清ヶ谷	瓶類	
807	S J	172	20	小瓶	清ヶ谷	瓶類	
808	S J	202	62	小瓶	東濃	瓶類	
809	O-53	S-15-2	34	小瓶	東濃	瓶類	
810	S J	19	30	壺	東濃	瓶類	
811	O-53	M-12-4	35	小瓶	東濃	瓶類	
812	S E	3	4	長頸壺		瓶類	
813	K-90	F-5-1	71	平瓶	二川	瓶類	
814	S J	249	24	平瓶	二川	瓶類	
815	S B	50	28	手付瓶	猿投	瓶類	
816	S J	248	67	手付長頸瓶	二川	瓶類	
817	区画溝	20	7	手付瓶(把手)	二川	瓶類	
818	大甕	720	6	把手	二川	瓶類	
819	S B	50	29	手付瓶	猿投	瓶類	
820	区画溝	12	77	四耳壺	二川	瓶類	
821	S B	54	87	手付瓶	宮口	瓶類	
822	S B	54	86	手付瓶	宮口	瓶類	
823	区画溝	21	5	手付瓶	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
824	O-53	N-15-1	40	長頸壺	二川	瓶類	
825	S B	4	315	長頸壺	宮口	瓶類	
826	S B	55	25	器形不詳	宮口	瓶類	
827	K-90	S-16-3	70	手付瓶	清ヶ谷	瓶類	
828	S J	223	117	大甕	清ヶ谷	瓶類	
829	区画溝	13	33	広口壺	不詳	瓶類	
830	S J	189	16	大甕	清ヶ谷	瓶類	

514から534の高台は、高い高台で爪形か三日月状である。513の高台は、三角状である。

535・536は、底部を欠損し、高台形態は、不詳である。

537から539は、つけがけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。高台は3点とも異なる。

540から542は、つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は、端部の丸い三角形状である。

543から546は、段皿である。刷毛塗りによる施釉で、

底部調整はヘラキリである。高台は低く、三日月状である。

547から549は、耳皿である。全て無釉で、547の底部調整はヘラキリ、他は糸切りである。

550は、口縁部のみの破片であるが、鉄鉢模倣碗と考えた。口縁部が、わずかに刷毛塗りで施釉されている。

551は、両面に糸切り痕の残る円盤状製品で、焼成・胎土は灰釉陶器と一致し、これで完形である。耳皿の

底部が剥離したものか。

713から756は、長頸壺である。頸部の内外面と肩部に施釉される。肩の張りの高い卵形の胴部で、頸部は細い。721・722は、広口長径瓶となる可能性が高い。

795は、大形の瓶である。806・807は、小形の瓶である。807は、いわゆる壺Gの可能性もある。

827の器形は不詳であるが、灰釉陶器である。828から830は、口縁部に灰釉のみられる大形の甕である。関東地方では生産された可能性は低く、ここに掲載した。

東濃 東濃の諸窯跡群で生産された可能性のある製品は、552から668、757から779、796・808から812の134点である。

(高台付椀) 552から617は、高台付椀である。552から570は、刷毛塗りで施釉され、底部調整はヘラキリである。552から555は、低い高台で、552は角高台である。他は低い三日月高台である。

556から559は、低い三角形の高台である。559は、面取りをされている。

560から570は、高い高台である。568・569は、三日月高台であり、他は垂直に細長く伸びる。後者には、大形の製品と、やや小型の製品がある。560には輪花がみられる。570は高台が欠損するが、ここに掲載した。

571から573は、刷毛塗りで施釉され、底部調整は糸切りである。高台は低い爪形である。

574・575は、口縁部のみの破片で、刷毛塗りがされている。

576から591は、つけがけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。576から584は、高い爪形である。585から591は、低い三角形の高台である。576には輪花がみられる。

592から603は、つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は概して低く、三角形から小凸帯状である。595・596は大形だが、他は小振りである。

604から617は、つけがけによる口縁部のみの資料で

ある。604から610は、口縁部に輪花がつく。

618から660は、高台付皿である。618から627までは、刷毛塗りによって施釉され、底部調整はヘラキリである。618から624までは、高台が低く外方へ踏ん張る形態である。

625は、高台と底部の接地幅が広く、三角形の高台である。626・627は、小さな高台で端部は円形である。

628は、刷毛塗りによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は三角形である。

629から641は、つけがけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。高台は小さく、三日月状から三角形までである。

642から650は、つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。642・643は、端部が丸く、小さな角高台である。645から648は、小さな三角形の高台である。649・650は、やや高めの高台で、外方へ伸びている。

651から660は、口縁部のみの破片で、651のみ刷毛塗りで、他はつけがけによつて施釉されている。656は、口縁部に輪花がつく。

661から663は、段皿である。661・662が刷毛塗りによつて施釉され、663は、つけがけによつて施釉されている。661のみ高台部が確認できる。三角形である。664は、段皿か三足盤と考えた。

665から668は、耳皿である。665から667までは刷毛塗りによる施釉で、底部調整は糸切りであるが、668は、ヘラキリである。高台の付く耳皿はみられない。

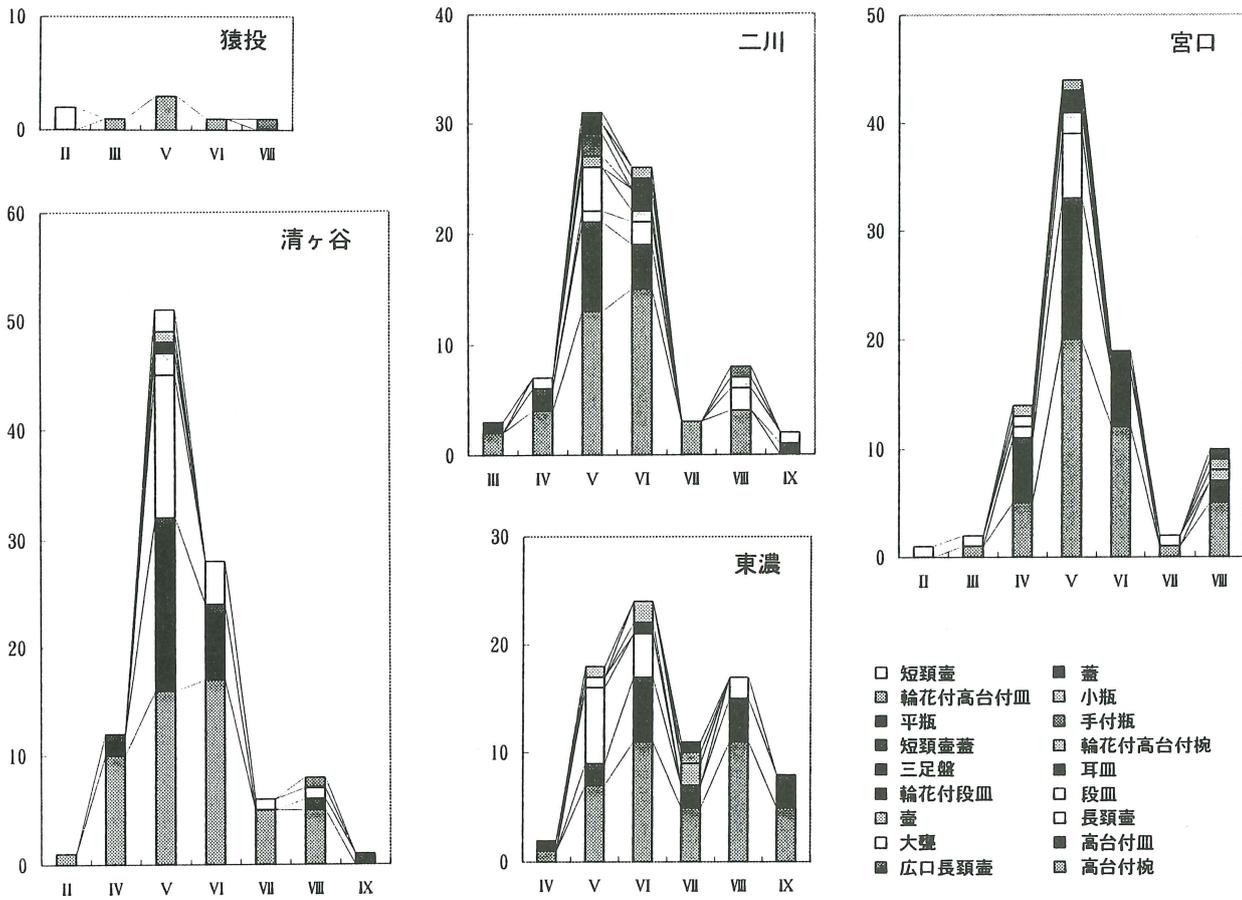
757から779は、長頸壺である。757から772は、細い頸部の長頸壺である。773から779は、広口の長頸壺である。両者とも口縁部から肩部にかけて施釉がみられる。

796は、大形の瓶である。808から810は、小形の瓶である。811は、広口長頸壺である。812は、細頸の長頸壺である。

さて次に以上の特色から、中堀遺跡から出土した灰釉陶器(供膳具)の窯式について、若干記しておくこととしたい。

猿投窯跡群の製品とした1から17は、斎藤孝正氏の

第923図 産地別出土量の推移



第 681 表 灰釉陶器産地別出土量集計

	猿 投								宮 口								清ヶ 谷									東 濃									二 川									計			その他			総計
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	IV	V	VI	VII	VIII	IX	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	II	V	VI											
高台付椀	0	1	3	1	0	5	0	1	5	20	12	1	5	44	1	10	16	17	5	5	0	54	1	7	11	5	11	5	40	2	4	13	15	3	4	0	41	0	1	2	188									
高台付皿	0	0	0	0	0	0	0	0	6	13	5	0	2	26	0	2	16	7	0	1	1	27	0	2	6	2	4	3	17	0	2	8	4	0	0	1	15	0	3	88										
長頸壺	2	0	0	0	0	2	1	1	1	6	0	1	0	12	0	0	13	4	1	1	0	21	0	7	4	0	2	0	13	0	0	1	2	0	2	1	6	0	0	53										
段皿	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	0	0	2	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	0	1	4	1	0	1	0	1	0	7	0	0	13									
耳皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	2	1	0	0	2	0	0	0	3	0	0	8										
輪花付高台付椀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	6										
手付瓶	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	3										
小瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3										
蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	2										
廣口長頸壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2										
大壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2										
壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2										
輪花付段皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2										
三足盤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1										
短頸壺蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1										
平瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1											
輪花付高台付皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1											
短頸壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1											
総計	2	1	3	1	1	8	1	2	14	44	20	3	10	94	1	13	51	28	6	9	1	109	2	18	24	11	17	8	80	3	7	31	26	3	8	2	80	1	4	2	380									

分類(斎藤1994)によると、1から3・11までが、黒笹14号窯式の2段階、4から6・12が、黒笹90号窯式1から2段階、7は黒笹3段階、8・9は、折戸53号窯式にそれぞれ位置付けられよう。

三河の二川窯跡群は、未報告資料が多く、窯式で述べることは難しいが、猿投窯跡群の窯式で確認される

施釉方法や底部調整、そしてなによりも高台や器形の変化などにに基づき、併行段階として考え、便宜的に猿投窯跡群の窯式名称を用いることとする。

三河産灰釉陶器は、19から162である。このうち19・20・87から90・95は、黒笹14号窯式新段階併行、21から29、91から103・152は、黒笹90号窯式古段階併行、

30から59、91から124は、黒笹90号窯式新段階併行、60から84、125から137、153から157は、黒笹90号窯式末から折戸53号窯式古段階併行、85・86は、折戸53号窯式新段階併行と、それぞれ位置付けた。

遠江西部の宮口窯跡産の灰釉陶器についても、猿投窯跡群の窯式名称を便宜的に用いる。166から396が、宮口窯跡群産とした一群である。このうち286から288は、黒笹14号窯式新段階併行、289から290は、黒笹90号窯式古段階併行、166から271・274から285、291から363、368から385、387から390は、黒笹90号窯式新段階併行、272・273・365・366、391から395は、折戸53号窯式併行とそれぞれ位置付けた。

遠江東部の清ヶ谷窯跡産の灰釉陶器についても、猿投窯跡群の窯式名称を便宜的に用いる。397から551が、清ヶ谷窯跡群産とした一群である。397から459、480から539は、黒笹90号窯式新段階併行、460から471、540から547は、折戸53号窯式併行とそれぞれ位置付けた。

東濃地方産の灰釉陶器は、田口正二氏の窯式編年案に従う。552から668が、東濃産の灰釉陶器である。552から575、618から627は、光ヶ丘窯式段階、576から585、628から630は、大原窯式段階、586から616、631から650は、虎溪山1号窯式から丸石2号窯式段階にそれぞれ位置づけられよう。

灰釉陶器の産地別消費量の推移

前に記した基準に基づき、灰釉陶器の産地別出土量の推移について、第923図を参照し述べたい。なおこの図は、灰釉陶器の型式変化に基づき、出土量の推移を扱ったのではなく、各住居跡の帰属する時期に伴出した灰釉陶器の出土量の推移を図化した。それは、搬入品にまみられる伝世の現象を考慮したからである。

さて、まず猿投産の灰釉陶器である。Ⅱ期からⅧ期にかけては、出土量はきわめて少ないが、出土している。ことに出土量が少ないⅡ・Ⅲ期にみられ、重視しておく必要がある。

続いて二川産の灰釉陶器は、中堀遺跡の消長とともに

に、その出土量の推移を伺うことができる。Ⅲ・Ⅳ期は、徐々に出土量の増加する段階である。それがⅤ期になると、一気に出土量を増加させピークとなる。

そしてⅥ期は、やや出土量を減らす、それほど大きな変化となつては現れない。ここに二川産の製品の特徴がみられる。ことに高台付碗の出土量の上昇は、清ヶ谷産の灰釉陶器でも確認でき、遺跡全体が、衰退化の現象にある中で背反した姿を示す。

その後、Ⅶ期になると急速に激減し、Ⅷ期にやや持ち直すが、Ⅸ期には再び少なくなる。

宮口産の灰釉陶器もⅤ期までは、二川産と共通した推移をたどる。しかしⅥ期に消費量は、半減以下となり、Ⅶ期には、数点が確認できるだけとなる。しかしⅧ期には、再び10点ほど認められる。

清ヶ谷産の灰釉陶器の場合は、宮口窯の推移のあり方と共通する。しかし他に比べ壺類の多さが目立つ。やはりⅤ期に急速な上昇とピークをみ、その後衰退していく。とくにⅤ・Ⅵ期ともにその出土量は、他者よりも多い。

これら東海地方の海岸部である三河から駿河の窯跡群で生産されたと推定した灰釉陶器は、中堀遺跡では、共通した推移をたどることが確認できた。この推移は、土師器や末野・藤岡地域の須恵器供膳具が、たどった消費量の推移と共通し、土器の流通を考えたとき、興味深い内容を示してくれよう。

ところが、東濃の製品は、異なった推移を示す。その出現は、Ⅴ・Ⅵ期からみられるが、やはり急速に出土量を増すのは、Ⅴ期である。そしてⅥ期にピークに達し、他の東海諸窯の製品と比肩するほどになる。Ⅵ期に消費量を増加させたのは、東濃の製品だけである。Ⅶ期にやはり消費量は落ち込み、再びⅧ期に増加し、Ⅸ期に減少する。これは、遺跡の消長と共通した現象である。ただしⅦ期以降、東濃産の製品は、東海産の製品を完全に凌駕する。

ここで注意しなければならないのは、Ⅴ期以降、消費量にやや増減があるが、東濃の製品は安定的に消費されていることである。しかもこの推移は、吉井地域

や中堀遺跡近隣産の須恵器との消費量の共通性を指摘できる。東濃産の製品の流通経路を考えた場合、鎭川沿いの吉井地域は、共通の通過点である。

近年の(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による、一連の上信越自動車道にかかる発掘調査の成果からも分かるように、この地域では、比較的豊富に東濃地域の製品を消費しており、中堀遺跡へ供給された東濃産灰釉陶器について、経由地の候補のひとつとしてあげておくことができよう。

以上から、灰釉陶器の竪穴式住居跡にみられる消費量の推移をたどると、Ⅰ期からⅢ期にかけては、ほとんどみられなかったが、Ⅳ期以降、急速に出土量を増し、Ⅴ期にピークとなる。そしてⅥ期には、やや消費量が減少するが、それほどではなく、むしろ東濃製品の消費量の上昇にみるように、Ⅴ期の消費量を維持しようとする姿がみられる。これは遺跡の変遷で明らかにするように、遺跡全体を覆う火災(Ⅴ期)以後、何とか旧状に復興しようとする傾向がみられ、大形の建物が構築されたことと一致する現象であろう。

埼玉県内出土の灰釉陶器と中堀遺跡

埼玉県内の灰釉陶器は、浅野晴樹氏の先駆的な研究(浅野1980)や、筆者の集成作業(田中1995)によって、出土遺跡と出土傾向は、明らかとなった。

浅野氏は、折戸53号窯式の灰釉陶器が、「東濃諸窯の灰釉陶器商圏」を通じて、埼玉北部へ流通したことや、埼玉南部には、猿投・三河等の灰釉陶器が流通したこと、そしてそれ以前の製品は、官衙・寺院に供給されたことを明らかにした。

筆者はこれを受け、埼玉県内出土の灰釉陶器の報告例を集成し、遺跡の性格による消費の相違を浮き彫らせ、比較的古い段階では、長頸瓶が圧倒的に多いの対し、新しい段階になると椀・皿が、相対的に増加してくることを指摘した。

とくに中堀遺跡は、従前の関越自動車道の調査でも、多彩な灰釉陶器(長頸瓶5・小瓶5・高台付椀31・高台付皿31・平瓶1・耳皿2)が出土しており、他の平

安時代の集落とは、異なる点が指摘されていた。

ただし前述したように、これまで灰釉陶器の生産地として、あまりにも猿投窯跡群の東国への流通を過大評価し、静岡産灰釉陶器に対して、軽視していた嫌いがあり、今後再点検していく必要がある。

ちなみに中堀遺跡の灰釉陶器の出土量が、いかに多いかについて、比較参考のために埼玉県内の灰釉陶器の出土遺跡と、出土量の分布図を掲載しておいた。第924図は、埼玉県内、第925図は、児玉地方から出土した灰釉陶器の分布図である。

また第926図では、埼玉・千葉・栃木・茨城の関東4県の各遺跡から出土した灰釉陶器について、その出土点数を遺跡ごとに示した。

ちなみに栃木県の下野国府では、総遺物出土量350箱中、施釉陶器は170点が図化されたが、中堀遺跡では、総遺物出土量650箱中、施釉陶器は827点を図化した。

この図やデータが示すとおり、この4県では、30点以上出土した遺跡が、灰釉陶器をやや豊富に消費した遺跡として目立つ。栃木県下野国府、千葉県永吉台遺跡、埼玉県氷川神社他遺跡・稲荷前遺跡・そして中堀遺跡である。

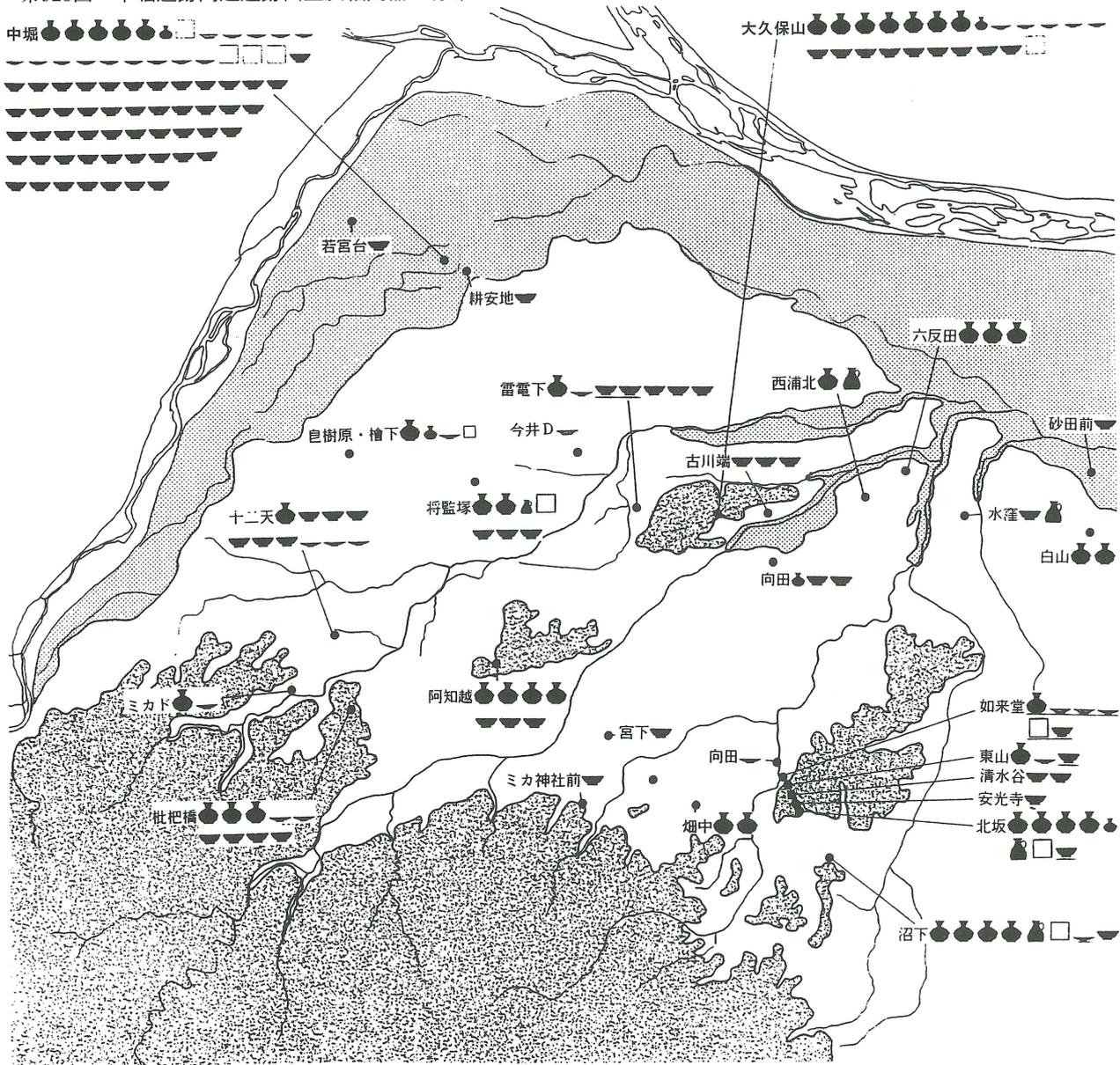
これに引きかえ関東地方の他県では、神奈川県鳶尾遺跡・海老名本郷遺跡・四ノ宮下郷周辺遺跡・新作小高台遺跡・宮久保遺跡・草山遺跡・三ツ俣遺跡・東耕地遺跡・向原遺跡等、東京都落川遺跡・武蔵国府関連遺跡等、群馬県上野国分寺中間地域・鳥羽遺跡等で灰釉陶器の豊富な出土遺跡を確認することができる。

先に筆者は、国府を除いた灰釉陶器を豊富に出土する遺跡について、遺跡の性格と消費のあり方から次の4形態に分類した。

- ①大規模開発拠点型消費……中堀遺跡
- ②宗教施設型消費……日光男体山山頂遺跡
- ③「市」型消費……田村沖宿遺跡群
- ④手工業集団型消費……椿山遺跡

この中で中堀遺跡は、①大規模開発拠点型消費としたが、その考えは、今も変わらない。すなわち国家や

第925図 中堀遺跡周辺遺跡出土灰釉陶器の分布



なお他の産地の製品や古い窯式の製品が混じっていることは、それまでに使用されていた製品が、伝世し混在していたためと考えたい。

ただこれだけでは、中堀遺跡に生活した一部の上層者のみが、灰釉陶器を使用していたことに留まってしまうが、注目すべきは、この第54号掘立柱建物跡から出土した灰釉陶器と産地、底部調整・施釉方法・高台形態・全体の形状など大変良く類似した、つまり同じ作り手によるとしか考えられないような製品が、遺跡内の各遺構から出土している。

たとえば高台付碗の187と186（第248号住居跡）、高台付皿304・305と309（第40号住居跡）などである。これらは、大量に保管された灰釉陶器の一部が、遺跡内の各遺構、とくに竪穴式住居跡へと移動した結果と考えたい。

つまり遺跡の直接の経営者が、大量に入手した灰釉陶器は保管され、ある時点で竪穴式住居跡の住人も、その一部を入手する機会があったことを示す。また破損品は廃棄され、土壌等にまとめられたのであろう。

本来は、全てこのように分配か廃棄されていた灰釉

(8) 鉄鉢形土器

鉢は、古代から僧尼の私有物として認められた食器である。「三衣一鉢」というように、出家した僧尼の持ち物としては、最も基本的で密接な関係にあった。

遺跡から出土した鉄鉢形土器は、僧尼が所持することを許された鉢のうち、瓦鉢と呼ばれるものにあたると考えられる。

鉄鉢形土器は、各地の遺跡から出土しており、中堀遺跡からも6点出土した。そこで今回、東日本出土の鉄鉢形土器を集成した。分布や時期など基本的な考察を加えることにより、地域的な特色などを導き出したい。

1 中堀遺跡の鉄鉢形土器

中堀遺跡では、6点の鉄鉢形土器が出土した。第927図は、中堀遺跡出土の鉄鉢形土器の集成図である。1は第230号住居跡、2は瓦葺き建物区画周辺、3は第13号区画溝、4は第416号土壌、5は第725号土壌、6はグリッドピット(G-4 P50)からそれぞれ出土した。

1～4は、体部から口縁部にかけて大きく開き、口縁部はゆるく「く」の字に曲がる。口唇部は平らに仕上げられている。これらは、後に述べる口縁部の分類

でa類にあたる。いずれも南比企産である。

1は、口径が17.2cmとやや小振りの鉢である。

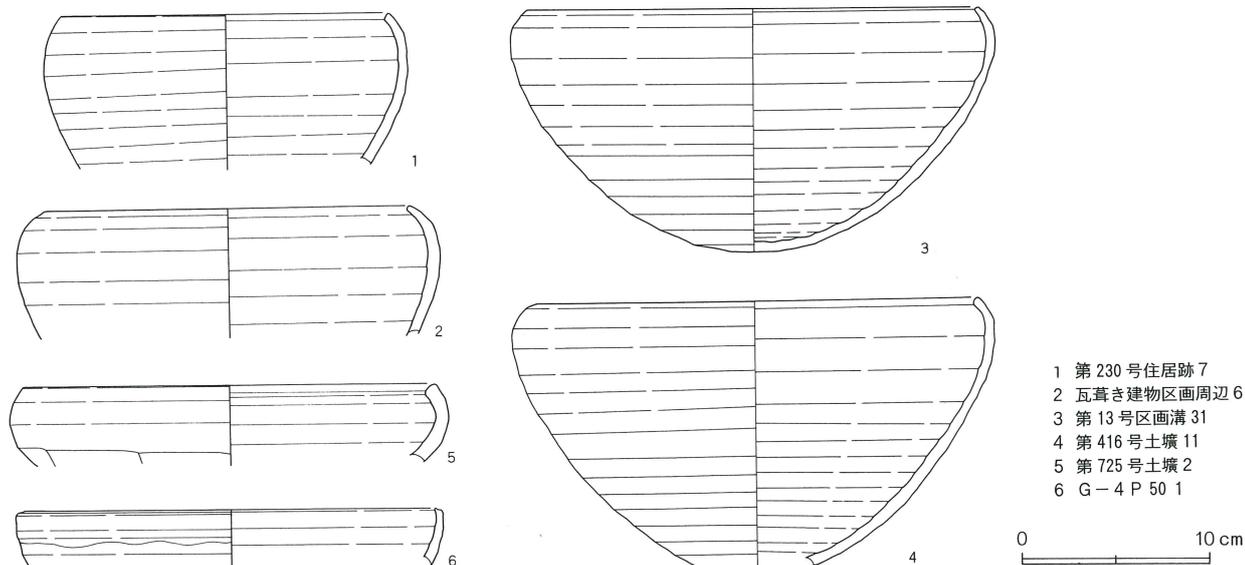
2は口径19cm、3は口径23.9cmである。この二つの鉢は、法量は異なるが、口縁部が先細りとなっている点などよく似ている。出土した場所も、瓦葺き建物区画周辺と建物地業跡を囲む第13号区画溝で、どちらも建物地業跡に関連した遺物と考えられる。ここは寺院が建っていたと推定される場所である。3は底部が残存しており、丸底である。

4は口径23.5cmで、3に近い。底部は欠損するものの、深目である。この鉢が出土した第416号土壌は、貼床が施され、底面に小穴や溝などがみられる土壌で、多量の供膳具や黒色土器、油煙が付着した椀が出土した。

1～4の鉄鉢形土器の時期は、1が9世紀後半、2から4は9世紀前半と考えられる。

5は、上記の4点の鉢とは多少異なる。器厚はやや厚く、口縁部は「く」の字に強く内屈する。口唇部は平らである。a類に分類される。口径は22cmある。この鉢が出土した第725号土壌は、第54号掘立柱建物跡の南庇の南西隅に位置していた。時期は、9世紀前半である。

第927図 中堀遺跡出土鉄鉢形土器集成



6は、灰釉陶器である。口縁部はゆるく内湾しつつ、直立する。b類に分類できる。口径は22cmである。この鉢は、口縁部をみても鉄鉢形土器の典型的な特徴を備えておらず、また底部は欠損しているため不詳である。そのため鉄鉢形土器であると断言することは難しい。時期は9世紀後半である。

2 研究史

日本では遺存する（伝世した）鉢は多数あり、奈良時代や平安時代の鉢が寺院に所蔵されている。主な鉢は『新版仏教考古学講座』（第5巻）に集成されている（中野1984）。材質は、金銅製・銀製・木製・乾漆製・磁製である。中野政樹氏は、奈良時代と平安時代の鉢の形態を比べ、平安時代の鉢は、器高が若干低く、肩の張りが強いとした。また天平19年に作成された『法隆寺縁起并流記資財帳』には、鉢が「仏分」や「聖僧分」などと分かれていたことが書かれ、さらにそれぞれの鉢の数と材質・寸法を記している。これらの記述から鉢が当時供養具や僧具として使用されていた実態を伺えよう。

遺跡から出土した鉢は、ほとんど瓦鉢・磁鉢で、一般的には鉄鉢形土器といわれ、全国各地から出土した。渡辺一氏は、鉄鉢形土器の出現期を検討し、概ね8世紀前半であろうと述べている（渡辺1990）。

また石川安司氏は、鉄鉢形土器は大小2種以上の法量分化の存在を指摘した（石川1995）。

その他にも雨宮龍太郎氏は、千葉県の集落跡から出土した鉄鉢形土器と、その所有者の歴史的性格を仏教史の側面から研究した（雨宮1983）。また郷田良一氏は、鉄鉢形土器が、集落跡の竪穴住居跡から出土していることから、僧尼や仏教の信仰者が、一般的な村落

の構成員である場合があったと述べている（郷田他1980）。

さらに大坪宣雄氏は、神奈川県宮添遺跡の分析を行い、鉄鉢形土器など仏教的色彩の濃い遺物から村落内寺院の存在を示している（大坪1995）。また光江章氏は、千葉県愛宕前遺跡の検討から、鉄鉢形土器や「寺」と刻書された坏などの仏教に関係する遺物を出土する遺跡の性格を、近隣の寺院跡と絡めて述べた（光江1986）。

3 分類

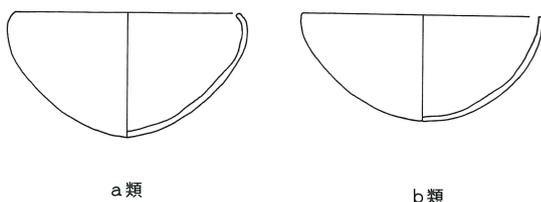
鉄鉢形土器（瓦鉢・磁鉢）の一般的な特徴は、尖底で体部が大きく開き、口縁部で「く」の字に強く内屈することが挙げられる。そこで口縁部の形によって、a類・b類に分類した。a類は、口縁部が「く」の字かそれに近い形に内屈する。b類は口縁部がゆるく内湾するか、直立に近いものである。第928図は、鉄鉢形土器の分類模式図である。

a類で底部の残るのは、ほとんどが尖底かそれに近い丸底で、独楽の形によく似ている。また平底や高台付きも見られる。平底は、最大径に対して底径が小さい鉢と、底径が比較的大きい鉢の二種がみられる。また高台付きの鉢は、尖底や丸底に台を付けた形態が多い。群馬県から比較的多く出土し、他にも栃木県・埼玉県・長野県・愛知県に数例ある。

b類では、平底かそれに近い丸底、または高台の付く鉢が多く、最大径に対する底径が比較的大きい。a類に見られた尖底は、埼玉県の立野遺跡の例などわずかである。

一般的な特徴として、a類は平底があるなど、多少異なる点もあるが、b類は口縁部や底部の形から、鉄鉢形土器である可能性の薄いものも多数存在する。

第928図 鉄鉢形土器分類



4 東日本出土の鉄鉢形土器

東北地方の鉄鉢形土器は、宮城県・福島県から多く出土している。宮城県の多賀城廃寺跡からは、8世紀前半の鉢がまとまって出土した。8世紀前半代の例と

しては、他に福島県の上人壇廃寺や慧日寺跡、小浜代遺跡でも出土した。また多賀城跡や郡山五番遺跡、関和久上町遺跡などからも出土した。多賀城跡に近い水入遺跡からは、8世紀後半の鉢が出土した。この鉢は波状文が入る珍しい鉢である。また宮城県の間ノ入遺跡の鉄鉢形土器を出土した住居跡の隣の住居から、「佛」と墨書された蓋が出土した。

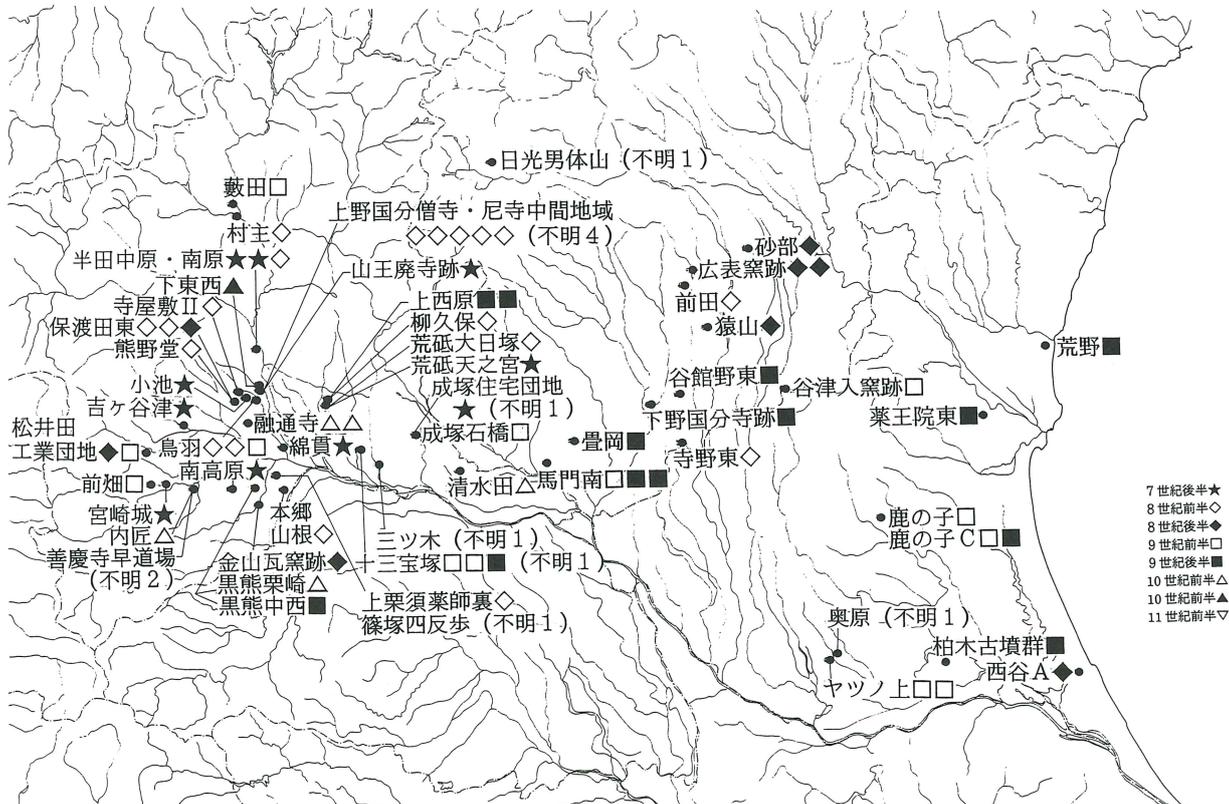
宮城県では、9世紀前半までが多く、それ以降は、b類が少数みられる程度である。福島県はb類が多く、黒色土器が目立つ。

東北地方の他の地域では、秋田県の秋田城跡で8世紀後半から9世紀後半にかけてa類の鉢が出土した。山形県では、9世紀後半に集中して出土した。また庭田遺跡（出羽国分尼寺？）からは、時期不詳だが1点出土した。岩手県でも主に9世紀後半から10世紀後半に集まっている。上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡から出土した時期不明の鉢は、口縁部と底部が欠けている。そのため鉄鉢形土器とは断定できないが、「佛」と刻書されてい

た。なお宮城県例については石川俊英氏、福島県例については菅原祥夫氏に御教示いただいた。

関東地方では、群馬県・埼玉県・千葉県などで多数の鉄鉢形土器が出土している。群馬県は、県南部から多く出土した。7世紀後半のa類には7点あり、他の地域と比べてかなり多い。これらの鉢は、体部が横に張っているものが多い。半田中原・南原遺跡では、口径が30cm近い大きな鉢が出土した。また、荒砥天之宮遺跡では、高台の付いた鉢が出土した。8世紀前半は、a類・b類のほとんどが高台付きの鉢である。上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡では、8世紀前半の鉄鉢形土器がまとまって出土した。また山王廃寺や十三宝塚遺跡・黒熊中西遺跡などの寺院跡からも出土した。とくに十三宝塚遺跡からは、三彩陶器の鉢が出土した。三彩陶器の鉢は珍しく、奈良県の正倉院御物が知られる。また上西原遺跡では、鉄鉢形土器の出土した方形区画内から「寺上」と墨書された坏が出土した。半田中原・南原遺跡でも土坑から「佛」と墨書された碗が

第929図 関東地方北部の鉄鉢形土器出土遺跡



出土した。

埼玉県では、7世紀後半のa類の鉢が、立野遺跡から出土した。またb類の鉢も立野遺跡から出土したが、尖底の割合が強く、他のb類とは異なった形態である。鳩山窯跡群では、8世紀前半から鉄鉢形土器の生産が始まり、9世紀前半まで続く。鳩山窯跡群例は、ほとんどa類に分類され、内屈する口縁部と尖底、あるいは丸底という鉄鉢形土器の特徴を完全に備えている。また鳩山の鉄鉢形土器は、口唇部に面を持つものが多いようである。8世紀前半の鉢は、後の時期に比べると小さめで器高が高い。

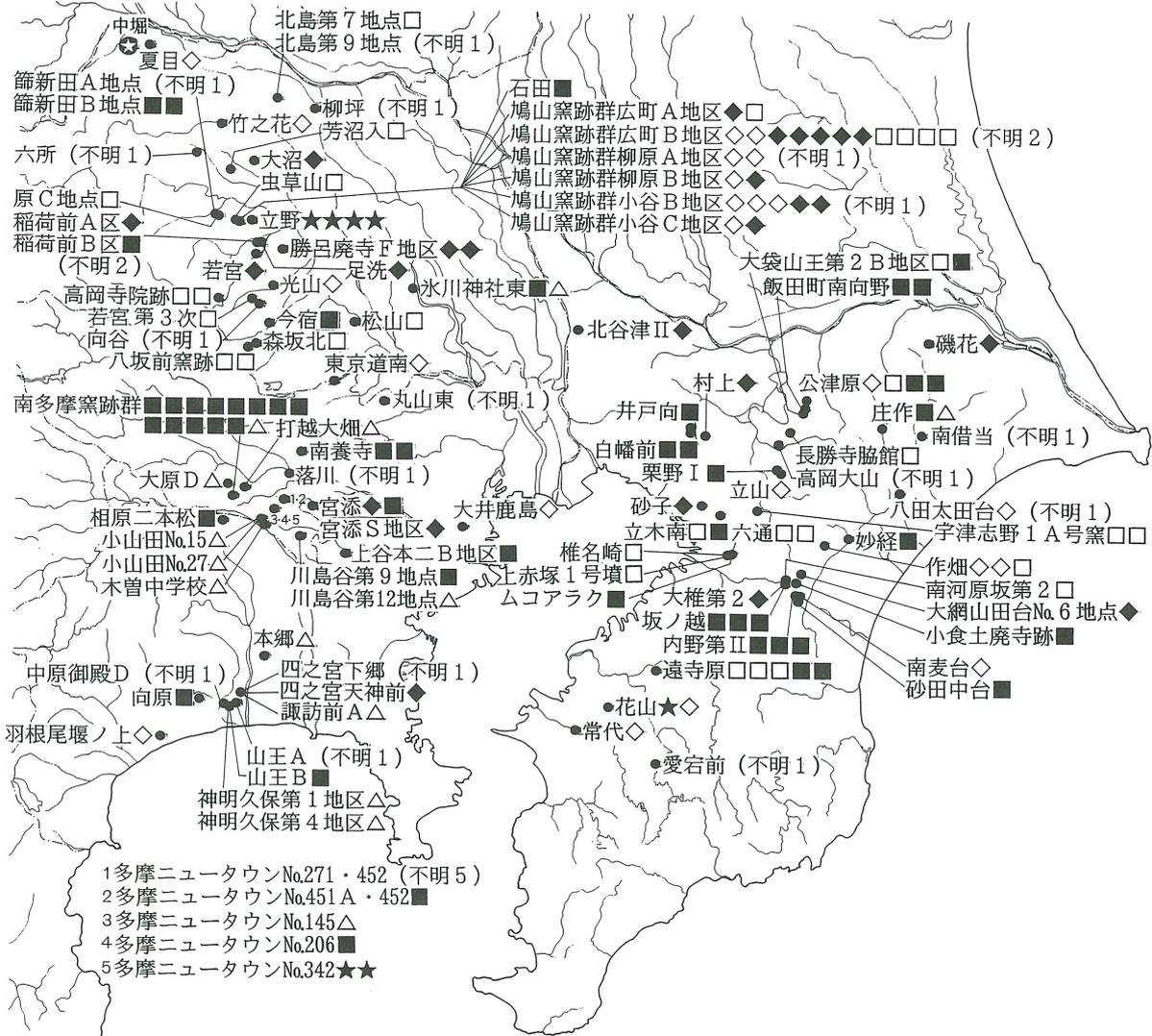
9世紀前半には、入間市の八坂前窯跡でも作られていたようである。また埼玉県では、勝呂廃寺跡や高岡

寺院跡でも出土した。その他にも日高市若宮遺跡では、同じ土壇内から「寺」と墨書された坏が出土した。

東京都では、7世紀後半から8世紀後半までの出土例は少ない。しかし9世紀後半には、南多摩窯跡群で盛んに生産されたようである。これらの鉢は、鳩山窯跡群と同様a類に分類され、口唇部に面を持つものが多い。

千葉県では、8世紀前半から9世紀後半にかけて多く見られる。とくに9世紀前半から後半にかけて著しく増加し、10世紀前半以降、集落の減少とともに見られなくなる。9世紀前半から後半にかけては、a類に含まれる平底で器高の高い鉢がみられる。長勝寺脇館跡や栗野I遺跡で出土した鉢がこれである。同様の形

第930図 関東地方南部出土の鉄鉢形土器の分布



態の鉢は、他に茨城県のヤツノ上遺跡から出土した。また千葉県の鉄鉢形土器には、黒色土器がいくつかみられる。寺院跡では、小食土廃寺跡から出土した。磯花遺跡では、同一住居跡内から「寺七月？」と墨書された坏が出土した。

茨城県では、a類の鉢は9世紀前半と後半に集まる。ヤツノ上遺跡の鉢など、深くて底径の小さい点は千葉県の鉢とよく似ている。また黒色土器の鉢も数例みられる。

栃木県では、a類の鉢は8世紀前半から9世紀後半の鉢が多い。全体的に浅い鉢が多いようである。

神奈川県は、ほとんどがa類の鉢である。8世紀後半から10世紀前半までみられる。平塚市の周辺に集中する。

長野県の鉢は、8世紀後半から10世紀前半に集中する。しかしb類の鉢は、7世紀後半から多数見られる。9世紀前半の中二子遺跡のa類の鉢は、器高が高く、口縁部がほぼ水平に内屈する。この形は、他に例がない。また黒色土器製の鉄鉢形土器も9世紀後半から10世紀前半にかけて出土した。

岐阜県の鉢は、窯跡からの出土が多い。8世紀前半から後半に集中する。また全体的に小形品が多い。

愛知県では、猿投窯跡群・尾北窯跡群から出土がみられる。8世紀後半から9世紀後半にかけての鉢は、ほとんどが猿投窯跡群からの出土である。とくにa類が多い。また三河国分尼寺跡からは、a類の鉢が3点出土した。また大毛沖遺跡では、9世紀後半の灰釉陶器の鉢が出土した。この鉢には、高台が付いている。

静岡県では、吉美中村遺跡と伊場遺跡からの出土が多い。ほとんどb類である。またa類の鉢は、8世紀前半から9世紀前半に集中する。a類の川久保遺跡と伊場遺跡から出土したa類の鉢は、赤彩が施されている。国分寺・国府台遺跡から出土した鉢は、「寺」と墨書されている。また間宮川向遺跡の鉢には、補修の跡と思われる穴が3ヶ所あけられている。

三重県では、恒岡氏城跡から7世紀後半の高台付きの鉢が出土した。a類である。また斎宮跡では、8世

紀前半から9世紀前半にかけて多数出土した。8世紀前半の鉢は丸底で、8世紀後半の鉢は平底の傾向がある。b類の鉢はいずれも土師器で、器形もa類と大きく異なる。斎宮跡からは、緑釉陶器の鉢も出土した。

北陸地方では、富山県と石川県に多い。富山県は8世紀前半から9世紀前半のa類の鉢が多く、そのほとんどが小杉流通業務団地内遺跡群とその周辺の遺跡からの出土である。石川県は、8世紀前半と9世紀前半に集中する。8世紀前半の鉢はa類が多く、主に正友ヤチヤマ窯跡と庄ヶ屋敷B遺跡からの出土である。また9世紀前半は、若緑ヤキノ窯跡からの出土が目立つ。a類の鉢は、それぞれ大きさが異なり、大中小と法量分化がみられる。また東大寺領横江庄遺跡では緑釉陶器の鉢が出土した。この鉢は時期不詳だが、a類に分類でき、平底である。福井県では、舟場窯跡から9世紀前半の鉢が2点出土した。そのうちの1点は大形である。

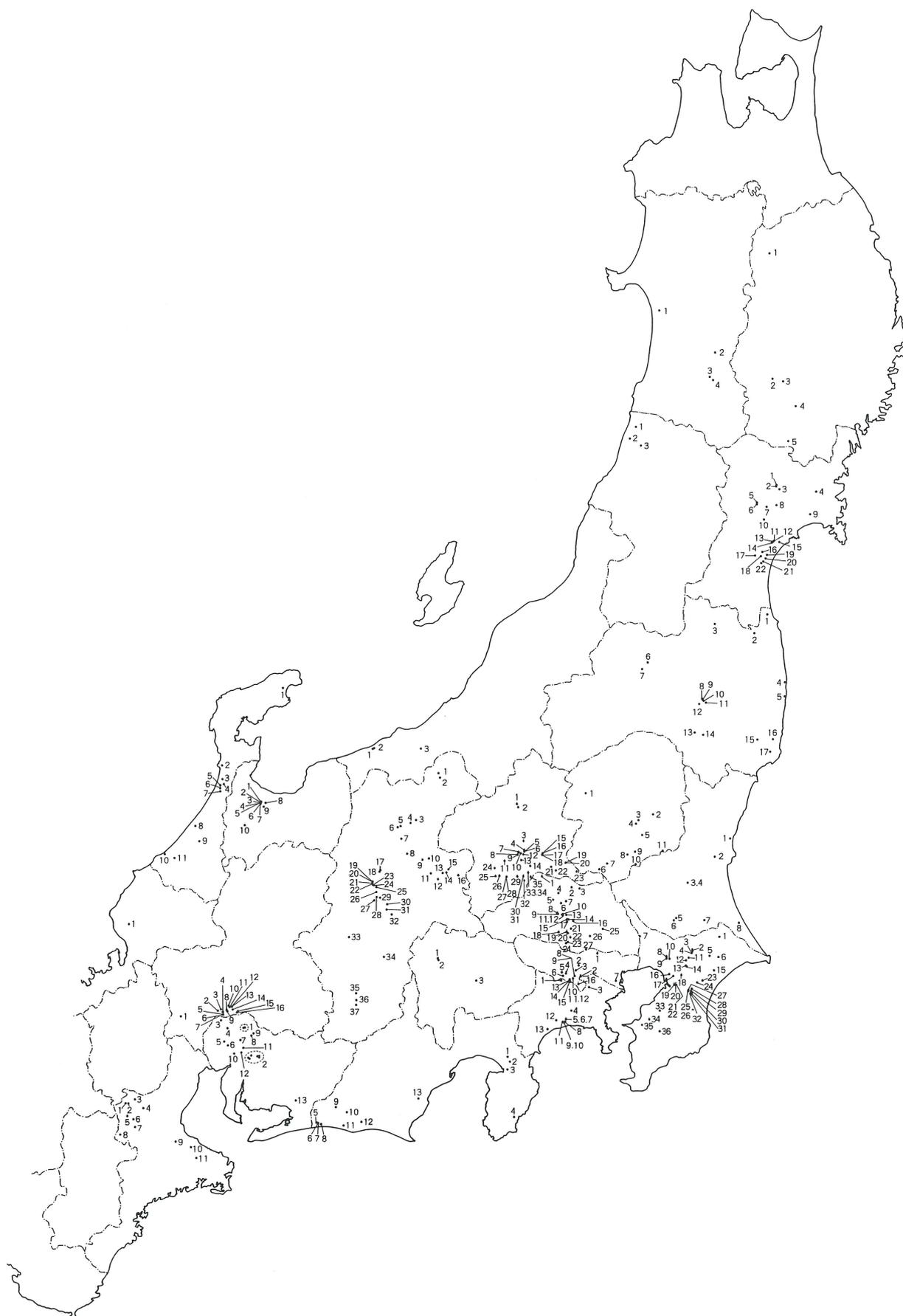
5 まとめ

鉢は、本来サンスクリット語でパートル (patra) といい、鉢多羅・鉢多などに音訳されている。鉢はその略である。仏法に応じた器、供物を受けるに値する人が使う器、腹の分量に応じて食物を取る器であるということから、応器・応量器とも訳されている。僧尼の私有物として認められた食器のことである。古来より「三衣一鉢」といわれ、僧尼の日常必需品である比丘六物、あるいは比丘十八物の一つに数えられている。また仏前に米飯を供えるための供養具としても用いられる。

鉢は、僧尼が乞食 (こつじぎ) を行う際に必ず携帯する物である。乞食は、僧尼の修行のひとつで、現在では托鉢ともいう。その形だけまねて、食物を乞うものを乞食 (こじぎ) というようになった。古代の日本では、僧尼令に規定があり、乞食は精進練行の目的以外で行うことは禁じられ、許可制であった。

僧尼の使用する鉢は、材料・色・大きさなどが、律によって定められている。

第931図 東日本出土の鉄鉢形土器



第 682 表 東日本出土の鉄鉢形土器集成 (1)

No.	市町村	遺跡名	遺構	No.	市町村	遺跡名	遺構	No.	市町村	遺跡名	遺構
1	岩手県安代町	扇畑 I	CI-1 住	5	福島県富岡町	小浜代		6	群馬県前橋市	山王庵寺跡	31 号住
1	岩手県安代町	扇畑 I	CI-1 住	6	福島県磐梯町	慧日寺跡		7	群馬県群馬町	寺屋敷 II	7 号古墳
1	岩手県安代町	扇畑 I	CI-1 住	7	福島県会津若松市	船ヶ森西	SK26	8	群馬県群馬町	保渡田東	4 区 SJ2
2	岩手県北上市	八幡野 II	G29-01 住	8	福島県郡山市	正直 C	SK59	8	群馬県群馬町	保渡田東	4 区 SJ1
3	岩手県北上市	上鬼柳 II・III	遺構外	8	福島県郡山市	正直 C	28 建物	8	群馬県群馬町	保渡田東	6 区 SJ2
4	岩手県水沢市	熊之堂	SI02 住	9	福島県郡山市	田向 A	SJ2	9	群馬県群馬町	熊野堂	2 号特殊井戸
5	岩手県萩荘町	鈴ヶ沢	包含層	10	福島県郡山市	弥明	SJ4	10	群馬県群馬町	小池	H-4 号住
1	秋田県秋田市	秋田城跡	SI1157	11	福島県郡山市	梅木平	1 号土坑	11	群馬県安中市	青ヶ谷津	
1	秋田県秋田市	秋田城跡	SI1159	12	福島県須賀川市	上人壇廃寺跡	上人壇廃寺跡	12	群馬県群馬町	鳥羽	H10・11 号溝
1	秋田県秋田市	秋田城跡	SI494 B 住	13	福島県泉崎村	関和久上町	SK161	12	群馬県群馬町	鳥羽	H12 号溝
1	秋田県秋田市	秋田城跡	SK941	14	福島県東村	谷地前 C	SJ27	12	群馬県群馬町	鳥羽	M46 号住
2	秋田県北町	秋田櫓跡	遺構外	15	福島県いわき市	屋敷前	SJ3	13	群馬県高崎市	融通寺	1 区 SD5
3	秋田県横手市	手取清水	SX195	16	福島県いわき市	大久保 F	17 号土師器窯跡	13	群馬県高崎市	融通寺	5 区 SJ8
3	秋田県横手市	手取清水	ME48・C 区・旧河川	16	福島県いわき市	大久保 F	遺構外	14	群馬県高崎市	綿貫	SI0705
3	秋田県横手市	手取清水	SD121・SK184	16	福島県いわき市	日吉下	SJ8	15	群馬県前橋市	上西原	方形区画内
3	秋田県横手市	手取清水	SKI111	17	福島県いわき市	日吉下	SJ9	15	群馬県前橋市	上西原	SJ62
4	秋田県平鹿町	竹原窯跡	遺構外	1	茨城県東海村	荒野	SI01	16	群馬県前橋市	柳久保	H-35 号住
4	秋田県平鹿町	竹原窯跡	SJ05	2	茨城県水戸市	薬王院東	17 号住	17	群馬県前橋市	荒砥大日塚	A 区 SJ11
4	秋田県平鹿町	竹原窯跡	遺構外	3	茨城県石岡市	鹿の子	27 号住	18	群馬県前橋市	荒砥天之宮	B 区 SJ2
4	秋田県平鹿町	竹原窯跡	遺構外	4	茨城県石岡市	鹿の子 C	50A・B 号住	19	群馬県太田市	成塚住宅団地	BH-346 住
1	宮城県高清水町	西手取・手取	SJ4	4	茨城県石岡市	鹿の子 C	96 号住	19	群馬県太田市	成塚住宅団地	CH-65
2	宮城県古川市	藤屋敷	SJ12	4	茨城県石岡市	鹿の子 C	96 号住	20	群馬県太田市	成塚石橋	SJ81
3	宮城県田尻町	八幡	SJ1	5	茨城県牛久市	奥原	第 2 調査区 SI88	21	群馬県境町	十三宝塚	SJ27
4	宮城県津山町	柳津館山館跡	SJ1	6	茨城県牛久市	ヤツノ上	3 号住	21	群馬県境町	十三宝塚	SJ32
5	宮城県色麻市	色麻古墳群	第 227 号	6	茨城県牛久市	ヤツノ上	9 号住	21	群馬県境町	十三宝塚	SJ38
6	宮城県色麻市	上新田	SJ1	7	茨城県桜川村	柏木古墳群	74 号住	21	群馬県境町	十三宝塚	掘立 D 号
6	宮城県色麻市	上新田	SJ5	8	茨城県鹿嶋市	西谷 A	2 号住	22	群馬県境町	三ツ木	SJ12
7	宮城県三本木町	由畑装飾横穴古墳群	8 号墳	1	栃木県日光市	日光男体山	C トレンチ	23	群馬県太田市	清水田	SI D14
8	宮城県三本木町	下伊場野窯跡	第 3 号窯跡	2	栃木県高根沢町	砂部	S X 48	24	群馬県松井田町	松井田工業団地	GH-20 住
9	宮城県河南町	関ノ入	SJ48	3	栃木県宇都宮市	広表窯跡	天井崩落土中	24	群馬県松井田町	松井田工業団地	E-103 住
10	宮城県大和町	一里塚	B 区第 6 号溝	3	栃木県宇都宮市	広表窯跡	ステバ	25	群馬県富岡市	前畑	SJ6
11	宮城県多賀城市	多賀城跡	2165 井戸跡	4	栃木県宇都宮市	前田	SJ104	26	群馬県富岡市	宮崎城	SJ1
11	宮城県多賀城市	多賀城跡	第 2A 層	5	栃木県宇都宮市	猿山	2-3 号住	27	群馬県富岡市	内匠	SJ17
11	宮城県多賀城市	多賀城跡	S A1321D 材木列	6	栃木県佐野市	馬門南	SJ13	28	群馬県富岡市	善慶寺早道場	グリッド
12	宮城県多賀城市	多賀城跡	第 227 号	6	栃木県佐野市	馬門南	SJ13	28	群馬県富岡市	善慶寺早道場	グリッド
12	宮城県多賀城市	多賀城跡	第 227 号	6	栃木県佐野市	馬門南	SJ39	29	群馬県吉井町	南高原	97 号住
12	宮城県多賀城市	多賀城跡	第 227 号	7	栃木県岩舟町	壘岡	313 番地表	30	群馬県吉井町	黒熊栗崎	SJ1
12	宮城県多賀城市	多賀城跡	第 227 号	8	栃木県国分寺町	下野国分寺跡	SD414	31	群馬県吉井町	黒熊中西	3 号建物跡基壇下
12	宮城県多賀城市	多賀城跡	第 227 号	9	栃木県石橋町	谷館野東	CI003 号住	32	群馬県藤岡市	金山瓦窯跡	1 号窯
12	宮城県多賀城市	多賀城跡	第 227 号	10	栃木県小山市	寺野東	SJ101	33	群馬県藤岡市	土栗須薬師裏	SJ20
13	宮城県多賀城市	水入	第 III 層	11	栃木県益子町	谷津入窯跡		34	群馬県藤岡市	篠塚四反歩	S D 04
14	宮城県仙台市	鴻ノ巣	耕作土中	1	群馬県月夜野町	藪田	5 区 SJ3	35	群馬県藤岡市	本郷山根	SJ7
15	宮城県多賀城市	橋本圃貝塚		2	群馬県月夜野町	村主	SJ34	1	埼玉県本庄市	夏目	SJ48・SJ49・SD5
16	宮城県仙台市	大年寺山横穴群	第 6 号横穴	3	群馬県渋川市	半田中原・南原	SJ56	2	埼玉県熊谷市	北島第 7 地点	SJ4
17	宮城県仙台市	山田上ノ台	遺構外	3	群馬県渋川市	半田中原・南原	SJ85	2	埼玉県熊谷市	北島第 9 地点	河川西側
18	宮城県仙台市	山下ノ内	S K 50	3	群馬県渋川市	半田中原・南原	SK58	3	埼玉県熊谷市	柳坪	遺構外
19	宮城県仙台市	南小泉	S D-08	4	群馬県前橋市	下東西遺跡	ST20	4	埼玉県川本町	竹之花	SJ17
20	宮城県仙台市	中田畑中	S D 2	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	A 区 SJ199	5	埼玉県小川町	六所 (1 次)	遺構外
21	宮城県名取市	清水	S J 17	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	H 区 SE4	6	埼玉県嵐山町	芳沼人	SJ1
22	宮城県名取市	今熊野	KS 第 35 号住	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	B 区 SJ73	7	埼玉県滑川町	大沼	第 12 号竪穴状遺構
1	山形県遊佐町	大坪	SG1 河川跡 D-7 グリッド捨て場	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	H 区 SE4	8	埼玉県玉川村	籾新田 A 地点	B-5 遺物包含層
2	山形県酒田市	庭田	溝状遺構	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	H 区 SE4	8	埼玉県玉川村	籾新田 B 地点	SJ2
3	山形県平田町	山海窯跡群	E 調査区 7 窯跡	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	H 区 SE4	8	埼玉県玉川村	籾新田 B 地点	SJ2
3	山形県平田町	山海窯跡群	E 調査区 7 窯跡	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	C 区 SD9	9	埼玉県玉川村	原 C 地点	SJ1
3	山形県平田町	山海窯跡群	D 調査区 S Q 1 ステ場	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	1 区遺構外	10	埼玉県鳩山町	虫草山	SJ18
1	福島県新地町	三貫地	S J 24	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	B 区 B 区土坑群	11	埼玉県鳩山町	石川	第 2・3 号窯跡灰原
2	福島県飯館村	日向南	S J 28	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	遺構外	12	埼玉県鳩山町	広町 A 地区	SJ10
3	福島県福島市	鎌田館跡	1 号溝	5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	遺構外	12	埼玉県鳩山町	広町 A 地区	SJ7
4	福島県双葉町	五番		5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	遺構外	12	埼玉県鳩山町	広町 B 地区	第 11 号窯
4	福島県双葉町	五番		5	群馬県前橋市・群馬町	上野国分僧寺・尼寺中間地域	遺構外	12	埼玉県鳩山町	広町 B 地区	第 12 号窯

第 683 表 東日本出土の鉄鉢形土器集成 (2)

No.	市町村	遺跡名	遺構	No.	市町村	遺跡名	遺構	No.	市町村	遺跡名	遺構
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第12号窯	5	千葉県芝山市	庄作	SJ10	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第6号窯状遺構	5	千葉県芝山市	庄作	SJ30	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第11号窯	6	千葉県古戸市	南借当		6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第14号窯	7	千葉県流山市	北谷津第Ⅱ	SJ43住	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第13A・B号窯	8	千葉県八千代市	井戸向	D127号住	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号窯	9	千葉県八千代市	日橋前	D142住	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G25-C号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号窯	9	千葉県八千代市	日橋前	D069住	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号窯	10	千葉県八千代市	村上	003住	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号窯	11	千葉県酒々井町	長勝寺脇館	001住	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	灰原	12	千葉県佐倉市	高岡大山	遺構外	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G28号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	灰原	13	千葉県佐倉市	栗野Ⅰ	026住	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G25-C号窯灰原
12	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第6号窯	14	千葉県佐倉市	立山	SD2	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	粘土採掘坑
12	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第6号窯	15	千葉県松尾町	八田太田台	SJ031	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	SJ18
12	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第8号窯	15	千葉県松尾町	八田太田台	第2テラス	7	東京都品川区	大井鹿島	SJ18
12	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第8号窯	16	千葉県千葉市	砂子	SJ14	8	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.271・452	遺構外
12	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第8号窯	17	千葉県千葉市	立木南	SJ36	8	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.271・452	遺構外
12	埼玉県鳩山町	小谷B地区	灰原	17	千葉県千葉市	立木南	SJ39	8	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.271・452	遺構外
12	埼玉県鳩山町	小谷C地区	SJ6	18	千葉県千葉市	宇津志野窯跡	1A号窯跡窯体内	8	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.271・452	遺構外
12	埼玉県鳩山町	小谷C地区	SJ2	18	千葉県千葉市	宇津志野窯跡	1A号窯跡掘り方	8	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.271・452	遺構外
12	埼玉県鳩山町	柳原A地区	326号粘土採掘坑	19	千葉県千葉市	椎名崎	西ノ原1号墳	8	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.271・452	遺構外
12	埼玉県鳩山町	柳原A地区	446号粘土採掘坑	20	千葉県千葉市	上赤塚1号墳	SJ1	8	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.271・452	遺構外
12	埼玉県鳩山町	柳原A地区	土器捨て場	21	千葉県千葉市	ムコアラク	DW20住	9	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.451A・452	SD1
12	埼玉県鳩山町	柳原B地区	SD1	22	千葉県千葉市	六通	5号住	10	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.145	SJ6
12	埼玉県鳩山町	柳原B地区	SJ26	22	千葉県千葉市	六通	5号住	11	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.206	配石遺構
13	埼玉県東松山市	立野	SJ2	23	千葉県東金市	妙経	092B住	12	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.342	1号窯
13	埼玉県東松山市	立野	グリッド	24	千葉県東金市	作畑	SJ131	12	東京都町田市	多摩ニュータウンNo.342	1号窯
13	埼玉県東松山市	立野	グリッド	24	千葉県東金市	作畑	SJ134	13	東京都町田市	小山田No.15	HT-3
13	埼玉県東松山市	立野	グリッド	24	千葉県東金市	作畑	SJ21	14	東京都町田市	小山田No.27	HT-5
14	埼玉県坂戸市	足洗	SJ28	25	千葉県千葉市	大椎第2	SJ6	15	東京都町田市	木曾中学校	SJ4
15	埼玉県坂戸市	稲荷前A区	SJ78	26	千葉県千葉市	坂ノ越	第6号住居兼工房跡	16	東京都町田市	川島谷遺跡群	第9地点SJ3
15	埼玉県坂戸市	稲荷前B区	SJ39	26	千葉県千葉市	坂ノ越	第5号円形窯	16	東京都町田市	川島谷遺跡群	第12地点SJ2
15	埼玉県坂戸市	稲荷前B区	SJ29	26	千葉県千葉市	坂ノ越	第7号住居兼工房跡	1	神奈川県相模原市	相原二本松	SJ2
15	埼玉県坂戸市	稲荷前B区	SK54	26	千葉県千葉市	坂ノ越	第7号住居兼工房跡	2	神奈川県川崎市	宮添	5a号住
16	埼玉県坂戸市	勝呂廃寺F地区	SJ1	27	千葉県千葉市	坂ノ越	第7号住居兼工房跡	2	神奈川県川崎市	宮添	S-3号住
16	埼玉県坂戸市	勝呂廃寺F地区	SJ2	27	千葉県千葉市	南河原坂第2	SJ5	3	神奈川県横浜市	上谷本第二地区	SJ14
17	埼玉県坂戸市	若宮	SJ1	28	千葉県大網白里町	大網山田台遺跡群No.6地点	H-251住	4	神奈川県海老名市	本郷	SJ20
18	埼玉県日高市	高岡寺院跡	第3建物遺構・特殊遺構	29	千葉県千葉市	小食土廃寺跡	SJ1	5	神奈川県平塚市	四之宮下郷	1区SI07
18	埼玉県日高市	高岡寺院跡	第3建物遺構・特殊遺構	30	千葉県千葉市	南麦台	H-055住	6	神奈川県平塚市	四之宮天神前	SI05
18	埼玉県日高市	若宮第3次	SK	31	千葉県大網白里町	砂田中台	069A号住	7	神奈川県平塚市	諏訪前A	第3トレンチ包含層
20	埼玉県日高市	向谷	道路遺構	32	千葉県大網白里町	砂田中台	069A号住	8	神奈川県平塚市	山王A	5号潜伏遺構
21	埼玉県川越市・日高市	光由	SJ32	32	千葉県茂原市	内野第Ⅱ	SJ18	9	神奈川県平塚市	山王B	SJ4
22	埼玉県狭山市	今宿	SJ31	32	千葉県茂原市	内野第Ⅱ	SJ18	10	神奈川県平塚市	神明久保(第1地区)	C-1号井戸
23	埼玉県入間市	森坂北	SJ2	33	千葉県茂原市	内野第Ⅱ	SJ9	10	神奈川県平塚市	神明久保(第4地区)	SB3
24	埼玉県入間市	八坂前窯跡	灰原	33	千葉県袖ヶ浦町市	遠寺原	SJ41	11	神奈川県平塚市	中原御殿D	SD16
24	埼玉県入間市	八坂前窯跡	灰原	33	千葉県袖ヶ浦町市	遠寺原	SJ3	12	神奈川県平塚市	向原	SJ105
25	埼玉県大宮市	氷河神社東	SJ18	33	千葉県袖ヶ浦町市	遠寺原	SJ7	13	神奈川県小田原市	羽根尾堰ノ上	SJ3
25	埼玉県大宮市	氷河神社東	SJ10	33	千葉県袖ヶ浦町市	遠寺原	SJ7	1	新潟県糸魚川市	岩野下	遺構外
26	埼玉県上福岡市	松山	SJ9	34	千葉県水更津市	花山	SJ91	2	新潟県糸魚川市	小出越	遺構外
27	埼玉県所沢市	東京道南	SJ2	34	千葉県水更津市	花山	SJ36	3	新潟県糸魚川市	小出越	遺構外
1	千葉県佐原市	磯花	SJ12	35	千葉県沼津市	常代	SK63	3	新潟県新井市	栗原	SD25
2	千葉県成田市	公津原	069号住	36	千葉県沼津市	愛宕前		3	新潟県新井市	栗原	SD25
2	千葉県成田市	公津原	012号住	1	東京都練馬区	丸山東	遺構外				
2	千葉県成田市	公津原	068号住	2	東京都国立市	南養寺	SJ35				
2	千葉県成田市	公津原	012号住	2	東京都国立市	南養寺	SJ35				
3	千葉県成田市	飯田町南向野	SJ1	3	東京都日野市	落川	遺構確認面				
3	千葉県成田市	飯田町南向野	SJ1	4	東京都八王子市	打越大畑	H1号住				
4	千葉県成田市	大袋山E第2B地区	SJ53	5	東京都八王子市	大原D	SJ16				
4	千葉県成田市	大袋山E第2B地区	SJ29	6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	A区第1地点				
				6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	粘土採掘坑				
				6	東京都八王子市	南多摩窯跡群	G25-C号窯灰原				

第 684 表 東日本出土の鉄鉢形土器集成 (3)

No.	市町村	遺跡名	遺構	No.	市町村	遺跡名	遺構	No.	市町村	遺跡名	遺構
1	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.16	第2号窯灰層	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	16	長野県佐久市	栗毛坂遺跡群 B 地区	252 坑
1	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.16	第1号窯跡灰原	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	17	長野県松本市	塩幸	1号住
1	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.16	谷部	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	17	長野県松本市	塩幸	1号住
2	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.17	丘陵部	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	18	長野県松本市	岡田町	4016号住
3	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.18 A	窯01	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	18	長野県松本市	岡田町	4016号住
3	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.18 A	谷	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	19	長野県松本市	岡立条理的遺構	5号住
4	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.18 C		7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	第2号土坑	20	長野県松本市	北栗	SB111
4	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.18 C		7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	21	長野県松本市	南栗	SB98
5	富山県小杉町	小杉流業務団地内遺跡群 No.20	遺構外	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	21	長野県松本市	南栗	SB155
5	富山県小杉町	小杉流業務団地内遺跡群 No.20	遺構外	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	第2号窯覆土	22	長野県松本市	島立南栗	9号住
6	富山県小杉町・大門町	小杉流業務団地内遺跡群 No.21		7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	22	長野県松本市	島立南栗	建9P 279
7	富山県小杉町・大門町	小杉丸山	谷部穴群	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	23	長野県松本市	下神	SB14
8	富山県小杉町	黒河尺目		7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	24	長野県松本市	中二子	SB23
9	富山県小杉町	野田地 A - I 地区	1号墳	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	25	長野県松本市	小原	土232
9	富山県小杉町	野田地 A - I 地区	1号墳	7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	26	長野県塩尻市	吉田川西	SB27
10	富山県井波町	高瀬(穴田地区)		7	石川県高松町	若緑ヤキノ窯跡	灰原	26	長野県塩尻市	吉田川西	SB100
1	石川県珠州市	大島南古墳群	1号墳	8	石川県松任市	東大寺領横江庄	包含層	27	長野県塩尻市	平出	H - 100号住
2	石川県羽咋市	寺家	SBT26	8	石川県松任市	東大寺領横江庄	分布調査区	28	長野県塩尻市	和手	溝1
2	石川県羽咋市	寺家	4F2第2層下包含層	9	石川県辰口町	庄が屋敷B	南西地区	28	長野県塩尻市	和手	SJ20
2	石川県羽咋市	寺家	SB04	9	石川県辰口町	庄が屋敷B	南西地区	29	長野県塩尻市	葛蒲沢窯跡	窯体内
3	石川県押水町	宿向山	第4層包含層	9	石川県辰口町	庄が屋敷B	南西地区	30	長野県岡谷市	柳海途	遺構外
3	石川県押水町	宿向山	南側調査区	9	石川県辰口町	庄が屋敷B	南西地区	31	長野県岡谷市	経塚	1号住
3	石川県押水町	宿向山		10	石川県加賀市	篠原	20号土坑	32	長野県諏訪市	十二ノ后	114号住
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	灰原	10	石川県加賀市	篠原	18号土坑	32	長野県諏訪市	十二ノ后	114号住
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	灰原	11	石川県小松市	林	1号窯	33	長野県目義村	お玉の森	SJ6
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	1号窯内	11	石川県小松市	林	所属不明窯	34	長野県駒ヶ根市	上塩田	D地区 SJ2
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	1号窯内	1	福井県宮崎村	舟場窯跡	灰原	35	長野県上郷町	日影林	SJ2
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	1号窯内	1	福井県宮崎村	舟場窯跡	灰原	36	長野県飯田市	八幡原	5・6号住
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	1号窯内	1	山梨県韭崎市	宮ノ前	3号住	37	長野県飯田市	新屋敷	遺構外
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	1号窯内	1	山梨県韭崎市	宮ノ前	1号溝伏遺構	1	静岡県三島市	伊豆国分寺関連	SJ2
4	石川県押水町	正友ヤチヤマ窯跡	1号窯内	2	山梨県韭崎市	堂の前	5号住	2	静岡県函南町	間宮川向	206号住
5	石川県押水町	冬野	70号土坑	2	山梨県韭崎市	堂の前	5号住	2	静岡県函南市	間宮川向	206号住
6	石川県高松町	八野古窯跡群	2号窯	3	山梨県一宮市	松原	23-1号住	3	静岡県伊豆長岡町	花坂島橋古窯址	2号灰原
				1	長野県飯山市	上野	H-19	3	静岡県伊豆長岡町	花坂島橋古窯址	2号灰原
				2	長野県飯山市	上野	H-22	3	静岡県伊豆長岡町	花坂島橋古窯址	2号灰原
				2	長野県木島平村	蟹沢	SJ2	4	静岡県川津町	春蔵	SJ4
				2	長野県木島平村	蟹沢	SJ3	4	静岡県川津町	春蔵	SJ8
				2	長野県木島平村	蟹沢	SJ3	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				3	長野県長野市	町川田	4号住	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				4	長野県長野市	松原	23号住	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				4	長野県長野市	松原	30号住	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				5	長野県長野市	塩崎小学校地区	SJ48	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				6	長野県長野市	鶴前	SD07	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				7	長野県戸倉市	三島平	SJ13	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				8	長野県上田市	岳の鼻	A-72号住	5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				9	長野県丸子町	稲羽北		5	静岡県湖西町	吉美中村	A地点
				9	長野県丸子町	稲羽北		6	静岡県湖西町	古見	第16地点
				10	長野県東部町	蔵替	SB-16	6	静岡県湖西町	古見	第16地点
				11	長野県望月町	石清水	H19号住	7	静岡県湖西町	殿田	第4地点古窯跡
				12	長野県佐久市	石附窯址群	Ta2	7	静岡県湖西町	殿田	第4地点古窯跡
				12	長野県佐久市	石附窯址群	IZ1	8	静岡県新居町	城ノ前	
				13	長野県佐久市	宮の上II	3号住	9	静岡県細江町	川久保	
				13	長野県佐久市	宮の上II	4号住	10	静岡県浜松市	下滝	SK05
				13	長野県佐久市	宮の上II	3号住	11	静岡県浜松市	伊場	グリッドホ
				14	長野県佐久市	曾根新城I	H6号住	11	静岡県浜松市	伊場	グリッドホ
				15	長野県佐久市	前田	H142号住	11	静岡県浜松市	伊場	
				15	長野県佐久市	前田	H5号住	11	静岡県浜松市	伊場	
				15	長野県佐久市	前田	掘立柱建物址	11	静岡県浜松市	伊場	
				15	長野県佐久市	前田	H48号住	11	静岡県浜松市	伊場	
				15	長野県佐久市	前田	H143号住	11	静岡県浜松市	伊場	グリッドイ
				16	長野県佐久市	栗毛坂遺跡群 B 地区		12	静岡県磐田市	国分寺・国府台	SK1
								13	静岡県藤枝市	秋台	